

「講談社 青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社 青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　　21-6

ムーミン谷の仲間たち

トーベ=ヤンソン

山室　静 訳

1983年5月15日　第1刷発行
1992年6月5日　第14刷発行

（定価はカバーに表示してあります。）

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号112—01

電話　編集部　(03)5395-3536
販売部　(03)5395-3625
製作部　(03)5395-3615

N.D.C. 993　262p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN4-06-147049-3　（児庫）

（落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ=ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以降「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

山室(やまむろ)　静(しずか)

1906年，鳥取市に生まれる。東北大学文学部卒業。元日本女子大学教授。おもな著書に「北欧文学の世界」「アンデルセンの生涯」（毎日出版文化賞受賞）「山室静著作集」（平林(ひらばやし)たい子(こ)文学賞受賞）などがあるほか，児童文学，世界の昔話などに関する著訳書も多い。

られていて、ムーミン童話の特色を生み出しています。本書でも、ムーミン、ヘムレン、ニンニ、ムーミンパパ、スニフたちの心の問題が、さまざまな登場人物の人柄によって取りのぞかれ、みんながそれぞれ、自由を取りもどしています。これらの人柄は、作者ヤンソンさん自身のものであるに違いありません。それは、スナフキンがそうであったように、あくまでも自分に忠実に生きようとする人のものです。自分らしく生きることが、自分と他人の悲しみをやわらげ、喜びを生み出し、自分と他人をより大きな自由へ導いていくのです。

心の底から自由に、しかも、より自分らしく生きるには、自分を愛しぬく覚悟が必要です。そして、このとき、はじめて、人間は、自分がいかに多くの生きとし生けるものたちによって支えられているかを、そして、生きることの喜びや悲しみのなんたるかを、もっとも強く感じるに違いありません。そのしゅんかん、人間は「愛」を手にしているのではないでしょうか。

ヤンソンさんの「愛」の大きさ、深さについては、別の機会に考えたいと思います。

（一九八三・四・四）

をしていける状態で話は終わっています。なんとも心温まる話です。しかし、スナフキンはどうして、もどったのでしょう? この感動の源泉は、はい虫のところへスナフキンがもどろうとしたときにありました。あのときスナフキンは、はい虫がかわいそうだからなぐさめにもどってやろうなどという、余裕のある状態ではありませんでした。また、自分にも非があったのだから謝りにもどろうというような、一種の気軽さもありませんでした。彼は心底苦しんでいました。スナフキンをはい虫のところへもどらせたものは、彼自身の心の中にあったのではないでしょうか。たとえ気分を害されたからとはいえ、心ない態度を取った自分が、自分自身でゆるせなかったのではないでしょうか。あれはほんとうの自分ではなかった、ほんとうの自分は、人を悲しませるようなことはしないぞ、とんでもないことをしてしまったと、心の中で叫び続けていたに違いありません。そして、このままでは、永遠に苦しむことがわかって、はい虫のところへもどっていったのではないでしょうか。スナフキンの苦しみは、自分に忠実に生きようとする者の、自己との闘いだったと思います。彼をもどらせたのは、彼自身の人柄、あるいはそのあらわれとしての生き方、ということになりましょう。

さて、スナフキンが持っているような「人柄」は、ムーミン童話のすみずみにちりばめ

たとえば、本書の冒頭作品をみてみましょう。スナフキンは、約一年ぶりに親友ムーミンに会うのを楽しみに、はるか南の国から長い旅を続けていました。ムーミンに喜んでもらえるような歌を一心に考え、いよいよできあがりそうになったとき、すこしおびえたところのあるはい虫に話しかけられ、歌がすっかりだめになります。はい虫は話し相手がほしかったのですが、あまりのショックで気分をこわしたスナフキンは、どうしてもこころよく応対できません。翌朝、旅を続けても、ムーミンに贈る歌はぜんぜんひらめかず、しまいには病気みたいになって、一歩も歩けなくなりました。

このとき、スナフキンはきびすをかえして、半日かけてはい虫のところへもどり、「きみと話がしたくてもどってきたよ。」というのです。スナフキンは心をこめてはい虫と話をしました。すると、昨夜スナフキンに自分の名前をつけてもらったはい虫は、喜びいさんで、表札を作ったこと、親の家を出て自立するので家を建てていること、自分は今までの自分と違って一個の人格を持ったことなどを、いきいきと話します。その姿を見て、スナフキンの心は晴れました。気持ちよく別れを告げて、明るい気分で旅を続けるスナフキンの口には、つぎつぎとムーミンに贈る歌が生まれてきます……。

ここでは、助け、助けられる関係がありませんし、二人とも、自由に自分のしたいこと

古来、多くの心ある作家たちにもみられ、ヤンソンさん特有のものとはいえません。彼女が多くの作家と違うのは、心を脅かすものを、作品の中で、どのように解決しているかという、その手段・方法にあると思います。

彼女は、問題解決のために英雄・豪傑の力は借りません。平凡な私たちにはとてもできないような、意気に感じた善意・同情・正義感・犠牲的精神・奉仕精神・伝統精神・義侠(ぎきょう)心(しん)・刻苦精励・努力一筋などにたよることもありません。

こうした手段によって問題が解決されるとき、多くの場合、助ける者と助けられる者とが出ます。助ける者の劇的な活躍と、助けられた者の喜びが、読者や見る者を感激させてドラマが終わります。それはそれなりに感激ではあるのですが、助け、助けられたという関係があるかぎり、助かった者は、自立心が強いほど、助けてくれた者に対して、恩義や、返礼・崇拝の念を抱くか、敬意をはらって、自分の生涯を生きていかなければならない立場で終わることが気になります。スナフキンもいっています。「あんまりおまえさんがだれかを崇拝したら、ほんとの自由はえられないんだぜ。」と。

ムーミン童話では、周囲の人々が自分に忠実に生きながら、問題が解決します。だれ一人として、いかなる負い目を感じることがありません。

に、毎日、黙々と仕事にたえ続けるヘムレン。皮肉ばかりいわれて、身体がじょじょに消え、やがて透明になり、そのうえ、遊ぶ、怒る、闘う、笑うことなどができなくなったニンニ。一見してすばらしそうにみえる自由らしきものにあこがれるあまり、ふらふらっと家出するムーミンパパ。いちばんたいせつなものをあたえてしまって、なきくれるスニフたちです。

これらが、私たち人間のさまざまな問題を象徴していることは明らかです。私たちは自分の名前を持ってはいますが、名前などないに等しいあつかいをしたり、受けることがあります。自分に名前があることの意味を考えこむこともあります。話し相手を失う恐ろしさも、愛されない切なさも、世の中が無気味に思えておびえることも、黙々とたえる悲哀も、すっかり自信をなくして存在感を失うことも、やみくもになにかにあこがれるあまり自由を失うことも、物欲と、あたえることの板ばさみに悩むことも、しばしば、私たちの前に、姿や形を変えてあらわれてきます。

このように、心の問題といっても、生きていくうえでだれもが経験することがらをあつかっているところをみると、ヤンソンさんにとっては、生きるものがいきいきと生きられないでいることが、よほど気になるのでしょう。こうした「いのちの躍動」への関心は、

解説…ムーミン童話の五つめのなぞ

高橋静男（たかはししずお）
（フィンランド文学研究家）

　ムーミン童話では、しばしば、不安・心配・悩みごとが題材となっています。それは、大洪水・火山爆発・地震のように生命を脅（おびや）かすものと、のびのびと生きられなくするような、心を脅かすものとの二つに分けられるようです。この二つの題材は、作者が意識して用いているとみてまちがいないほど、しばしばあらわれます。おそらくそこに、ムーミン童話の特色を解くかぎがかくされているはずです。生命を脅かすような題材が描かれる理由については、別の機会（『ムーミン谷の彗星（すいせい）』）に触れましたので、ここでは、後者の場合について考えてみましょう。

　さいわい、本書には、心の問題を抱えている人物が、とりわけ多く登場します。話し相手を失ってしょぼくれ、自分に名前がないことに悲哀を覚えるはい虫。この世の終わりがくるとおびえたり、一族の伝統を守って生きる生活に不満だらけのフィリフヨンカ。心をつくして愛しても、愛してはもらえないムーミン。老齢年金がもらえることだけを楽しみ



「わたし、すこしねむくなったわ。なんのためにこんなことをするんだか、あんまり考えたもので、すっかりくたびれてしまったの。でも、どうやらぶじにすぎたようね。」

こう、ムーミンママがいいました。

「すくなくとも、ぼく、もうクリスマスなんか、こわくないや。きっとヘムルさんや、ヘムルのおばさんや、ガフサ夫人は、なにか考えちがいをしてるんだと思うな。」

と、ムーミントロールはいいました。

そこでみんなは、ヘムルさんの目につくように、あの人の黄色い手ぶくろをベランダの手すりの上におくと、春がくるまでのあいだ、もうひとねむりするために、応接間にもどったのでした。

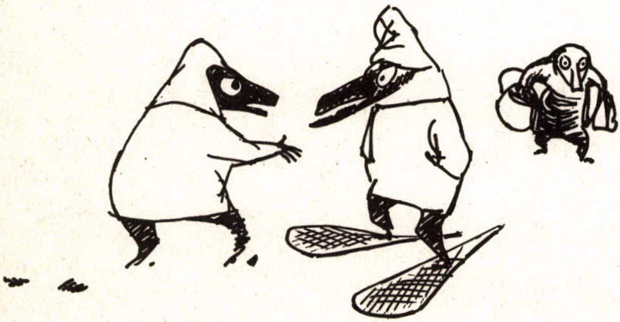
でも、なんにもおこりません。
しばらくたってから、みんなはこわごわと、まどからのぞいてみました。
みると、小さい虫たちがもみの木をかこんで、さかんにのんだり、たべたり、つつみをひらいたりして、さもたのしそうにやっています。しまいには、もみの木によじのぼって、もえているろうそくを、えだにしばりつけるのもいました。
「ただ、あのてっぺんに星があるといいんだがなあ。」
と、はい虫のおじさんがいいました。
「そうでしょうか。」
と、はい虫は答えて、考えぶかそうにムーミンママの赤いきぬのばらを見つめていましたが、さいごにいいました。
「考えさえただしけりゃ、それはあってもなくてもたいしてちがいはないんじゃないですか。」
「わたしたち、あれで星をこしらえるとよかったわね。いまじゃ、もう手おくれだけど。」
ムーミンママは、小さい声でつぶやきました。
みんなは空を見あげました。空はまっ黒で、遠くはなれていました。でも、夏よりも千倍(ばい)も多くの星、信(しん)じられないくらいたくさんの星がでていました。そうして、なかでもいちばん大きいのが、あのもみの木のちょうどま上に光っていたのです。

とうとうムーミンママは、パパのほうにすこしにじりよって、ささやきました。
「ねえ、あなただっておわかりでしょ……。」
「なに？　うん、しかし……。」
と、ムーミンパパははんたいしました。
「かまうもんか。もしクリスマスがおこったら、家へはいって戸をしめちまえばいいんだ。そうすりゃ、たぶん安全だと思うな。」
と、ムーミントロールがいいました。
それからかれは、はい虫のほうをむくと、こういったのです。
「これみんな、きみたちにやるよ。」
はい虫は、さいしょ、じぶんの耳が信じられませんでした。でも、それからそろそろともみの木に近よってきました――さもうれしそうに、ぴくぴくと口ひげをうごかしている、親類や友だちをぞろぞろとうしろにしたがえて。
この人たちはまだ、じぶんたちのクリスマスをもったことがなかったのですものね。
「ぼくらは、そろそろひきあげたほうがいいと思うね。」
と、ムーミンパパが心配そうにいいました。
みんなはベランダにもどると、ドアにかぎをかけて、テーブルの下にもぐりました。


Tove

「そんなことをいったのは、きみがはじめてだよ。きみはクリスマスがきても、ちっともこわくないのかね？」
と、ムーミンパパはききました。
「そうですよ。」
と、はい虫はいって、親類の人たちといっしょに、雪の中にすわりこみました。
「見てもいい？　あんたはとってもすばらしいもみの木をもってるのね。」
「それに、こんなにいっぱいたべものが。」
と、親類のひとりが、うっとりといいました。
「それに、このすばらしいプレゼント！」
と、もうひとりがいいました。
「ぼく、こういうものをすぐ近くから見たいと、一生思ってたんです。」
こう、はい虫はいって、ため息をつきました。
それっきり、しばらくはしいんとなりました。ひっそりした夜の中で、ろうそくがゆっくりともえていきます。はい虫とその親類たちは、じっとすわっています。でも、かれらのこのクリスマスツリーにたいするおどろきとあこがれが、いよいよつよくなっていくのが、ムーミンたちにはひしひしとわかりました。

さつの色のついた本でした。
ムーミントロールのプレゼントは、とてもふんぱつした、ないしょのものでしたから、だれにも見せませんでした。ずっとのちの、春になってからでも、かれはじぶんがプレゼントになにをだしたか、だれにも話しませんでしたっけ。
それからみんなは、また雪の中にすわって、こわいお客さんがくるのを、まちかまえていたのです。
時間はずんずんたちましたが、なんにもおこりません。ただ、紅茶の茶わんをひっくりかえした、あの小さいはい虫が、たきぎ小屋のかげから、でてきただけでした。はい虫は、じぶんの親類の人たちや、そのまたお友だちを、のこらずひきつれていました。みんな、とても小さくて、灰色で、みじめにこごえていました。
「クリスマス、おめでと。」
と、はい虫ははずかしそうにいいました。



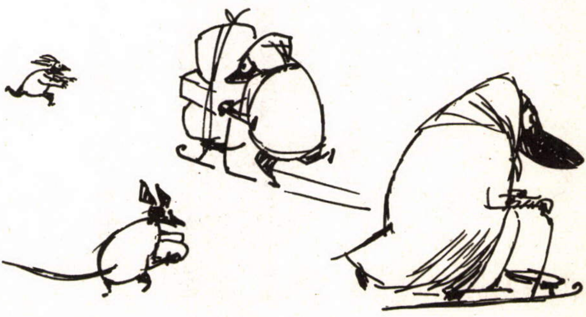
へ歩いていきました。

「まってよ！　おねがいだから、説明して……それにあんたの手ぶくろが……。」

こういってムーミントロールがよびとめようとしましたが、ヘムルさんはやみの中にきえてしまいました——ほかの人たちとおなじようにいそいで。なにしろクリスマスがくるのですから。

そこでムーミン家のものたちは、いそいで家の中に、プレゼントにするものをさがしにいきました。ムーミンパパは、とてもきれいな箱にはいった、いちばん上等の擬餌ばりをえらびました。そして箱の上に「クリスマスさま」と書いて、それを雪の上においたのです。スノークのおじょうさんは、くるぶしかざりをはずして、ちょっとため息をついてから、それをきぬ紙につつみました。

ムーミンママは、ママのひみつのひきだしをあけて、絵の本をとりだしました。これはムーミン谷で、ただ一



「もしもし、あの人はくるんですか。」
と、そっとムーミントロールが声をかけました。
「ぼくのじゃまをしないでくれたまえ。」
ヘムルさんは、ぶあいそうに答えて、なにかの紙きれを見ていましたが、そこには名まえがぎっしりと書かれていて、それがかたっぱしからけされているのでした。
それからヘムルさんは、一本のろうそくのそばにすわると、指をおってぶつぶつとかぞえはじめました。
「ママと、パパと、ガフサさんと、いとこたちと……いちばん上のはつかねずみと……小さいれんじゅうはぬかしちゃおう。それに、スニフも去年ぼくになにもくれなかったし、それから、ミーサちゃんとホムサ、もちろんおばさんもだ……まったく気がちがいそうだぞ。」
「それ、なんのこと？　その人たちに、なにかおこったの？」
と、スノークのおじょうさんが、心配そうにききました。
「プレゼントだよ。」
と、ヘムルさんはどなりました。
「クリスマスがやってくるたびに、おくりものをする数が、だんだんふえていくんだ。」
こういってヘムルさんは、名まえのリストの上に、へたくそな×をひくと、せかせかとむこう

いました。パパはかぜをひきそうに感じて、耳のまわりにもうふをまきつけて、雪の中にすわっていました。だって、小さい動物というものは、自然の大きい力にたいしては、いつだっても、とてもとてもすなおでなくてはいけませんからね。

谷間のまどというまどには、あかりがともっていました。木の下や、えだのあいだの葉には、ろうそくがともされて、そのほのおが、つもった雪の上に、ちらちらとゆれています。ムーミントロールは、なぜあんなにろうそくをともしてるのときくように、パパのほうを見ました。

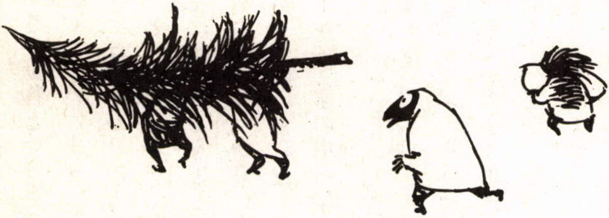
「うん、なにがおこるかわからないから、あらゆるばあいにそなえてるんだろうな。」

と、パパは首をうなずかせていいました。

そこでムーミントロールは、家の中へはいっていって、見つけたかぎりのろうそくをあつめてきました。

それからもみの木のまわりの雪の中に、それをたてならべると、一本また一本と、注意ぶかく火をつけました。とうとうぜんぶのろうそくが、小さな輪をえがいてもえあがりました――くらやみとクリスマスをなだめるかのように。

しばらくすると、谷間のすべてが、ひっそりとしずまりました。たぶん、だれもかれも家にかえって、くるべきものをまっているのでしょう。木々のあいだを、たったひとつ、さびしそうなかげがふらふらと歩いていましたが、それはあのヘムルさんでした。



のものは、こしらえなくちゃすまないよ。」
　こうおばさんはせかせかといって、びゅんびゅん丘をくだっていきました。
　ムーミンママは、午後じゅうはたらきにはたらきました。くらくなるすこしまえに、やっとクリスマスのごちそうができたので、小さいおわんにいれて、もみの木のまわりにならべました。ムーミン家の人たちの大すきな、ジュース、ヨーグルト、こけもものパイ、たまご酒、そのほかです。
「あなた、クリスマスって、おなかをすかしてるでしょうか。」
と、ムーミンママは、すこし心配そうにききました。
「たぶん、ぼくよりひどくはなかろうな。」
　ムーミンパパは、よだれをたらしながらい



「ぼくたちのもみの木を見てよ！」
と、ムーミントロールがよびかけました。
「おやおや。」
と、ヘムルのおばさんはいいました。
「だけど、あんたたちはいつだって、ほかの人たちとは、すこしかわっていたものね。ところで、わたしゃ……まだちっともクリスマスのごちそうを用意してないんだよ。」
と、ヘムルのおばさんはいいました。
「クリスマスのためのごちそうだって？　その人はたべるの？」
と、ムーミントロールはおうむがえしにききました。
　でもおばさんは、ゆっくりきいているひまをもちませんでした。
「いくらすくなくても、正式のお夕飯くらい

「さあ、ちょっとしずかにして、わしに考えさせておくれ。」
と、ムーミンパパがいいました。
「もしもみの木を、できるだけきれいにかざりつけるのだとしたら、おそらくそれは、その中にかくれるためだな。そうやって、きけんをどのようにしてか、やわらげるのにちがいない。すこしずつ、わかってきたぞ。」
　みんなはもみの木を庭のはずれへもっていって、雪の中に、しっかりとたてました。それから、考えつくかぎりのきれいなものをもってきて、それをすみからすみまで、かざりつけにかかったのでした。
　みんなは、夏の花壇につかう大きな貝がらや、スノークのおじょうさんの貝がらのくびかざりで、それをかざりました。応接間のシャンデリアからプリズムをとって、それをえだにぶらさげ、いちばんのてっぺんには、ムーミンパパがずっとむかしにママにおくりものにした、赤いきぬのばらを、ピンでとめました。
　だれもかれもが、じぶんのもっているいちばんきれいなものをもってきて、真冬のえたいの知れない力を、なだめようとしたのです。
　ちょうどもみの木のかざりつけがおわったときに、ヘムルのおばさんが、また箱ぞりにのってとおりかかりました。こんどは、べつの方角をめざして、なおさらいそいでいましたっけ。

がかわいそうに思って、招待したのでした。

「さあ、もみの木はできたぞ。あとは、どうやってこれをつかうのか、わかりさえしたらなあ。ガフサのいうには、これをかざりつけるというんだが。」

と、ムーミンパパはいいました。

「うちには、これにきせるほど大きな服はなくてよ。さあ、かざりつけるって、どうするんでしょうね。」

と、ムーミンママは心配そうにいいました。

「まあ、なんてきれいなもみの木でしょ。」

小さいはい虫はさけびましたが、はずかしがったあまり、お茶をまちがったほうにのみこんでしまいました。じぶんがあつかましくも口をきいたことを、もう後悔していたのです。

「あんた、もみの木をどういうふうにかざりつけるのか、知ってない？」

と、スノークのおじょうさんがききました。

はい虫はすっかり赤くなって、つぶやきました。

「きれいなものでかざるの。できるったけきれいにね。そういうふうに、あたし、きいてるわ。」

でも、はずかしさでいっぱいになって、手で顔をかくしたとき、はい虫は紅茶の茶わんをひっくりかえしてしまい、あわててベランダの戸口から、すがたをけしてしまいました。

さらしだったよ……。」

ムーミンパパはガフサの毛皮のオーバーのえりをつかまえて、もじもじしながらききました。

「もみの木は、いったいどういうふうにつかうんだね？」

「もみの木？」

と、ガフサは、いらいらしていいました。

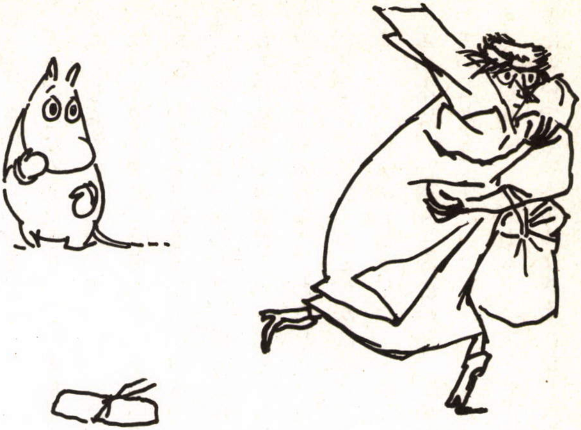
「もみの木？　めんどうだねえ。いや、なんてやっかいな……わたしゃ、まだじぶんのを、かざりつけてないんですよ……とっても、そんなひまがなくて……。」

おばさんは、雪の上にいくつかつつみをおとしました。ぼうしはななめにずりおちているし、あんまりいらいらして、もうなきそうになっていました。

ムーミンパパは頭をふって、もういちどもみの木を、もちあげました。

家ではムーミンママが、シャベルでベランダの雪をかきのけて、そこに救命帯だの、アスピリンだの、ムーミンパパのふるぼけた鉄砲だの、あたたかい湿布のきれだのを、ならべていました。いざというばあいのために、そなえておかなくてはいけませんものね。

小さいはい虫が、紅茶のお茶わんを手にして、ソファーのはしにすわっていました。その虫はベランダの下の雪の中にすわっていたのですが、あんまりあわれなようすをしていたので、ママ



と、ムーミントロールはいぶかりました。
「わしにもわからん。なにがなにやら、まるっきりのちんぷんかんぷんさ。」
こういいながら、パパはなおもおのをふりました。それからもみの木をひきずって、川の近くまでもどってきたとき、小さいつつみや紙ぶくろをうでいっぱいにかかえたガフサ夫人が、むこうからはしってきました。
おばさんは顔をまっかにして、ひどく興奮していたもので、それがじぶんの家のもみの木だとは、気がつきませんでした。ばんざあい。
「いそがし、いそがし！」
と、ガフサ夫人はわめきました。
「しつけのわるいはりねずみなんか、もうけっして招待してやらないぞ……。それから、ついさっきミーサにいってやったように、あれはまったくはじ

ムーミンパパがききましたが、ヘムルのおばさんは、
「いまはいそがしいんだよ。」
と、かたごしに答えたきり、たちまち見えなくなってしまいました。
「くらくならないうちにって、いってたわ。だから、くらくなったらきけんになるのね。」
と、スノークのおじょうさんが、小さい声でいいました。
「それで、おまもりにもみの木がいるっていうのかな。わからんなあ。」
こういってムーミンパパは、考えこみました。
「わたしにもわかりませんわ。でも、もみの木をとりにいらっしゃるなら、毛のくつしたと、スカーフをしていらしてね。わたし、ストーブにどんどん火をたいておきますわ。」
と、ムーミンママは、しとやかにいいました。
ムーミンパパは決心しました——もしそのためにどんなさいなんがおころうとも、じぶんの家のもみの木は、一本もきるまいと。なぜといって、それらの木には、パパはとくべつの愛情をもっていたからです。
そのかわりに、パパとムーミントロールは、ガフサの家のかきねをよじこえていって、おばさんにはいいつかいみちのなさそうな、大きなもみの木を、とってくることにしたのです。
「いったい、この木の中にかくれろっていうんだろうか。」

ませんか。
「これは白いたまごかねえ？」
ムーミンパパはふしぎそうにいうと、その白いわたを手ですくって、じろじろとながめました。
「こんなものが、土からはえたのかしら？　それとも、天からおちてきたのかな？　もしこんなものが、いちどにぜんぶでてきたとしたら、さぞ気持ちがわるいだろうな。」
「だけど、パパ、これは雪ですよ。ぼく、知ってるんだ。それに、これはいちどにふってくるんじゃないのよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ふうん。だけどやっぱり気持ちがわるいな。」
と、パパはいいました。
ヘムルのおばさんが、そのとき箱ぞりにのって、家のそばをとおりかかりました。おばさんは、もみの木を一本もっています。
「あんたがたも、とうとう目がさめたんだね。くらくならないうちに、もみの木をとってきたほうがいいですよ。」
と、おばさんは声をかけました。
「だけど、なぜまたもみの木を――。」

こういってママは、ふとんの下から鼻をつきだしました。
「ぼくもよく知らないんだ。だけど、まだなにも用意ができてないし、なにかがなくなったんだって。それから、みんなが気がちがったみたいにはしりまわってるんだって。きっとまた、洪水になったんだよ。」
と、むすこは答えました。
それからムーミントロールは、そっとスノークのおじょうさんのかたをゆすぶって、ささやきました。
「こわがらなくってもいいけど、なにかおそろしいことがはじまったんだよ。」
「え？　のどかだなあ。じつにのどかなもんだ。」
こういってムーミンパパはおきあがると、とけいをまきました。とけいは十月の何日かでとまっていたのです。
それからみんなは、ヘムルがつけたぬれた足あとをつたって、階段をあがると、ムーミンやしきの屋根にでてみたのです。
空はいつもとかわらずに青々とはれていました。ですから、こんどの事件というのが、火山のばくはつでないことはたしかでした。しかし、ムーミン谷じゅうが、山も、木も、川も、屋根も、みんなぬれたわたでうずまっています。しかもお天気は、四月よりもずっとさむいではあり

です。だれかが、かれのふとんをひっぱって、うんざりしたとか、クリスマスがくるとか、どなっています。

「もう春になったの？」

と、ムーミントロールはつぶやきました。

「春だと？」

と、ヘムルはいらいらしたちょうしでいいました。

「ぼくがいってるのは、クリスマスのことなんだ。わかったかい、クリスマスだぜ。しかもぼくは、まるっきりまだ、したくができていないのに、みんながぼくを、ここへよこしたんだ——きみたちを雪の中からほりだすようにって。ぼくはおかげで、ぼくの手ぶくろをなくしちまったらしい。だれもかれも、気がちがったみたいにはしりまわってるけど、まだちっとも用意ができないんだ……。」

ヘムルはこういうと、また階段をドスンドスンあがっていって、天まどから外へでていきました。

「ママ、おきてよ。なにか、はじまったんだよ。クリスマスとかいうものが。」

と、ムーミントロールは心配そうにいいました。

「なんのこと？」

外がわにひらくのか、わすれてしまったからです。それから、用心ぶかく、その上に足をかけてみました。

とたんに、まどがいきなりうちがわにひらいたから、たまりません。ヘムルはもろに雪とくらがりと、ムーミン一家が屋根うらにつめこんでおいたがらくたをつきぬけて、ころがりおちてしまったのです。

まったく、まいってしまいました。おまけに、どこへあの黄色い手ぶくろをおいてきたのか、よくおぼえていませんでした。あれはヘムルのお気にいりの手ぶくろでしたのに。

そこでヘムルは、ドスンドスンと階段をおりていくと、ドアをバーンとつきあけて、おこった声でどなりました。

「クリスマスがくるじゃないか！　きみたちと、きみたちのねぼうには、まったくいやになっちまうな。クリスマスはもう、あしたにもやってくるんだぞ！」

ムーミン家のものたちは、いつものように、応接間で冬眠していました。かれらは、もはや二、三か月ねむって、これからも春がくるまで、ねむりつづけるつもりだったのです。気持ちのよいねむりが、みんなをゆうらりゆうらりとゆすぶっていました——まるで長い夏の一日の午後のような感じでした。

そこへだしぬけにつめたい風がふきこんできて、ムーミントロールのゆめの、じゃまをしたの

ヘムルのひとりが、屋根の上にのぼって、雪をかきおとしていました。そのヘムルは黄色い毛糸の手ぶくろをしていましたが、しばらくすると、手ぶくろはぬれて、気持ちがわるくなりました。そこで、手ぶくろをぬいでえんとつのてっぺんにおくと、ふうっとため息をついてから、また雪かきにかかりました。

そのうち、とうとう、屋根のではいり口が見つかりました。

「これだ、これだ。」

と、ヘムルはいいました。

下のほうでは、みんながぐっすりとねむっています。ねむってる、ねむってる、ねむってる。クリスマスがくるというので、ほかのものたちはむちゃくちゃにはたらいているのに、なんということでしょう。

ヘムルはではいり口のところで、たちどまりました。そこの天まどがうちがわにひらくのか、

もみの木



フはおおいに評判と名誉を高めたのですよ。作者より）



にしたんだ。それからパーティーをひらいて、つぎにはみなし子たちのために孤児院をたてたんだ。深海にもぐるには年をとりすぎていたけれど、火をふく山は見物したぜ。それからあの人は、アマゾンへでかけたんだ。それっきりおばさんの消息は、ぼくたち、きかないけどさ。」
「そういうことには、お金がかかるんだぜ。あの人はなにもかも人にやっちゃったんだから、なんにももたないはずだろ？」
と、スニフは信用できないといったふうに、実際家らしくいいました。
「やっちゃったかって？　そうさ。」
と、スナフキンはいいました。
「だけど、きみが話をよくきいていたんなら、おぼえているはずだがなあ。あの人は、天蓋つきのベッドをまだ、もってたんだ。そしてこのベッドときたら、ねえ、スニフ、金でできていて、ぎっしりダイヤモンドや玉髄がはめこんであるんだぜ。」
（セドリックについていえば、ガフサ夫人はあの黄玉をむすめの耳かざりにして、セドリックには、かわりに黒いボタンの目をいれてやりました。ある日スニフは、セドリックがわすれられて雨の中にころがっているのを見つけて、家につれてかえりました。月長石は雨であらい流されてしまって、それきり見つかりませんでした。でもスニフは、やっぱりセドリックをかわいがりつづけたのです――いまではただ愛するために愛しているだけでしたけれど。でも、おかげでスニ



シャベルとバケツも、そのてっぺんにのせてさ。」
「おまえはばかだよ。」
と、スナフキンはいいました。
「でなけりゃ、なおわるいことに、お話のぶちこわし屋だ。ぼくが話そうと思ってたのは、ぼくのママのあのおばさんが、おもしろいお話をきいてあんまりひどくわらったもので、おなかからあのほねがとびだして、すっかりなおっちまったことなんだぞ。」
「ああ、そんなことはうそだい。かわいそうなおばさん！」
と、スニフはなき声をだしました。
「かわいそうなおばさんが、どうしたっていうのさ？」
と、スナフキンはききました。
「わからないの？　だって、おばさんはなにもかも、人にやっちゃったんだろ。そうじゃないか、まるっきりむだにさ！　だって、そんならあの人は、けっきょく死ななかったんだろ。それで、しなものはとりかえしたの？」
と、スニフはわめきました。
スナフキンはパイプをぎゅうとかみしめて、まゆをあげていいました。
「おまえはばかな小さいけものだよ。おばさんはぜんぶの持ちものを、ひとつのおもしろいお話

「そうしょっちゅう、じゃまをするんじゃないよ。」
と、スナフキンはいいました。
「この話をしてきかせるには、おまえが小さすぎるってことは、わかったよ。だけどとにかく、おわりまで話しちゃおう。よろしい。あの人のへやは、だんだんと、からっぽになっちまったんだ。そうして、ぼくのママのおばさんは、ただベッドがのこってるだけに、なっちゃったのさ。
　それは天蓋のついてる大きいベッドでね。いくらおばさんの友だちがたずねてきても、みんなそのベッドの中にはいっちまうのさ。いちばん小さい子たちは、天蓋の中にすわるんだ。だれもかれも、すばらしいときをおくるんだぜ。おばさんのただひとつの心配といえば、あの大パーティーのことで、それをひらく時間がないらしく見えたことなんだ。
　みんなは、ひと晩じゅう、ゆうれいの話だの、いろんなおもしろい話をしていたんだ。ところが、ある晩……。」
「わかったよ、わかったよ、あんたもムーミントロールと、まるっきりおなじさ。」
と、スニフはおこったようにいいました。
「それでどういう結果になったか、ぼくは知ってるよ。ある晩おばさんは、じぶんのベッドも人にやっちまった。それで天国へいって、とてもしあわせになったっていうんだ。だからぼくも、セドリックだけでなく、もっているものをぜんぶやってしまうがいいっていうんだろ――ぼくの

なったけどさ。
うん、よしよし。それと同時に、なにかべつのことがおこってきたんだよ。ぼくのママのこのおばさんは、きゅうに夜はねむれるようになったんだ。そうして昼間は、アマゾン川のことを考えたり、深海探検の本をよんだり、だれにも必要がないのに子どもの家の設計図をひいたりしたのさ。それがたのしかったものだから、おばさんはこれまでよりもいい人になってきた。それでみんなは、おばさんとつきあうのがすきになってきたのさ。そしておばさんは思ったんだ——わたし、気をつけなくちゃ。じぶんでなんにも知らないうちに、こんなに友だちばかりできてしまったら、わかいときから空想していたあの大パーティーがひらけなくなってしまうんじゃないか、とさ。

　おばさんのへやは、だんだんひろびろしてきたんだ。ひとつまたひとつと、小包をおくりだしたものね。そうすると、持ちものがすくなくなるにつれて、おばさんの気持ちがあかるくなっていったんだって。さいごには、おばさんはからっぽのへやを歩きまわって、じぶんをふうせんみたいに感じたんだって。いつでもすぐとんでいける幸福な風船みたいにさ……。」

「天国へだろ。」

と、スニフがぶっきらぼうにいいました。

「だから、ぼく……。」

だろう。そうなんだよ。あの人はだれもがその人にいちばんぴったりしたしなもの、その人がゆめに見るようなしなものが手にはいるように、とてもうまあく考えたんだぜ。

ぼくのママのこのおばさんって人は、それからまた、人をおどろかすことがすきだったんだね。あの人は、そういうしなものを、みんな小包でおくりつけたんだよ——しかも、うけとった人には、おくり手がだれだか、ちっともわからないふうにしてさ。なにしろおばさんは、みんながしなものをこわしやしないかとおそれて、いちども家にはこさせなかったんだからね。

その人たちがおどろいて、あれこれと考えたり、だれがおくってよこしたんだろうと想像したりするすがたを考えることが、おばさんにはたのしかったんだってさ。空をとんでいきながら、たちまち人のねがいをかなえてやる妖精みたいじゃないか。」

「だけど、ぼくはセドリックを、小包でなんかおくらなかったよ。それにぼくは、まだ死ぬってわけじゃないんだ!」

スニフは目をぐりぐりさせながら、こうさけびました。

スナフキンは、ため息をついていいました。

「おまえはいつまでたってもおんなじだなあ。まあ、だまれよ。これがおまえの話でないからって、おとなしくきいてることはできないの。それに、ぼくのことだって、すこしは考えてみろよ。ぼくはこのお話を、きみのためにとっておいたんだぜ。ちょいちょい、話がしたくてたまらなく



いるあいだ、ずいぶんたのしい思いをしたんだものな。」
　こういってスナフキンは、はんたいしました。
「あの人には親類がどっさりあったし、もっとたくさんの人を知っていたんだ。きみには友だちがないとしても、そういう人だってあるんだぜ。それであの人は、ひとりひとり、あの男の人はなにがいちばんすきだろうか、あの女の人にはなにがいいだろうなと、みんなの人のことを考えたのさ。それはまあ、たのしいあそびみたいだったそうだよ。
　そうしてあの人は、ばかじゃなかったね。ぼくにはこのハーモニカをくれたんだもの。これが金とローズウッド（かおりのいい木）でできてるってことは、きみはたぶん知らない

こういってスナフキンは、また話をつづけました。
「ある晩、ぼくのママのおばさんは、ねどこについたけれどねむれないで、てんじょうを見つめながら考えていたんだ。おばさんのまわりには、きれいな家具がびっしりならんでいて、その上にはまた、きれいなしなものが、どっさりおいてあるんだぜ。ゆかの上もてんじょうも、手箱の中も、たんすのひきだしも、おばさんの持ちものでいっぱいさ。
と、きゅうにおばさんは、ちっともじぶんのなぐさめにならないそんなしなものの山の中で、息がつまりそうに感じたんだって。そのとたんに、ひとつの考えがうかんだんだ。それがあんまりおかしな考えだったもんで、ママのおばさんは、そこにねそべったまま、わらいだしちまったってさ。おばさんはたちまち元気になって、おきあがってきものをきると、考えはじめたんだ。
どういうことを考えついたかというと、持ってるものをぜんぶ、人にやっちまうことなんだ。そうすれば、もっとらくに息がつけるだけの場所ができるはずだものね。もしおまえのおなかの中に大きいほねがつかえていて、しかもアマゾン川を探検したいと思っているとすりゃ、これこそしなくちゃならないことさ。」
「なんだ、ばかばかしい。」
と、スニフはがっかりしたようにいいました。
「ちっともばかばかしくはないぜ。おばさんはそこにすわって、だれになにをやろうかと考えて

て。わかいときにはおばさんは、アマゾン川を探検したいと思ったこともあるし、深い海にもぐってみることや、孤児たちのために大きいきれいな家をたてることや、噴火している山にのぼることや、友だちぜんぶをあつめて大パーティーをやることや、いろいろ考えてたんだぜ。それなのに、いまではもちろん、みんな手おくれになっちまった。おまけにおばさんには、友だちもいまでは、ひとりもなかったんだって。なにしろおばさんは、きれいなしなものばかりあつめていたんだけれど、こういうことにはひまがかかるものね。

　おばさんは、へやの中をぐるぐるまわりながら、だんだんさびしくなっていったんだって。すばらしい持ちものも、ちっともなぐさめにはならないのさ。それどころか、そういうものをみんなのこして、天国へいかなくちゃならない日のことばかり、考えさせられるんだものね。天国へいったら、なにかあたらしいコレクションをはじめようと、こう思ってみても、どういうわけだか、ちっともたのしくならなかったんだって。」

「かわいそうに！　じゃあ、その人は、ほんの小ちゃなものでも、もっていくわけにはいかないの。」

と、スニフはなき声をだしました。

「そうともさ。そんなことはゆるされるわけがないもの。だけど、まあ、なみだをふいて、もうすこし話をおききよ。」

かかっているからだけれど、それをひっぱりだすことはできませんって。つまり、お医者はもうさじをなげちまったんだね。」

スニフはいくらか話に興味を感じてきて、いいました。

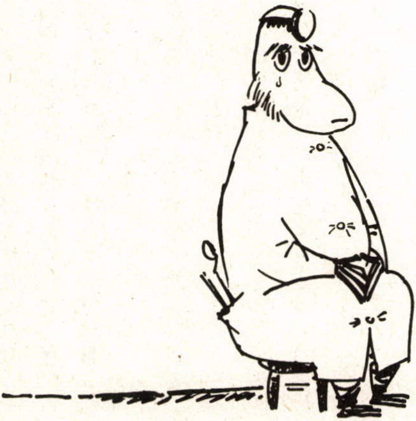
「あんたのいうのは、お医者はもうおばさんが死ぬものと思っていたんだけど、そういう勇気がなかったってこと?」

「まあ、そんなとこだね。」

と、スナフキンはあいづちをうちました。

「だけど、ぼくのママのおばさんは、おどかしがきくたちじゃないんだ。おばさんはお医者に、ではもういくにちわたしはいのちがあるんですかってきいて、それから家にかえったそうだ。二、三週間じゃ、たいしたことはできないよね。

するとおばさんは、きゅうに思いだしたんだっ



の人は子どもがなかったから、たのしみもなければ、くるしめられることもなかった。はたらいたり、食事をこしらえたりする必要もなかった。ほかの人たちがじぶんのことをどういおうと、気にかけなかった。びくびくするたちじゃなかったんだね。それからまた、あそぶ興味もなくしてしまった。一口でいえば、人生にすこしたいくつしたんだね。

それにしてもその人は、うつくしいものたちを愛して、一生それらのものをあつめてきた。それをよりわけ、みがきたてて、いよいようつくしく見えるようにした。じっさい、この人の家に足をふみこむと、だれでもじぶんの目が信じられなかったくらいだったってさ。」

「しあわせな人だなあ。それで、その女の人は、どういうものをあつめたの。」

と、スニフはききました。

「まあ、このうえなくしあわせだったのさ。だけど、たのむから、よけいな口をださないでくれ。さて、ある晩、ぼくのママのこのおばさんが、くらい台所へいってつめたいほねつきカツレツをたべようとしたときに、大きなほねをのみこんじゃったんだ。それからいくにちかのあいだ、どうにもからだのぐあいがわるい。しかもちっともよくならない。そこでおばさんは、お医者へいったんだって。

お医者はむねをコツコツたたいて、聴診器をあてたり、レントゲンにかけたりして、さいごにおばさんにいったんだそうだ――あなたの病気は、とてもわるいカツレツのほねがどこかにひっ

ていきました。お月さまはずっと遠い空の高みで、知らん顔をしていました。
スナフキンはじぶんのテントの外に、すわっていました。
今夜ふいているのは、まとまった曲ではありません。ほんのとぎれとぎれの音楽のきれっぱし――なにか質問をしているか、でなければ、どういったらいいかわからないときに人のたてる、あの小さい音のかたまり、といったものでした。
スニフはだまってかれのそばにすわると、やりきれない気持ちで川の中を見つめました。
「へーイ、きみがきたとはうれしいね。ぼくはここにすわって、きみのうれしがるようなお話を考えていたんだぜ。」
と、スナフキンはいいました。
「今夜はぼく、おとぎ話なんか、きく気になれないな。」
こういってスニフは、なおさらまるまりこみました。
「おとぎ話じゃないよ。じっさいにおこったことなんだ。ぼくのママのおばさんにおこったことさ。」
こういってスナフキンは、パイプをふかしふかし、話しはじめたのです――ときどき足のさきでくらい川のおもてをパチャパチャやりながら。
「ずっとむかし、じぶんの持ちものならなんでもとてもたいせつにする、女の人がいたんだ。そ



でママは、ひと晩ねむって考えてみようと思いました。

夕がたになったので、ママはねどこにつきました。みんなは「おやすみなさい。」をいいあいました。ランプはひとつまたひとつと、けされました。

ただスニフだけはねむれないで、てんじょうを見つめていました。てんじょうには、大きな木のかげが、月の光をあびてうごいていました。あけはなしたまどからは、スナフキンがこのあたたかい晩に川の近くでふいているハーモニカの音が、きこえてきました。

気持ちがあんまりめいってしまったので、スニフはねどこからはねおきると、まどのところにいってみました。それからなわばしごをつたって下におりると、しゃくやくの花が白々とうきだしているだけで、まっ黒なかげばかりの庭をつきぬけて、はしっ

ほうが、たいせつだったかしれません。でも、とにかくスニフはセドリックをかわいがっていたのです。

さて、スニフはセドリックを手ばなすやいなや、むちゃくちゃに後悔しました。たべることもしないし、ねむることもしないし、口さえききません。ただただ、くよくよしているだけなんです。

ムーミンママは、心配していいました。

「ねえ、スニフ、もしあなたがそれほどセドリックを愛していたんなら、ガフサ夫人のむすめなんかでなく、だれかすきな人にやればよかったのに。」

「ぷう。」

といったきり、スニフはかわいそうになきはらした目で、ゆかを見つめていましたが、やがていいました。

「あれはムーミントロールのせいなんだい。あいつがぼくにいったんだ――もしじぶんがほんとうにすきなものを人にやったら、それが十倍にもなってかえってくる。だから、あとで、とてもすばらしい思いをするってさ。あいつ、ぼくをペテンにかけたんだ。」

「まあ、そうなの、そうなの。」

と、ムーミンママはいいました。それよりほかには、いいもんくがうかばなかったのです。そこ

あとから考えると、あの小さい動物のスニフが、どうしてセドリックを手ばなすことをしょうちしたのか、ふしぎに思われるくらいです。

これまでは、スニフはけっして、そういうことをしたことがありません。むしろ、はんたいです。おまけにセドリックは、ほんとにすばらしいいぬなんですからね。

セドリックはいきてはいません。ものなんです――だけどまあ、なんというものだったでしょう。ひと目見たところでは、かれはほんの小さなプラシテン（ビロードの一種）のいぬで、おまけにあんまりかわいがられすぎて、毛がはげていました。しかし、よく見ると、その目はほとんどトパーズ（黄玉）みたいでしたし、くびわのとめ金のそばには、ほんものの小さい月長石をはめていましたっけ。

おまけにその顔には、だれにもまねのできない表情がありました――どんないぬだって、こんな表情はできませんよね。ひょっとすると、スニフにとっては、そんな表情よりも宝石の

スニフとセドリックのこと



いんだ、あいつらは。
「やれやれ、なんておそろしいことだろう！」
　パパはずぶぬれになりながら、ちっともかみなりをおそろしいとも思わず、幸福にあふれていました。
「家にかえったら、けっして電灯はひかないことにしよう。いつまでもふるい石油ランプをつかうんだ。」
　こうパパは、心にきめました。
　じぶんの家族とベランダとが、しきりになつかしく思われました。そうしてパパは、とつぜんにさとったのでした——家にいても、ほんとうのパパがそうあるべきほどには、じぶんはじゅうぶん自由で冒険ずきでいられるのだ、と。



た。

「ぼく、家にかえるよ！　すぐに出発するよ！」

かれは鼻さきを空につきたてて、ぼうしを耳の上までずりさげました。それから浜べまではしっていくと、一そうの白いボートにとびのって、帆をはって、まっすぐにあらしの海へこぎだしたのです。

　ムーミンパパは、もういちどじぶんにもどって、じぶん自身の意見をもったのです。そうしたら家にかえりたくなったのでした。

　ボートがあらしではこばれていくあいだに、パパは思いました――まあ、考えてもみたまえ。よろこぶことも失望することもない。だれかをすきになることも、だれかをおこったりゆるしたりすることもない。ねむることも、さむさを感じることも、まちがいをおかすこともない。はらいたをおこすこともないし、それがなおることもない。誕生日のお祝いをすることもなければ、ビールをのみすぎて後悔することもな

「いけない。ぼくはいったいどうなるんだ？　ぼくはニョロニョロじゃない、ムーミンパパなんだ。……なにをこんなところでしているんだ？」

パパはニョロニョロを見ました。すると電気みたいなかんたんさで、すっかりわかりました――ニョロニョロにいのちをふきこむことは、大夕だちだけができるのです。かれらはぎっしりと充電されているけれど、それがとじこめられていて、どうにもならないのです。感じることもできないし、考えることもできません――たださがすだけなんです。ただ電気のあるところで、ようやくいきることができ、つよくはげしく感じることができるのです。

それこそニョロニョロたちが、もとめているものでした。もしかれらがおおぜいあつまったなら、たぶん、夕だちだってひきよせることができるでしょうよ。

「そうだ、そうにちがいない。」

と、ムーミンパパは考えました。かわいそうなニョロニョロ。それなのにぼくは、ぼくのベランダにすわって、やつらこそすばらしい、自由ないきものだと思っていたんだ――かれらがひとことも口をきかないで、しょっちゅううごいているものだからさ。やつらはひとことだっていうことをもっていないし、いくとこだってどこにもないんだ……。

そのとき空がさけて、雨がどしゃぶりにふってきました、いなびかりの中に白くきらめきながら。ムーミンパパはとびおきました。目をいままでになく青くきらめかして、かれはさけびまし



な、さびしい、うったえるような音です。ムーミンパパは、ニョロニョロとおなじようにしたいという、どうしようもないねがいを感じました。まえにうしろにからだをゆすって、ほえたりぱたぱたやったりするのです。

耳がちくっとしたかと思うと、パパの両手はひとりでにひらひらやりはじめました。かれはたちあがって、ニョロニョロのほうへ歩いていきました。

「ニョロニョロのひみつは、夕だちといっしょになることなんだ。やつらがいつでもあこがれてさがしているのは、夕だちなんだ……。」

こんなふうにムーミンパパは思いました。

島はやみにつつまれ、いなずまは空からまっすぐに島をめがけておちてきました——まるでシューシューいうおそろしい白い液体みたいに。遠くで風がうなりはじめました。つぎにはかみなりがとどろきました。ムーミンパパがいちどもきいたことがないような、すごいかみなりでした。

石をつんだおもたい車が、まえにうしろに、右に左に、ゴロゴロガラガラところがるのです。風はムーミンパパをつかまえて、草の中になげたおしました。

パパはぼうしをしっかりとかかえて、風がじぶんの中をふきぬけていくのを感じていました。そのとき、だしぬけにかれは思いました。

うに見えていました。空の高くには風がふいていて、小さなわた雲を、おびえたようにはしらせています。

だしぬけに海のすぐ近くでいなずまが光り、さっときえたかと思うと、また光りました。

ニョロニョロたちは島の中央にあつまりました。みんなはあらしをまえにした海鳥そっくりに、夕だち雲をまちうけて、南に顔をむけています。そうして、ひとりまたひとりと、いなずまが光るたんびに、小さい電球みたいに光りはじめたのでした。まわりの草も、電気でパチパチいいました。

ムーミンパパは、あおむけにねころがって、まわりのうすみどりの木の葉を見あげていました。くらい雲にうきだした、あかるいうつくしい葉たち。ムーミン谷の家の安楽いすには、ムーミンママがしだの葉をぬいとりしてくれたクッションがありましたっけ。黒いフェルト地にうきだしたうすみどりの葉っぱ。あれはほんとにきれいでしたっけ。

夕だち雲はぐんぐん近づいてきます。ムーミンパパは手によわいショックを感じて、おきあがりました。空気の中に雨がまじっています。

だしぬけにニョロニョロたちが両手をがの羽のようにひらひらさせはじめました。みんな、からだをゆすったり、おじぎをしたり、おどったりしています。さびしい島の上に、かの鳴くようにかぼそい歌がたちのぼりました。ニョロニョロのさけび声でした。びんの口を風がふくよう

むかってうごきだしたのです。

「戦争をする気だな。」

と、ムーミンパパは思いました。すると、きゅうにはっきりと目がさめて、心がひきしまりました。

——たたかうんならたたかうぞ。ぼくよりほかのものはみんな、わるいんだ。なぐりつけてやるかちがある、という気持ちがしてきたのです。

でも、ニョロニョロはけっしてたたかいません。なにかに反対するということもなければ、だれかをきらうとか、なにかの意見をもつということもないのです。

そのうちに、何百というニョロニョロが、みんなムーミンパパのところへやってきて、おじぎをするのでした。そこでムーミンパパも、ぼうしをかしげては、つぎからつぎへとおじぎをかえしました——しまいには頭痛がしてきたほどに。それから何百という手が、こちらにむかってふられるので、パパも、つかれきっていましたけれど、しきりに手をふりはじめました。

さいごのニョロニョロがとおりすぎたときには、ムーミンパパは、たたかおうとしたことなど、すっかりわすれていました。心はすっかりなごやかになって、パパはぼうしを手にしたまま、サラサラいっている草の中をぬけて、みんなのあとからついていきました。

そのあいだに夕だち雲は、高く高く空にのぼっていって、いまにもくずれおちそうなかべのよ

じたような、恐怖におそわれました。そこでパパは、ぼうしをまゆ毛のところまでずりさげて、ひとくせありげで、また同時に気やすく見えるように、つとめたのです。

なにもかもが白くて、ザワザワいっていて、またぼんやりしているこのふしぎな島では、そのぼうしだけがただひとつ、くっきりとした、うごかないものでした。

ムーミンパパは、もうじぶん自身は信用できませんでしたが、そのぼうしだけは、信じることができました。それは黒くて、はっきりしていて、うちがわには「ムーミンママからムーミンパパへ」と、ペンキで書いてありました。だから、世界のほかのシルクハットから、ちゃんと区別することができたのです。

そのうちにさいごのボートも到着して、岸にひっぱりあげられると、ニョロニョロがザワザワいうのも、やみました。するとかれらは、いっせいにムーミンパパのほうに赤い目をむけて、つぎのしゅんかんには、こちらへ



ていきます。
かみなりが、またゴロゴロころがっていきました。それが、大きな大きな黒雲のどこかにかくれたと思うと、その雲が、高く高く、水平線の上にのぼっていきました。
ボートは一そうまた一そうと、入り江にはいって、帆をおろしました。さびしい浜べは、もっとさきにきたニョロニョロたちでいっぱいでした。かれらはそこにたって、おたがいにおじぎをしあっています。
目のとどくかぎり、おごそかなようすをした白いかれらが、そこらを歩きまわったり、右や左におじぎをしたりしているのです。かすかにザワザワいうような音をたてて、たえず手をふっていました。浜べの草が、そのまわりで、なにかささやいています。
ムーミンパパは、ひとりだけはなれて、わきにたっていました。パパはそんなニョロニョロのむれの中で、じぶんのいっしょにきたニョロニョロを、必死になって見わけようとしていたのです。あの人たちを見つけるのが、なによりもたいせつだと思われたのです。パパの知っているのは、そのニョロニョロたちだけでしたから——知っているといっても、ほんのわずかでしたけれどもね。でもやっぱり、知りあいは知りあいでした。
それなのに、そのニョロニョロたちが、人ごみの中に見えなくなってしまったのでした。何百というニョロニョロが、みんなおなじに見えます。きゅうにムーミンパパは、あのくもの島で感

奮するんです。ところがいまは、べつになんとも感じません。まるで平気になっていました。夕だちがすきなようすは、すこしも見えませんでした。

ちょうどそのとき、おおぜいの人ののった一そうのふしぎなボートが、もやの中からあらわれました。ムーミンパパは思わずとびあがりました。いっしゅんのうちに、パパはむかしのムーミンパパにもどって、ぼうしをふってさけんでいました。

ふしぎなボートは、まっすぐにこちらをめがけてすすんできます。船も白いし、帆もまっ白で、のっている人たちも白いのです……。

「うん、わかった。」

ムーミンパパはこういって、またすわりました。二そうのボートは、あいさつもかわさずに、それぞれじぶんのコースをすすんでいきます。

ついで、一そうまた一そうと、黒いもやの中からボートがでてきて、みんなおなじ方向にすすんでいきます。のっているのはニョロニョロばかりでした。七人のっているの、五人の、十一人の、ときにはたったひとりしかのっていないのもありました。いずれにしても、みんな奇数でしたけれど。

もやがはれあがって、かすかに赤みをおびた夕やみがやってきました。海はボートでうずまりました。それがみんな、木も一本もないし、高い断崖もない、ひくい岩しょうのほうへ、むかっ



した。赤みがかったへんな色をした、おもたいもやでした。ムーミンパパは夕だちがせまってくるのを感(かん)じて、すこし元気づきました。
　大きなうみへびたちが遠くのおきのほうで、鼻(はな)をならしながら、さかんにころげまわっていました。そのすがたが、ときたま、ムーミンパパにも見えました。黒っぽいまるい頭、びっくりしてニョロニョロたちを見つめている目、それからしっぽでバチャンとやって、たちまちもやの中に見えなくなります。
「あいつらもくもとおなじに、おそれてるんだな。だれもかれもニョロニョロをこわがってるらしいぞ……。」
と、パパは思いました。
　遠くのほうでかみなりが鳴って、海の上のしずけさをやぶってゴロゴロとその音はころがっていきましたが、すぐまたあたりは、ひっそりとしずまりかえりました。
　ムーミンパパは、いつでも夕だちがくると、ひどく興(こう)

りません。そんなものの思い出が、ちらと頭をかすめて、すこしばかりパパをかなしい気持ちにさせただけなんです——みんなとるにたらない、小さいものの思い出でしたけれど。
じっさいのところ、ムーミンパパは、ぜんぜんあたらしい考えかたをしはじめたのです。いままでのなつかしい生活でであったいろんなことについても、だんだんと考えなくなりました。これからさきがどうなるかということも、あんまり思いわずらいません。記憶にもゆめにもかかわりなしに、パパの思いは、ボートのようにただすべっていきました。ただよっている灰色の波とおなじで、それは水平線につくことさえもねがってはいなかったのです。
ニョロニョロたちに話しかける努力さえ、いつかムーミンパパはやめてしまって、かれらとおなじに、海のほうを見つめているだけでした。かれの目は、空の色をうつして、ニョロニョロの目のように、青白くかわりました。そんなわけで、あたらしい島が見えてきても、パパはもうごきもしないで、しっぽで一どか二ど、船のそこをたたくだけだったのです。
ある日、ものうげにふくらんでくる波のせなかをすべっているとき、ふとムーミンパパの頭の中を、こんな考えがかすめました——。
「ぼくはニョロニョロににてきたんじゃないかな。」
それはひどくあつい日のことでした。夕がた近くになると、海の中からもやがわきだしてきま

るために、水のおもてに顔をだすことだってあるでしょう。だれにだって、わかるものですか。
ニョロニョロたちは、そんな島を、のこらずたずねるのです。ときには、しらかばのまきものが、そこでかれらをまちうけていますし、ときにはなんにもありません。
そんな小島は、いそ波のあいだにのぞいているあざらしのせなかみたいにすべすべのこともあれば、赤い海草がまわりにうちあげられた、ぎざぎざの岩のこともあります。でも、どんな島の頂上にだって、ニョロニョロは、小さい白いまきものをのこしてくるのです。

「ニョロニョロたちには、なにか考えがあるんだ。それはほかのなにものよりも、かれらにとって、たいせつなものなんだ。それをつきとめるまで、ぼくはついていくぞ。」

こう、ムーミンパパは思いました。

それっきり、赤いくもにはぶつかりませんでしたが、いつでもムーミンパパは、ニョロニョロが上陸するときも、船の中にのこっていました。というのは、それらの島が、もうずっと遠くになってしまったほかの島のことを、パパに思いださせたからです。

――みんなでピクニックにいく島、水あびをする青々とした入り江、テント、ボートのわきの日かげでひやしておくバターいれ、すなの中にうずめておくジュースのコップ、お日さまであたたまった石の上にほしてある水泳パンツ……。

そんなぬくぬくしたベランダ生活を、パパがちょっとでもなつかしく思った、というのではあ



そして、どんな返事もまちうけずに、ニョロニョロがやるのをまねて、絶望と後悔の身ぶりで手をひろげて、ためいきをついたのです。

するとその返事に、帆づなが、風でよわく鳴りました。海は世界のはてまで、灰色の波をころがしていました。ムーミンパパは、すこしかなしい気持ちで考えました——。

「もしこれがひどい生活だというんなら、ぼくはむしろ、ぼくのぼうしをたべてみせるぞ。」

島にはいろんな種類のがあるけれど、遠くにある小さい島というものは、みんな例外なしに、さびしくてかなしいものです。風が四方からふきつけるし、黄色い月はみちてはまたかけていくし、海は夜ごとに石炭みたいに黒くなります。それでも島は、いつまでたってもかわりません。ときたまニョロニョロたちが、たずねてくるだけなんです。

それらの島は、ほんとうの島ではないことだってあります。岩しょう・岩・さんごしょう、見すてられたほそ長いみさき——それらは夜があけるまえに水の下にしずんでしまって、夜のあいだにまたまわりのようすを見

のをつかむと、両手でかくすようにして、こっそりとひきよせました。

そのとたんに、びりっとよわい電気を感じたのです。かいちゅう電灯の電池をしたでなめたときくらいの、よわいものでしたけれど、思いがけないショックでした。

パパは気をおちつけるために、長いこと、じっと横になっていました。それからそろそろと、ひみつのまきものをひろげてみました。それはふつうの白いしらかばの皮でした。宝島の地図でもなければ、暗号の手紙でもありません。ただのしらかばの皮なんです。

それはたぶん、すべてのニョロニョロが、さびしい島をおとずれるたびに、あとでくるべつのニョロニョロのためにのこしておく、名刺でもあったのでしょうか。そしてまたかれらがあたえる小さい電気のショックは、うれしい手紙から人がうけるなつかしい感じと、おなじものなのでしょうか。それともふつうのムーミンの知らない目に見えない文字を、ニョロニョロたちは知っているのでしょうか。

ムーミンパパはがっかりして、そのしらかばの皮のまきものをほったらかして、目をあげたのです。

するとニョロニョロたちが、しずかにこちらを見ているではありませんか。ムーミンパパは赤くなって、つぶやきました。

「ぼくらは、とにかく、おなじボートにのってるんだものね。」

いま、その目は灰色で、手はとてもいいかたちをしていました。それが、じっととまっているときのがの羽みたいに、ゆっくりとふるえています。たぶん、なかまのニョロニョロと話をしているか、でなければ、なにか考えているのでしょう。頭はまるくて、首というものがありません。

「長い白いくつしたにいちばんにてるな。」

と、ムーミンパパは思いました。下のほうがすこしすりきれていて、そのはしはひらいています。なんだか、白いスポンジでできてる感じでした。

ムーミンパパは、いままでよりももっと気持ちがわるくなってきました。かれはゆうべのできごとを思いだしてみました。あのくもたち。くもがこわがっているのを見たのは、生まれてはじめてでした。

「やれ、やれ。」

こうつぶやいてパパは、おきなおろうとしましたが、そのとたんに、あのしらかばのまきものが目についたのです。かれはぼうしの下で耳をつねってみました。まきものはあかおけ（船の中の水をくみだすおけ）の中にいれられて、ボートのうごきにつれてゆっくりとゆれていました。

ムーミンパパの船よいは、ふっとびました。手がそろそろとのびました。ニョロニョロのほうをちらと見ると、かれらはあいかわらずじっと水平線を見つめたままです。パパはさっとまきも

それに気がついたのです。それは海がくるくるとまるめて岸になげつけたような、小さいしらかばの皮のまきものでした。

ただそれだけのものなんです。なにかの記録かと思って、人がひらいてみると、中は白くて、きぬのようにすべすべしているだけで、手をはなすと、またくるくるとまるまってしまうんです――ひみつをかくしている小さいにぎりこぶしそっくりに。ムーミンママは、いつもそんなのを、紅茶のポットのえにくっつけていましたっけ。

たぶんそのまきものには、なにかたいせつな手紙が書かれているのでしょう。でもムーミンパパは、そんなものには興味はありませんでした。すこしさむくなってきたので、ボートのそこにまるまって、ひとねむりすることにしました。

ニョロニョロのほうは電気に感じるだけで、さむさなどは感じません。それからまた、ねむることもないのです。

ムーミンパパは夜あけに目をさましました。せなかがこわばっていましたし、寒けもしました。ぼうしのふちの下から、灰色の海がもりあがったり、ひくくなったりするのが見えました。かれは冒険ずきなムーミンにあわしくもなく、すこし船によっぱらっていたのです。

ニョロニョロのひとりが、すぐそばの座席にすわっていたので、パパはこっそりと観察しました。

「きみたちはくもがすきなのか？　すきなのか、そうでないのか？　いますぐ、それをいってくれたまえ！」

それからも長いことだまっていたあとで、ニョロニョロのひとりが一歩まえへでると、両手をひろげました。

たぶんそれは、一種の返事だったのでしょう。それとも、ほんの風のささやきだったのでしょうか。

「これは失礼、わかりましたよ。」

と、ムーミンパパは、あやふやな気持ちでいいました。かれは、ニョロニョロたちが、じぶんたちはくもにたいして、べつに特別の気持ちはもっていません。と説明したのだと感じたのです。でなければ、ニョロニョロとムーミンパパとでは、どうしたって話しあえないのだというかなしい事実を、うったえたのでしょうか。あるいはニョロニョロはムーミンパパに失望して、子どもっぽい人だと思ったのかもしれません。

ムーミンパパはためいきをついて、ふし目になってかれらをのぞきました。そのとき、パパはニョロニョロたちがなにを見つけたか



くもなんて、ちっともいないじゃないの……。」

ニョロニョロたちものろのろとかえってきました。

たちまちくもたちは、びっくりしてとびあがると、一ぴきのこらず、もやいづなをつたって岸にはしりもどっていきました。

ニョロニョロはボートにもどると、船をおしだしました。ボートはくらい島かげから、月の光の中へでていきました。ムーミンパパはほっと安心して、さけびました。

「よかったよ、きみたちがかえってきてくれて。ぼくはしょうじきのところ、あんまり小さくて話をすることもできないくもなんて、どうしてもすきになれないんだ。ところで、なにかおもしろいものを見つけた？」

ニョロニョロたちは、お月さまみたいな黄色い目で、じっと長いことムーミンパパを見ていましたが、なにもいいません。

「なにか見つけたかってきいてるんですよ。もしそれがひみつなら、もちろんきみたちは、ないしょにしたっていいさ。だけど、なにかがあそこにあったってことくらいは、いってくれないか。」

ムーミンパパは、すこしばかり顔を赤くして、こうくりかえしました。

でもニョロニョロたちは、じっとパパを見つめるだけで、おしだまっています。ムーミンパパは、思わずのぼせあがって、どなりました。



ムーミンパパは、こう考えて、ねこみたいに前足をふりながら、ボートにもどりました。いくひきかのくもが、かれのからだにはいあがりました。とてもいやな気持ちでした。

くもたちはまもなくくもやいづなを見つけだして、赤いほそい列になって、それをつたわりだしました。そこからボートのわき板へあがってきます。

ムーミンパパは、ありったけ船尾のほうにすわりました。

まるでなにかゆめを見ている気持ちでした。それからぎょっとして目をさまして、ムーミンママに話しかけました――。

「ねえ、きみにはどんなにこわかったか想像もつくまいよ、そりゃたくさんのくもが……。」

するとママも目をさまして答えるのです――。

「かわいそうなパパ、それはゆめですよ。ここには

けでした。

上陸するとすぐムーミンパパは、とてもふしぎな、ふゆかいな発見をしました。この島は、赤いくもでうずまっていたのです。くもはとても小さいのですけれど、数はかぎりもなくて、いきた赤いじゅうたんみたいに、黒いがけをうずめていました。

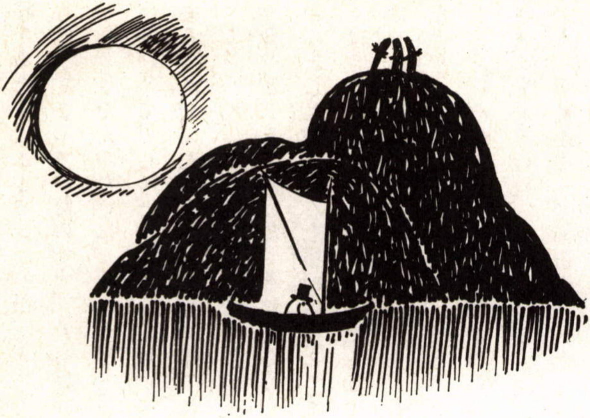
一ぴきだって、じっとしているのはいません。どれもこれもが、ありったけにはしっていました。まるで島ぜんたいが、月の光の中ではいまわっているように見えました。

ムーミンパパは、なんだか、なさけなくなりました。いそいで足をあげ、しっぽをもちあげて、ぶるぶるっとふるいました。それから赤いくものいない場所がどこかにないものかと、あたりを見まわしましたが、そんな場所はひとつもありません。かれはつぶやきました。

「ぼくはきみたちを、ふみつぶしたくないな。やれ、やれ、ボートの中にのこっていればよかったのになあ。……これじゃあ、あんまりだ。こんなにおなじ種類の虫がいるってのは、ふつうじゃないぞ。こいつらはみんな、まるっきりおなじだ。」

ムーミンパパが絶望したようにニョロニョロたちのほうを見ると、がけのずっと上のほうに、お月さまの光をうけた、かれらのシルエットが見えました。ひとりがなにかを見つけたようです。でも、それがなんであるかは、わかりませんでした。

「とにかく、ぼくには関係のないことだ。」



「ぼくのことは気にかけるなよ。」

パパは気分をそこねた声でこういってから、岸によじあがりました。

「ぼくが上陸するのかときいたら、ちゃんと返事をしたらいいじゃない――上陸するってことがもうわかってるとしてもさ。ほんのひとことか、ふたことでいいんだ。そうすりゃ、ぼくもなかまだと感じるもの。」

でも、それはただ口の中で、じぶん自身にむかって、もぐもぐといっただけでした。

がけはけわしくて、足がすべりました。その島は、だれにむかってでもはっきりと、おれに近よるなといっている、ぶあいそうな島だったのです。花もないし、こけさえもはえていないし、なんにもないのです。ただおこった顔をして、水の上につきだしているだ

だめでしょう。そんなことをしたら、ニョロニョロたちは、きっとじぶんたちが考えちがいをしたものと思って、ムーミンパパをふつうのベランダにいるパパと考えるでしょうからね。

ムーミンパパは目をこらして、月の光をあびている、海のむこうの小さい黒いがけのほうを見つめました。

パパはごく単純に考えようとつとめました。むこうの海の中に一つの島があって、お月さまがそのま上にでている。お月さまは水の中をおよいでいる——まっ黒と、黄色と、こんの色。やっとムーミンパパは、心がしずまりました。するとニョロニョロたちも、手をふるのをやめたのです。

島は小さかったけれど、とてもけわしい島でした。水の中からぬっとごつごつした黒い頭をもたげたところは、大きなうみへびの頭に、にていないこともありません。

「上陸するの？」

と、ムーミンパパはきいてみました。

でもニョロニョロたちは、返事もしないで、もやいづなを岸になげると、岩のさけめにはさんでうごかないようにしました。それから、ムーミンパパには目もくれないで、岸によじあがりはじめたのです。かれらが風のにおいをくんくんかいで、それからなにか深いひみつでもありそうに、ムーミンパパをのけものにして、おじぎをしたり、手をふったりしているのが、見えました。

ムーミンママの意見では、そんなひどい生活をしたって、おもしろくはあるまいとのことでした。しかしパパは、そうは思わなかったのです。

「あいつたちはたしかに電気と関係してるんだわ。だから人々の心の中をよみとることができるけれど、そういうことはゆるされないことよ。」

と、ミムラはきっぱりといいました。それから会話は、ほかの方面へうつってしまったのでした。

ムーミンパパは、ちらとニョロニョロのほうをながめました。かれらはまたもや手をふっています。

「やあ、どうにもきみがわるいなあ。やつらはあんな手つきをしてあそこにすわって、ぼくの心の中をよんでいるんだろうか。もちろん、はらをたててるにちがいない……。」

ムーミンパパは必死でそんな思いをおさえつけてしまって、ニョロニョロについて、いままでにきいたことを、のこらずわすれてしまおうとしました。しかし、それはよういではありませんでした。

「あいつたちと話すことさえできたらなあ。」

と、そのときパパは、それだけをねがっていたのです。考えることをしないためには、これがいちばんいい道ですからね。

大きなきけんな問題はあとまわしにして、小さな身近な問題に心をむけてみたって、やっぱり

みつが、じぶんをまっているのです。いまこそムーミンパパは、とうとう自由になったのでした。

かれはニョロニョロみたいに口をつぐんで、神秘なものになろうと、決心しました。人々は、口をきかない人をうやまいます。そういう人は、とてもたくさんのことを知り、とてもすばらしい生活をおくってきたんだと、こう考えますからね。

ムーミンパパは、へさきにすわっているニョロニョロたちをながめました。そうして、きみたちのことはよくわかっているよとばかりに、なにかなかまらしいことをいいたいと思いました。でも、まもなくその考えは、あきらめました。そう、それらしくひびくような適当なことばを、とにかく、さがしだせなかったのです。

ニョロニョロたちについて、ミムラはいったい、なんといったでしょうか。去年の春の、ある日のお昼のときでした。

「ニョロニョロたちは、とてもひどいくらしをしているのよ。」

と、こういったのです。するとムーミンママが、「そういううわさね。」といいました。ところがちびのミイはひどく興味をもって、ひどい生活とはどんな意味か、それを知りたがりました。ところが、ムーミンパパのおぼえているかぎりでは、ひどいくらしをするとは、なにをしていることなのか、だれも説明できるものはなかったのです。それはとにかく、ニョロニョロたちは、なににつけても、らんぼうで気ままな生活をしているらしいのです。

ていねいに。
「ありがとう。」
こういってムーミンパパは、それいじょう説明するのはやめると、みんなをおしのけて、船にはいあがりました。空はあのときとすっかりおなじに、黄色くもえていました。ボートはゆっくりとおきのほうへすすみだしました。
こんなにのんびりとしてたのしい思いをしたのは、ムーミンパパの一生でも、はじめてのことでした。じぶんにたいしても、ほかのものにたいしても、なにをいう必要もなく、なにを説明する必要もないとは、まったくすばらしいことではありませんか。水のピタピタいう音をききながら、ただじっとすわって、水平線を見ていればよかったのですものね。
浜べがきえてしまったころ、まんまるな黄色い満月が、海の上にのぼりました。こんなに大きくてさびしいお月さまを、ムーミンパパは、見たことがありませんでした。海が、いま見ているほど大きくて絶対的だとは、ついぞパパも知らなかったのです。
まったくだしぬけに、パパはこんなことを感じたのでした——この世でただひとつのうごかしがたい真実は、お月さまと、海と、三人の口をきかないニョロニョロをのせた、このボートだけだと。
それから、もちろん、水平線です。はるかに見える水平線では、すばらしい冒険と、名もないひ

のです。かすかなきしりをたてて、そのボートはじゃりの上にのりあげて、とまりました。

ニョロニョロたちはくるりとむきなおって、その青白い目をこちらにむけました。ムーミンパパはぼうしをぬいで、じぶんがどういうわけでここへきたのか、説明しはじめました。パパがしゃべっているあいだに、ニョロニョロたちは、パパのことばにあわせて手をふりはじめました。それを見て、ムーミンパパの頭は、こんがらがってきました。とつぜんじぶんが、水平線だの、ベランダだの、自由だの、ほしくもないのにお茶をのむことだのの長い演説の中に、ぬけだしようもなくからまってしまっているのに、気がついたからです。

とうとうパパは、こまってしまって、話をうちきりました。するとニョロニョロたちも、手をうごかすのをやめてしまったのです。パパは心配になってきて考えました。

「なぜニョロニョロたちは、なにもいわないのだろう。ぼくのいうのが、きこえなかったのかしら。それともぼくを、気がちがったとでも思ってるんだろうか。」

パパは前足をつきだして、なにかききたいことがあるときにたてる、やさしい音をたててみました。けれどもニョロニョロたちは、すこしもうごきません。ただ、かれらの目の色がゆっくりとかわって、夕がたの空みたいに黄色くなっただけでした。

ムーミンパパは前足をひっこめて、ぎごちないおじぎをしました。

と、すぐさまニョロニョロはたちあがって、おじぎをかえしました――三人そろって、とても

でも、ムーミンパパのきいたところでは、ニョロニョロはとてもおとなしくて、けっしてけんかなどはせず、ただ、ありったけ遠くまでいくことを、のぞんでいるだけだということでした。たとえば、世界のはてとか、水平線のところまで――これはたぶんおなじことでしょうが――いきたがっているというのです。

それからまた、ニョロニョロは、ただじぶんのことだけしか考えないとか、かみなりのときには電気をおびるのだとか、いわれました。客間とかベランダに住んでいる人たちにとっては、かれらはきけんななかまで、なにかのときには、きっとなにかをやらかすのだともいわれました。

そういうことをきいていたムーミンパパは、もうずっとむかしから、ニョロニョロたちに、とても興味をもっていたのです。でも、ニョロニョロのうわさをするのは、あまりじょうひんなこととされていなかったので、それらのことがはたしてただしいかどうか、それをパパは、じつはまだ知らなかったのでした。

そんなわけで、ボートがだんだん近づいてくるのを見ると、パパはすっかり興奮して、頭からしっぽの先までが、ぞくぞくっとふるえたものでした。

ニョロニョロたちは、パパの手をふったのにたいしては、べつにあいずをかえしませんでした――かれらがそんな大げさで平凡な身ぶりをしようとは、だれだって思いはしないでしょうがね。それにしても、かれらがめざしているのがムーミンパパであることは、うたがいはなかった

で目をほそくして、べつになんの歌というのでもありませんが、口ぶえをふきながら。

道はのぼりになったり、くだったりしました。木々はぶらぶらとこちらに近づいてきて、かれをとおりすぎていきます。そのかげがだんだん長くなっていきました。

お日さまが海にしずんだとき、ちょうどムーミンパパは石ころだらけの長い浜べにでました。こんな浜べには、道も一本もないし、だれひとりピクニックにこようとするものもないでしょうね。

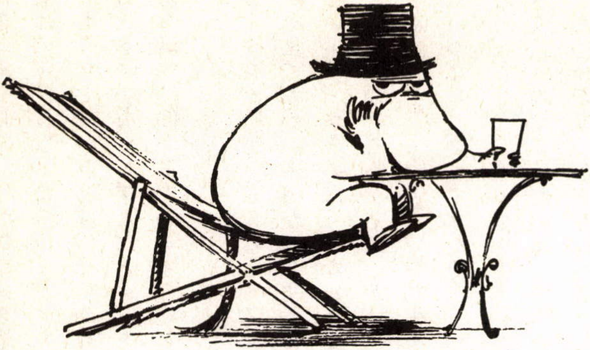
ムーミンパパも、こんなところにきたのははじめてでした。ただ灰色をした殺風景な浜べで、陸がそこでおわって海がはじまっているほかには、なにも話すことはないのです。パパは水ぎわまでいって、おきのほうをながめました。

まったくのところ、それいがいのどんなことがおこりえたでしょうか。――ちょうどそのしゅんかんに、一そうの小さい白いボートが、風をうけてゆっくりと岸にそってすすんできたのです。

「あいつたち、やってきたぞ。」

こう、ムーミンパパはおちついていって、手をふりました。

ボートにのっていたのは、たった三人のニョロニョロでした。みんな、ボートや帆とおなじに、まっ白です。ひとりはへさきにすわり、ふたりはマストを背にしていました。そうやって、三人とも海のほうを見つめていましたが、それまでけんかでもしていたように見えましたっけ。



そのときムーミンパパを、どうしようもないあこがれとメランコリーが、おそったのです。かれがはっきりと感じたのは、

「ぼくはもうベランダでお茶なんかをのんではいられないぞ。」

ということだけでした。その晩だけでなく、それからのちは、いつの晩だってもそうだったのです。

　そういうことがあってから、もうずいぶんたっていました。でも、そのとき見た光景は、どうしてもパパの心をさらなかったのです。そこである夕がた、家をとびだしたというわけでした。

　その日はあつい日でした。しかもパパは、いきあたりばったりに歩いていったのです。

　よく考えたのでもなく、なにかを直感で感じとったのでもありません。かれはただ単純に、お日さまのしずむほうへ歩いていったのです——ぼうしの下

りったけの自由がえられますからね。

そこでムーミンママは、ちっともさわぎたてないで、あたらしいあみものしごとにかかりました。そのあいだにムーミンパパは、はっきりした考えもなしに、ただふらふらと西のほうへすすんでいったのです。

それはパパがあるときの家族ピクニックのときに見かけた、あるみさきに関係していたのです。そのみさきは、まっすぐに海のほうにつきだしていて、空は黄色く、夜がせまってくると、すこしばかり風がでました。それでパパは、そこまでいって、みさきのむこうがわがどんなだか、見ることができなかったのです――家のものたちはそこからひきかえして、お茶にしたがりましたから。ムーミンたちは、いつでも、お天気がわるくなると、家にかえりたがるのです。

ところがムーミンパパは、しばらく浜べにたって、海のむこうを見つめていました。ちょうどそのときに、ななめに帆をあげた小さい白いボートが一そう、みさきの下からまっすぐに海にこぎだすのが見えたのでした。

「あれはニョロニョロたちですよ。」

こう、ヘムレンさんはいいましたが、それだけいえば、あとはなにをいわなくともわかったのです。すこしほっそりして、すこしおくびょうで、はっきりと世間にせなかをむけているいきもの。それははんぶんきけんな、とてもかわった、世すて人たちでした。

ダにすわっていたけれど、だしぬけに、きょうはあつくてたまらない、それに桟橋をすこしなおさなくてはいけないといって、でかけたというのです。

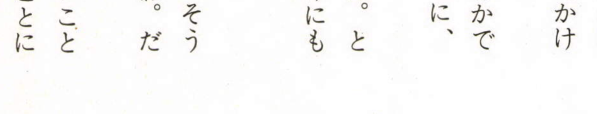
　とにかくムーミンパパが、桟橋をなおさなかったのは、たしかでした。桟橋はもとのとおり、かしがっていましたから。それに、ボートだって、そのままになっていました。

　だからムーミンパパは、歩いていったのにちがいありません。ところが、道はいくつもありましたから、かんたんにさがすわけにもいきませんでした。

　ムーミンママはいいました。

「そのうちにはかえってきますわ。さいしょからあの人は、そういっていたんです。そうして、いつだってかえってきましたわ。だから、きっとこんども、かえってくるでしょうよ。」

　だから、だれも心配しませんでしたが、それはたいへんいいことでした。ムーミンたちはおたがいに、人のことは心配しないことにしているのです。こうすれば、だれだって良心が発達するし、あ



だいぶむかしのことだけれど、ムーミンパパがひとことの説明もなしに、家をとびだしたことがあります――たぶん、パパ自身も、なぜじぶんがとびださなくてはならないか、わからなかったでしょうがね。

ムーミンママがあとになっていうには、

「あの人はしばらくまえから、どこかへんだったのよ。」

ということでした。でも、おそらくパパは、いつもよりもよけいへんだったわけではなかったでしょうね。そんなママのいいぐさは、じぶんの当惑やかなしみや、なぐさめほしさで考えをまぎらすために、あとから考えついた説明にすぎないのじゃないかしら。

だれひとり、ムーミンパパがいつでていったか、はっきりとは知らなかったのです。

スナフキンはいいました――あの人はへムレンさんといっしょに、こいをとりにボートをこぎだしたのだと。ところがへムレンさんのいうところでは、ムーミンパパはいつものようにベラン

ニョロニョロのひみつ





つりあげようとしました。とたんに、どうしたわけかひっくりかえって、どぶんとばかり、頭から海の中におちました。

でも、すぐさまうかびあがって、底に足をつけてたつと、水から顔をつきだしました——両方の耳をどろだらけにして。

「あら、まあ！　なんて、えらいんでしょ。なんて、おもしろいんでしょ。」

と、ニンニはさけびました。

かの女のわらいで、桟橋がぐらぐらゆれました。

「あの子はまえにはわらったことがなかったはずだけどな。」

こうおでぶさんはいって、つけくわえました。

「あんたがたはあの子を、すっかりつくりかえちまったようね。ちびのミイ子より、なおわるくなったわ。でも、かんじんなのは、もちろん、あの子が見えるようになったってことだわ。」

「それはみんな、おばあちゃんのおかげですよ。」

こう、ムーミンママはいいました。



ニンニは桟橋の上につったっていました。もしゃもしゃはえた赤い毛の下に、ししっ鼻をした、小さいおこった顔が見えていました。そうして、ムーミンパパにむかって、まるでねこみたいにふうふううなりながら、さけんだのです。

「おばさんを、こんな大きいこわい海につきおとしたら、きかないから！」

「見えたよ、見えたよ。とってもかわいい子だよ！」

と、ムーミントロールがさけびました。

「まったくかわいい子だわい。」

こういってムーミンパパは、かまれたしっぽをしらべながら、くりかえしました。

「顔があってもなくても、こいつはわしが見たうちでいちばんばかな、いちばん手のつけられない、いちばんしつけのわるい子だな。」

パパは桟橋にひざをついて、ステッキでぼうしを

きこんでいいました。

「まあ、なんてつめたそうなんでしょ。」

それからママはちょっとあくびをすると、もう何週間も、ちっともおもしろい事件がおこらないのねと、つけたしました。

それをきくと、パパはムーミントロールにちょっと目くばせをしておいてから、こわい顔をこしらえて、そっとママのうしろから、しのびよっていきました。

もちろんパパは、わかいころによくやったように、ママを水の中へつきおとそうなどと、考えたのではありません。おそらく、ママをおどかそうとさえ考えずに、ただちょいと、子どもたちをおもしろがらせてやろうと、思っただけなのでしょう。

ところが、パパがママのところまでいきつかないうちに、ひと声するどいさけびがきこえたかと思うと、ピンク色のいなずまがさっと桟橋をはしりぬけました。とたんに、ムーミンパパが、「ぎゃっ。」と、ひめいをあげて、ぼうしを海の中におとしてしまったのです。

ニンニの見えない小さい歯が、ムーミンパパのしっぽに深くくいついていたのでした。それはずいぶんするどい歯でした。

「ブラボー、ブラボー！　あたいがやったって、あんなにうまくはやれないかもしれないわ。」

と、ミイがさけびました。



「はあい。」
といって、おでぶさんはドアをあけると、すぐにききました。
「あの目に見えない子はどうなりました？」
ムーミンパパは答えました――。
「いまはただ顔が見えないだけさ。いまのところちょっとおびえているけれど、じきにおさまるだろう。あんた、ボートをひきあげるんだから、ちょいと手をかしてくれないかね。」
「いいわよ。」
と、おでぶさんはいいました。
ボートを岸にひきあげて、ひっくりかえしているあいだに、ニンニは水ぎわまで歩いていって、ぬれたすなの上にじっとたちつくしていました。みんなはそんなかの女は、ほったらかしておきました。
ムーミンママは栈橋にこしかけて、海の中をのぞ

浜へひっぱりあげておくためです。

いつものとおり、ニンニはすずをチリンチリン鳴らしながら、みんなのうしろについてきました。ところが、海が見えてくると、かの女はとつぜんにたちどまりました。それから、すなの上にはらばいになって、しくしくなきはじめたのです。

「ニンニはどうかしたんだ。なにかにおびえたのか。」

と、ムーミンパパがききました。

「たぶんこの子は、これまで海を見たことがなかったのでしょうよ。」

こうママはいって、たちどまってニンニと小さい声でなにか話していましたが、それからまたたちあがっていいました。

「そうなんですよ。海を見たのははじめてですって。そしてこの子は、海はあんまり大きすぎるっていうんです。」

「あらゆるばかな子どものうちで——。」

と、ちびのミイがいいかけました。

しかし、ムーミンママはきつい顔をしてミイをにらむと、いいました。

「あんたこそ、ばかなまねはしないでちょうだい。さあ、ボートを岸へひっぱりあげましょ。」

みんなは桟橋をわたって、おでぶさんの住んでいる水あび小屋へいき、ドアをたたきました。

おもしろいお話をきいてさえも、ニンニはよろこばないのです。ちょうどいい場所でわらうということもありません。まったくのところ、かの女はわらうということがなかったのです。お話をしたほうにとっては、これはがっかりすることでした。そんなわけで、ニンニは、いつもなかまはずれになってしまったのです。

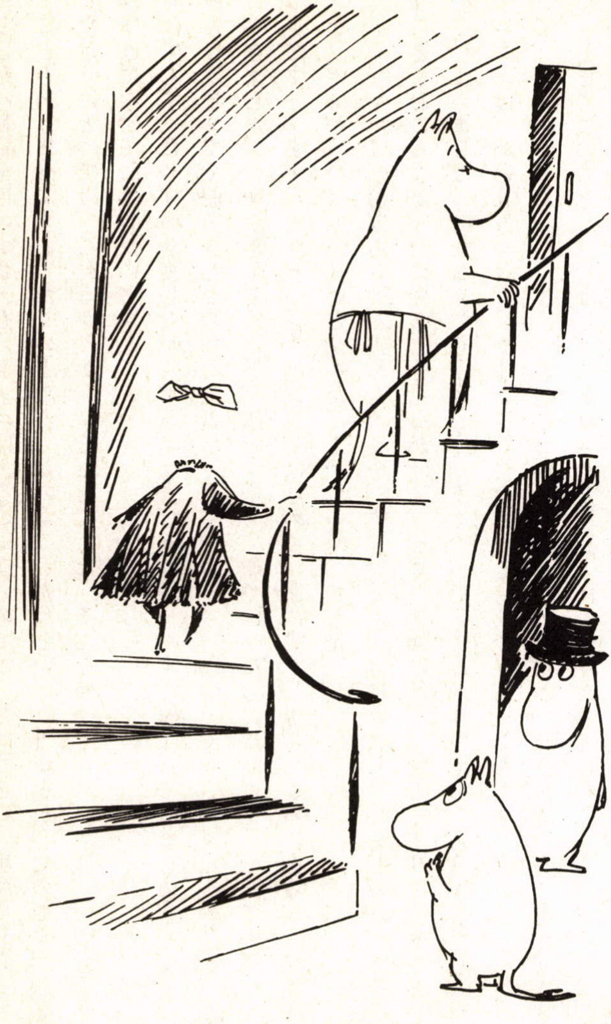
日はずんずんたっていきましたが、ニンニはまだあいかわらず、顔なしでいました。

みんなはピンクの服をきたかの女が、ムーミンママのうしろについて歩くのを見るのにも、なれていきました。ママがたちどまると、銀のすずも、やっぱりたちどまります。やがてまたママが歩きだすと、すずがまたチリンチリン鳴りはじめて、服のすこし上のところにあるピンク色の大きなリボンが、ひょいひょいと空をただよっていくのでした。

ムーミンママは、おばあちゃんのおくすりを、ずうっとニンニにのましていましたが、どうということもおこらなかったのです。そんなわけで、しばらく後には、ママもくすりをやることをやめてしまいました。顔がなくてもけっこううまくやっていった人はいくらもありましたし、たぶんニンニは、あんまりきりょうがよくないのだろうと考えたからでした。

さて、ニンニがどんな顔をしているかについては、めいめいがかってに想像することができました。そしてこのことが、しばしば、かれらの友情を、活気づけたのです。

ある日ムーミン家の人たちは、森をぬけて、海岸へでかけました。冬になるまえに、ボートを



ぶたれたいの？」
と、ミイはどなりました。
「ごめんなさい。」
と、ニンニはおとなしくいいました。
「この子はあそぶことができないんだ。」
と、ムーミントロールはつぶやきました。
「この人はおこることもできないんだわ。」
と、ちびのミイはいいました。
それから、ニンニのそばへよっていくと、こわい顔をしていったのです。
「それがあんたのわるいとこよ。たたかうってことをおぼえないうちは、あんたにはじぶんの顔はもてません。」
「はい、そのとおりですわ。」
こういってニンニは、おどおどとあとじさりしました。

それっきり、事情がよくなるみこみはありませんでした。とうとうふたりは、ニンニにあそぶことをおしえようという考えを、あきらめました。



んとてもおもしろかったのです。でも、ニンニがただおつきあいでやっていて、すこしもおもしろがっているのでないことは、すぐにわかりました。

「はしるのよ、はしるのよ、あんたははしれないの？　それともあんたは、はねることさえもできないの？」

と、ミイはいいました。

　ニンニのほそい足は、いわれたとおりに、はねたりはしったりしました。でも、それからまたかの女は、両手をだらんとさげて、たちどまってしまいます。銀のすずから上のからっぽの服のあたりは、おかしいほどたよりなげに見えました。

「そんな人があると思って？　あんたには、いのちってものがないの？　鼻をピシャンと

もちろん、銀のすずのすこし上あたりを、見ようとはしました。そこらにニンニの目がありそうでしたものね。ところが、どうしてもみんなは、もっと下のほうの、目に見えるものを見つめがちでした。これはなんとしても失礼の気がしましたがね。

ムーミンパパは、せきばらいをしてから、いいはじめました。

「きょうはニンニのからだが、いくらか見えるようになって、われわれはたいへんうれしい。よりおおく見えるようになればなるほど、それだけわれわれは幸福になれるわけで……。」

ミイはわらいだして、テーブルをバーンとさじでぶっていいました。

「あんたが口をききはじめたのは、うれしいわ。なんかあんたは、話すことがあって？　それとも、なんかあそぶことを知ってる？」

「いいえ。でも、あそびのことは、きいたことがあるわ。」

と、ニンニはいいました。

ムーミントロールは大よろこびして、さっそくニンニに、じぶんの知ってるかぎりのあそびをおしえることにしました。

コーヒーをのみおわると、三人はそろって、川のほうへ、あそびにでかけました。ところがニンニだけは、なにひとつできないことがわかりました。かの女はうなずいたり、ぴょこんとおじぎをしたりして、こっちのやるとおりに、いっしょうけんめいにつきあいました。それはもちろ

れて、もうそれほどニンニのことを気にしなくなりました。夕がたまでには、ほとんどわすれてしまったくらいです。

だけれど、みんながねどこにはいってしまうと、ムーミンママはじぶんのピンク色のショールをとりだしてきて、それで小さい服をこしらえました。それができあがると、ママは階段をのぼって東がわの屋根うらべやへもっていって、そっといすの上にのせました。それから、あまったきれで、大きなリボンをこしらえたのでした。

ママはこのしごとをやりながら、とてもたのしい思いをしました。まだむすめだったころに、おにんぎょうのきものをぬったのと、すっかりおなじ気持ちになったのです。しかもおかしなことに、そのおにんぎょうのかみの毛が黒いか黄いろいか、そんなことはまるきり知らなかったのです。

あくる日ニンニは、その服をきました。かの女は、首のところまで見えるようになりました。それから、朝のお茶をのむために下へおりてくると、ぴょこんとおじぎをしていいました。

「みなさん、いろいろとありがと。」

みんなはひどくこまってしまって、だれも口がきけませんでした。おまけに、ニンニに話しかけるにしても、いったいどこを見たらいいのか、それがわからないのです。

と、ムーミンママがいいました。
「そんなら、もう野原へもっていってやらなくても、すむわ。それに、おばあちゃんはいつでもいってたものよ――おまえたちは、大地がなにか役にたつものをそだてることをのぞむなら、秋にはなにかプレゼントをしなくちゃいけないよってさ。」
ニンニの足がまた見えてきました。おまけにその上に、ひょろひょろした二本のすねまでが、あらわれてきたのです。そしてその足の上には、ぼんやりと、茶色の服のりんかくまでが見えてきました。
「あの子の足が見えるよ！」
と、ムーミントロールがさけびました。
「おめでとう！」
と、りんごの木の上から見おろしながら、ちびのミイがいいました。
「わるくないわ。だけど、なぜあんたがそんなじみな茶色の服をきてるか、そりゃモランでもなくちゃ知らないわね。」
ムーミンママはひとりでうなずいて、おばあちゃんとそのおくすりのことを思いだしていました。
ニンニは一日じゅう、みんなのあとを、ついて歩きました。みんなはかの女のすずの音にもな

色が、みんなあざやかに、くっきりとしていました。りんごがみんなもがれたり、ゆすぶりおとされたりすると、ムーミンパパがとても大きいりんごきざみ器を庭にもちだしてきました。こうしてみんなは、りんごチーズをこしらえはじめたのです。

ハンドルをまわす役目はムーミントロールで、ママが器械にりんごをさしこみ、パパがいっぱいになった大びんを、ベランダへはこぶのです。小さいミイは木のえだにこしかけて、「でっかいりんごの歌」をうたいました。

だしぬけに、ガチャン！　という音がしました。

庭の小道に、ガラスのかけらがちかちか光ってまじった、りんごチーズの大山ができました。その山のそばに、みるみるうすくなっていく、ニンニの手足が見えました。

「あら、あれはわたしたちがいつもぶんぶんばちにやることにしてる大びんだわ。」



ムーミントロールはこうミイの耳にささやいてから、ニンニのところへはしっていって、いいました。
「ミイのことなんか、気にかけないこと。あいつは、ハードボイルド（かたゆでという意味で、心のかたい、非情な人をさす）なんだから。ぼくたちのところにいれば、きみはまったく安心なんだよ。あのいやらしいおばさんのことなんか、考えないでいいの。ここへきて、きみをつれていくことなんか、ぜったいにないから……。」
たちまちニンニの手足は色がうすくなっていって、ほとんど草と見わけがつかないくらいになりました。
「ぼうや、おまえはまあ、なんておろかなの。その子に、あんな人たちのことを思いださせちゃ、だめじゃないの。さ、つまらないおしゃべりはやめて、りんごをもいでちょうだい。」
こう、ムーミンママはいいました。
そこでみんなは、りんごをもぎました。
しばらくすると、ニンニの手足はまたはっきりと見えるようになりました。そうして、一本の木によじのぼっていったんです。
それは、きれいにはれた秋の朝のことでした。日かげにはいると、鼻さきがすこしひえましたけれど、日ざしはまるで夏のようだったのです。なにもかもが、ゆうべの雨でぬれて、色という

そのとき、高いりんごの木にのぼっていたママは、こんなことを考えていたのです――わたしだって、あれぐらいのことは考えてたわ。そりゃ、おばあちゃんは、ちょいとしたもの知りだったけれどさ。さあ、これでくすりがきいてきたら、しめしめね。

「そりゃ、よかったな。これで、いつか顔が見えてくりゃ、なおいいんだが。なにせ、見えない人間に話しかけるのは、かなしいもんだからなあ。しかも、あいてはちっとも返事(へんじ)をしないんだから。」

と、ムーミンパパはいいました。

「しいっ、あなた!」

と、ママはしかるようにいいました。ニンニの足が、木の下におちているりんごのあいだにまじって、草の上にたっていたからです。

「おはよう、ニンニ。」

と、ミイが声をかけました。

「あんた、ぶたみたいによくねてたわね。いつあんたは、あんたの鼻(はな)を見せてくれるの。もしあんたが、人に見られないことをのぞむんだったら、ぎょっとするようなすがたをしなくちゃだめね。」

「やめろ、あの子が、気をわるくするじゃないか!」

は、小さいニンニのために、すぐさまそのくすりをこしらえにかかったのです。

すずがチリンチリン鳴りながら、階段をおりてきました――一段ずつ、そして一段ごとにしばらくたちどまりながら。

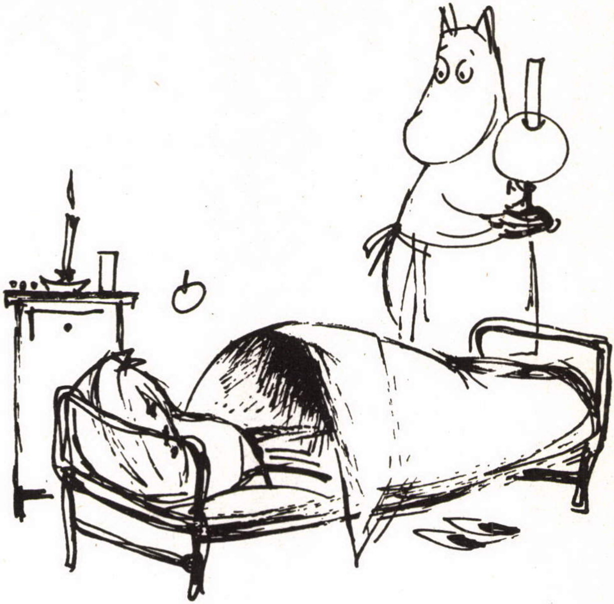
このすずの音を、ムーミントロールは、朝はやくからまっていたのです。ところが、こうふんしたのは、そのすずのせいではありません。足のせいでした。ニンニの足が、階段をおりてきたからです。その足はとても小さくて、足指をいかにもおびえているみたいにまるめていました。ニンニのほかの部分は、ちっとも見えません。なんとも、へんなものでした。

ムーミントロールはせとのストーブのうしろにかくれて、ベランダのほうへでていくその足を、ぽかんとして見ていました。それからニンニは、紅茶をつぎました。お茶わんが空中にあがっていき、それからまた、下におりてきました。それからバターとマーマレードをぬったパンを、すこしばかりたべました。それからお茶わんとおさらが、ふわふわと空をただよって台所にいくと、あらわれて戸だなにはいりました。あなたにもわかったでしょう――ニンニはとてもしつけのいい子どもだったのです。

ムーミントロールは庭へとびだしていってさけびました。

「ママー！　あの子には、足があるんだよ！　見えてきたもの！」

の家では、夜ねるときに、だれでもこれだけのものをもらうんです。
それからママは、ろうそくをともしていいました。
「では、おやすみなさい、ニンニちゃん。すきなだけ、おねぼうしてもいいのよ。朝のお茶は、あんたののみたいときにのめるようにしてあります。もしまた、どうかしてこわくなったり、なにかほしいものがあったら、下へおりてきてすずを鳴らしてね。」
ムーミンママは、かけぶとんがもちあがって、ごく小さい山をつくるのを見ました。まくらがすこしくぼみました。
それからママは、階段をおりてじぶんのへやにいくと、「家庭にかくことのできない常備薬」と書いたおばあさまのふるい手帳をひっぱりだして、目をとおしはじめました。「目をわるくしたとき」「メランコリーの手あて」「かぜぐすり」。だめ、だめ。ママはなおもページをひるがえして、さがしました。すると、とうとう手帳のおわりちかくに、ずっとお年よりになってから、書かれたものなのでしょう、ふるえぎみの字で、
「人々がきりのようになって、すがたが見えなくなってきたときの手あて」
としてあって、二、三行書きくわえてあるのをみつけたのです。
「これ、これ！」
ムーミンママは、さっそくその処方を読みました。なかなかこみいった処方でした。でもママ



るまで、そっとしといたほうがいいわ。」
そこで、そういうことになりました。
ちょうど、東がわの屋根うらべやが、あいていたので、ムーミンママは、そこにニンニのベッドをこしらえてやりました。
じぶんのうしろから、銀のすずがチリンチリン鳴りながら階段をあがってくるのをきくと、ムーミンママは、むかしかっていたねこのことを思いだしました。ママはねどこのそばに、りんごと、コップにいれたジュースと、キャラメルを三こ、おいてやりました。こ

ら、いつかわたしのとこへたずねてきて、この子がどんなふうにやっているか、話してくださいません？　では、さよなら。」
おでぶさんがいってしまうと、家族のものたちは、からっぽのいすと銀のすずを見つめたまま、完全な沈黙におちました。
ところが、そのうちにテーブルの上のきのこの山から、その一本がそろそろともちあがったではありませんか。見えない手が、それをもって、まつ葉や土をとりのぞいているのでした。それからきのこがいくつかにきられたかと思うと、それが空中をうごいていって、おなべの中にはいりました。それからまた、つぎのきのこが、テーブルの上から空中にうかびました。
「すごいなあ！　この子になにかたべるものをやってよ。この子がそれをのみこむときにたべものが見えるかどうか、見たいんだもの。」
と、ミイがおったまげていいました。
「いったいぜんたい、どうしたらこの子を、また見えるようにできるかねえ。医者につれていったもんだろうか。」
こう、ムーミンパパが心配そうにいうと、ママはいいました。
「わたしはそうは思いませんわ。きっとこの子は、しばらくのあいだ、見えなくなっていたいと思ったのよ。おでぶちゃんはいったじゃありませんか。この子ははずかしがりだって。気分がはれ

すずしい秋のにおいが、庭から流れこんできました。雨にぬれた草の上に、光が四角におちました。

しばらくすると、なんだかためらっているような、かすかなすずの音が、外でしました。その音が階段をあがってきて、戸口でとまったかと思うと、ゆかのちょっと上の空中に、黒いリボンにむすびつけられた、小さい銀のすずが見えました。ニンニの首は、とてもほそいらしく見えました。

「だいじょうぶよ。さあ、ここがあなたのあたらしいおうちなの。ここの人たちは、ときたまばかなことをやらかすけれど、おおむねのところは、気持ちのいい人たちよ。」

こう、おでぶさんはいいました。

「その子に、いすをもってきてやれよ。さあ、この子はきのこをきれいにするしかたを知ってるだろうかね。」

と、ムーミンパパがききました。

「ほんとのところ、わたしはニンニについて、なんにも知らないのよ。」

こうおでぶさんはいって、それからいそいでつけたしました。

「わたしはこの子をこちらへつれてきて、わたしの知ってることを、あなたがたにお話ししただけなんです。それに、まだやらなくてはならないしごとが、二つ三つありますの。よろしかった



というじゃないの。」
「それであんたは、その女をどうしてやったの。頭をぶんなぐってやった？」
と、ミイは目玉をぐりぐりさせていいました。
「ああいうひにくく屋の女には、そんなことをしても役にたちません。わたしはもちろん、ニンニを家へつれてきたわ。それでこんどは、あの子をまた見えるようにするために、こちらへつれてきたというわけ。」
と、おでぶさんはいいました。
ちょっとのあいだ、沈黙がきました。ベランダの屋根をうつ雨の音だけがきこえました。みんなはおでぶさんをみつめたまま、しばらく考えこんでいたのです。
「その子は、口はきくのかね？」
と、ムーミンパパがききました。
「いいえ。でも、おばさんがあの子の首に、小さい銀のすずをつけたんです。だから、あの子がどこにいるかは、その音でわかるんです。」
こういっておでぶさんは、たちあがってもういちどドアをあけると、やみの中に声をかけました。
「ニンニ！」

いうことなの。」
「ひにくって、どんなこと？」
と、ムーミントロールがききました。
「そうね、もしあんたが、くさったきのこの上ですべって、とったばかりのきのこのかごの上にしりもちをついたとしたら、とうぜんあんたのママは、おこるでしょ。ところが、そのおばさんはちがうの。おこるかわりに、とてもつめたくいうんです――おまえのじょうひんにダンスをしようって気持ちは、わかりますよ。だけど、人さまのたべものの上でおどってくれるのでないと、ありがたいがね、とかなんとかさ。」
「なんていやなやつだろ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「そうでしょ。」
と、おでぶさんはいいました。
「そういうのが、おばさんの口のききかただったの。毎日毎日、一日じゅうひにくをいわれるものだから、とうとうあの子は青ざめてしまって、はしのほうから色あせていき、だんだん見えなくなったんです。先週の金曜日には、まるっきりすがたがきえてしまったのよ。おばさんはあの子をわたしのところへよこして、見ることさえできないんだから、そんな子のせわはできません

も、だれもはいってきません。
「いいわ、そんなにはずかしがるんなら、しばらくそこにいなさい。」
こういっておでぶさんは、かたをゆすりました。
「そんなところにいたら、ずぶぬれになっちゃいますよ。」
と、ムーミンママはいいました。
「そんなことは、たぶん、苦にならないんだわ。すがたが見えないときにはね。」
こういっておでぶさんは、テーブルのそばにすわりました。みんなはしごとの手をやすめて、かの女の説明をまちうけました。
「あなたたちもごぞんじのとおり、人はあんまりいくどもおどかされると、ときによって、すがたが見えなくなっちまうわね。そうじゃない？」
おでぶさんはこういって、小さい雪のたまみたいなマッシュルームを、ぱくりとのみこんでから、またつづけました。
「このニンニも、おばさんから、ひどくいじめられたわけなの。この人は、ニンニをほんとうはすきでもないくせに、この子のせわをしていたのね。わたし、あったことがあるけど、まったく、いやらしい女だったわ。いっとくけれど、おこりっぽい女ってわけじゃないのよ。それだと、まだしまつがしやすいわね。ところが、このおばさんのいやらしさは、氷みたいなひにくを

みんなは、たのしい沈黙の中に、そのしごとをつづけました。

とつぜん、戸口のガラスまどをかるくたたく音がしたかと思うと、返事もしないうちに、おでぶさんがはいってきて、レーンコートのしずくをふりおとしました。それからおでぶさんは、ドアに手をかけたまま、外のやみの中に声をかけました。

「さあ、はいってらっしゃい！」

「だれをつれてきたの。」

と、ムーミントロールがききました。

「ニンニよ。そう、あの子の名まえは、ニンニっていうの。」

こう、おでぶさんはいって、まだドアをあけたままおさえていました。で



雨のすこしふっている、うすぐらい日の夕がた、ムーミン家の人たちは、ベランダのテーブルをかこんですわって、その日にとったきのこを、きれいにしていました。大テーブルには新聞紙をしいて、そのまん中には火をともした石油(せきゆ)ランプがおいてありました。でも、ベランダのすみのほうは、くらかったのです。

「ミイ子ったら、またべにたけをとってるよ。去年(きょねん)ははえとりたけをとったっけが。」

と、ムーミンパパがいいました。

「来年(らいねん)の秋は、あみがさたけをとるかもしれないわね。でなけりゃ、すくなくともそれほど、どくでないのをさ。」

と、ムーミンママがいいました。

「いちばんいいことを希望(きぼう)して、いちばんわるいことがおこってもおどろくなってさ。」

こういってちびのミイは、くっくっわらいました。

目に見えない子



「どうも、あんまりたのしくやってるらしい音はしないぞ。だけど、だれだってじぶんのすきかってにやるのが、いちばんたのしいんだからな。それに、あのかわいそうなおいは、もともとすこしかわりものだったよ。」

おじさんはそこにあった手まわしオルガンを、もってかえりました。この人はとても音楽がすきだったのです。





でしていたのです。たしかにみんなはたのしくやっていました。
「あすはみんなにいうとしよう。きみたち、わらってもいいし、気がむいたらすこしは歌をうたってもいいよって。だけど、それいじょうはだめだな、ぜったいに。」
ヘムレンさんは、こんなことを考えながら、たんすからおりて、ハンモックにもどりました。もう心配はなかったので、かれはじきにねむりにおちました。

かぎをかけた門の外に、ヘムレンさんのおじさんがたっていました。おじさんはこうしのあいだから中をのぞきましたけれど、ほとんどなにも見えませんでした。おじさんは思いました。


Tove

「かまわないさ。やりたきゃ、空気をパチンパチンやるよ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
それからメリーゴーラウンドの中にはいっていって、「魔法の家」からとってきたお月さまに火をいれました。それからフィリフヨンカさんのハンモックにねそべったまま、てんじょうにあいているあなから、星を見ていました。
外はどこもかしこも、ひっそりしています。近くを流れている小川と、夜風の音が、きこえるだけでした。
そのとき、きゅうにヘムレンさんは、心配になってきました。かれはおきあがって、じっと耳をすましました。もの音ひとつしません。ヘムレンさんは考えました。
「だれもすこしもたのしくないんじゃないか？　ありったけさわいだりしないと、みんなはたのしむことができないんじゃないかしら。……みんな、家にかえっちまったんじゃないかな。」
ヘムレンさんはガフサ夫人のふるだんすの上にとびのって、かべのあなから頭をつきだしてみました。
いや、みんなは家になんかかえっていませんでした。公園じゅうが、ひみつなたのしい生活で、さらさらざわざわ、わきたっていました――パチャンと水のはねる音、くすくすわらう声、ドスンとなにかがおちたようなよわい音、ピタピタだれかの歩いている足音なんかが、そこらじゅう

レンさんはくらしました。それはきらびやかで、つぶれかけていて、だれかがおしつぶしてすてた大きなキャンデーのふくろに、いちばんにていました。

家の中にはばらやぶがしげって、赤い実をいっぱいつけていましたっけ。

あるおだやかなうつくしい夕がた、公園は完成しました。すっかり完成したのです。そのためにヘムレンさんは、いっしゅん、完成のかなしみをあじわったほどでした。

みんなはちょうちんをともして、そのできばえを見ました。

かがみのかけらや、金紙、銀紙が、黒々とした大きな木のあいだで、きらめきました。なにもかもができあがって、お客をまっていました——池・ボート・トンネル・スイッチバック・ジュース売り場・ぶらんこ・とびこみ台、木のぼりをする木、りんご園……。

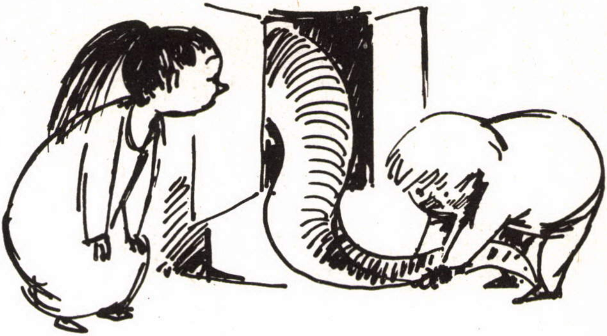
「さあ、できました。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「ただ、このことだけはわすれないようにね——これは遊園地でなくて、沈黙の園なんだよ。」

ちびさんたちは、じぶんたちもてつだってつくったおもしろい公園の中に、ものもいわずに、きえていきました。でも、ホムサはふりかえって、こういってききました。

「パチンパチンやる入場券がないけど、それでもあなたはかまわないの。」



もののストーブの中に、ブラジル産のボア（大へび）がもぐりこんでいるのを見つけました。そのボアはとてもぎょうぎがよかったので、すぐにおばあさんの公園ゆきときまったのでした。

だれもかれもが、このヘムレンさんの遊園地には、ふしぎなものをもちよりました。いきなり、おかしだの、なべだの、カーテンだの、キャラメルなんかを、おくりつける人もいました。朝、子どもたちがくるときに、なにかのおくりものをもたしてよこすのが、みんなのたのしみになったのです。そしてヘムレンさんは、音をたてるもののほかは、なんでもうけとったのです。

でも、門から中へは、子どもたちのほかは、だれひとりはいれなかったのです。

公園は日ましにふしぎなすがたになってきました。そのまん中にあるメリーゴーラウンドの家で、ヘム

それからというもの、みんなは力をあわせてはたらきました。そしてヘムル家の人たちは、どっさりたべものをとどけてくれましたから、子どもたちは一日じゅう公園にいることができたのです。

夕がたには家にかえりましたが、お日さまがのぼるころには、みんなはもう門のまえにきて、まっていました。

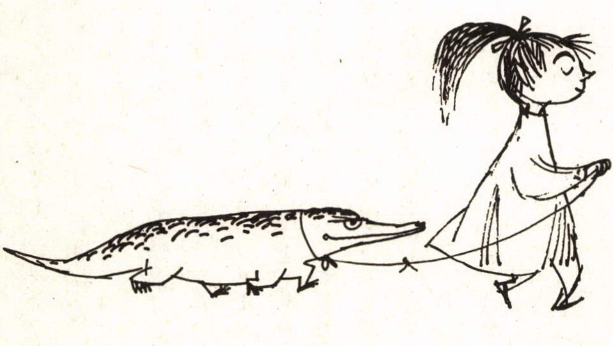
ある朝、子どもたちは、わににひもをつけてひっぱってきました。ヘムレンさんは、うたがわしそうにききました。

「きみ、こいつはおとなしくしてるかしら。」

「だいじょうぶですよ。ひとことだって、いいやしません。いまではにせの頭をおとしてしまったんで、とてもおとなしくて、きげんがいいんです。」

と、ホムサがいいました。

ある日は、フィリフヨンカ夫人のむすこが、せと



ヘムレンさんは、くみたてたりうちつけたりして、はたらきにはたらきました。すると、そうやってはたらいているうちに、心ならずも、このしごとが気にいってきたのです。

木々のこずえでは、何千というかがみのかけらが、風にゆられて、きらきらと光りました。そのてっぺんに、ヘムレンさんは、小さいベンチや、ふかふかした巣をこしらえて、みんながそこにすわってジュースをのんだり、ひとねむりしたりできるようにしました。ふといえだには、ぶらんこをつりさげました。

ローラーコースターの線路には、てこずりました。それはあちこちがなくなって、もとの長さの三分の一ほどになっていたのです。しかしヘムレンさんは、これならだれもこわくなって悲鳴をあげる必要はないわけだと考えて、じぶんをなぐさめました。しかも、さいごのコースでは、ジャブンと川の中へとびこむんです。たいていの人が、これをひどくおもしろがりました。

それにしても、ヘムレンさんがひとりでひねくりまわすには、線路はすこし長すぎました。かたがわをちゃんとさせると、反対がわが地についてしまうのです。ひどくはらをたてて、さいごにヘムレンさんはどなりました。

「だれか、手をかさないのか！　ぼくだって、たったひとりで十のことを、いちどにできやしないぞ。」

子どもたちはかべからとびおりて、はしってきました。

考えました。

それから、きゅうにかべの上を見あげて、どなりました。

「きみたちは、なにをじろじろ見てるんだ。ヘムルの家へかけていって、あの人たちにいってくれ——あしたはぼく、おべんとうはいらないから、そのかわりに、くぎとかなづちとろうそくとなわと、それからあつさ五センチの板をいくまいか、とどけてくれって。大いそぎで。」

子どもたちはわあっとわらって、はしっていきました。

「いわんこっちゃないよ。」

こういってヘムルたちは、おたがいのせなかをぶちあいました。

「やつは、たいくつしたんだ。それで、かわいそうに、むかしの遊園地をなつかしんでるのさ。」

そこでみんなは、ヘムレンさんがいってきたしなものを、二倍もおおくおくりとどけたうえに、一週間ぶんの食事と、きれいな赤いビロードを九メートルと、金紙と銀紙をひとまきずつと、それからねんのために手まわしオルガンをも、とどけさせたのでした。

「いや、オルガンはいらない。音をたてるものは、すべていやだね。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「そうだよね。」

と、子どもたちもいって、手まわしオルガンは外におきました。



いぜ。だめ、だめ！ きみたちなんか、いくらきたって、たすけになりゃしない。」

かべの上からは、はげましや同情のつぶやきが、ふってきました。でも、ヘムレンさんの耳には、ちっともきこえなかったのです。

ヘムレンさんはこんどはメリーゴーラウンドを、一種のカルーセルにつくりかえようとしました。そこで、うまは草の上にたたせ、はくちょうは小川にうかべて、座席はひっくりかえして、毛のついたところがおしりのほうにくるようにしたのです。

「これじゃ、まるでおもちゃの家だ！ けっきょくさいごにできたのが、くずの山の上の安ぴかもので、しかもぎゃあぎゃあけたたましい音をたてるとはなあ……。」

こうにがにがしい思いで、ヘムレンさんは

ヘムレンさんは、こんなことを、いくどもいくどもつぶやきました——あとになるほど、こわい顔をして。それからたちあがると、公園をぬけて門のところまでいき、かぎをあけて、それかられいのがらくたものを、すっかり中へひっぱりこんだのでした。

子どもたちは、ヘムレンさんの公園をかこんでいる高いかべの上に、よじのぼっていました。そのすがたは、ちょっと灰色のすずめににていましたが、すこしも口はききませんでした。

ときたま、だれかが、

「いまごろあの人は、どうしてるだろう?」

というと、もうひとりがいいました。

「しいっ、あの人はおしゃべりがきらいなんだぜ。」

ヘムレンさんは、ちょうちんや紙のばらを木のあいだにつるして、こわれたものやぼろくずになったものは、みんな目につかないところに、おしこみました。むかしのメリーゴーラウンドののこりものをかきあつめて、にたようなものをつくりあげようとしていたのです。でも、のこっていたがらくたたちは、みんなちぐはぐでしたし、はんぶんほどはなくなってしまっていました。

とうとうヘムレンさんは、はらをたててどなりました。

「これじゃあ、だめだ。きみたちにゃ、わからないのか。こんなものは、がらくたの山でしかな



うすで、ヘムレンさんのほうを見ているのです。ヘムレンさんは思わずぞっとして、それを見かえしました。

それから、じぶんの公園ににげもどると、またあずま屋づくりのしごとにかかったのでした。

ヘムレンさんは、はたらきにはたらきました。しかし、どうにもうまくいきません。気がちってしまうのです。と、そのときだしぬけに屋根がおちてきて、小屋はぺしゃんこにつぶれました。

「いや、だめだ。ぼくは、こんなことはいやだぞ。ぼくはたったいま、いやですということを、おぼえたところなんだ。ぼくは老人年金をもらってるんだ。すきなことだけして、ほかのことはやるもんか。」

あくる朝は、ずいぶんねぼうをしました。そんなわけで、門のところへおべんとうをとりにいったときには、もうホムサがきていました。
バスケットのふたの上には、いく人かの子どもがサインをした、手紙がのっかっていました。ヘムレンさんが読んでみると、こんなことが書いてありました。

なつかしい遊園地のパンチャーさま。
あなたにあれはそっくりあげます。あなたはいい人なんだもの。たぶんあなたは、ぼくたちといっしょにあそんでくれるでしょうね。ぼくたち、あなたがすきなんだもの。

なにがなにやら、ヘムレンさんには、ひとこともわかりませんでした。でも、おそろしいうたがいが、ちくちくとおなかをむしばみだしました。
そのとき、かれは見たのです。門の外に、子どもたちが、遊園地からすくいだしたしなものを、つみあげていたではありませんか。
たいした山でした。たいていはこわれたり、ぼろぼろにさけたり、ひっくりかえったりして、見なれないすがたをしています。板っきれだの、カンバスだの、はりがね・紙、赤さびた鉄なんかの、がらくたの山でした。それが、とてもかなしそうに、しかもあんまり期待もしていないよ

とうをいれたバスケットをもってホムサがやってくると、すぐに声をかけました。
「え？　どうなったね。」
ところがホムサは、しょんぼりといいました。
「おじさんたちが、やってくれないんです。遊園地でなくて、スケートリンクをこしらえるんだって。ぼくたちはたいてい、冬には冬眠してしまうのにさ。それに、もしねむらないとしても、スケートはいったい、どこで手にいれたらいいんだろ……。」
「そいつはあんまりだなあ。」
ヘムレンさんはこういいましたが、心の中ではほっとしていたのです。
ホムサはひどくがっかりしていて、返事もしません。バスケットを地において、うしろをむいてしまいました。
――かわいそうな子どもたち。
ヘムレンさんはいっしゅんこう思いましたが、「よし、よし。」とつぶやくと、おばあさんの家のあとにたてるつもりの、木の葉のあずま屋について、さっそく考えはじめました。
その日一日、ヘムレンさんはその建築にかかりっきりで、おおいにたのしみました。くらくなってなにも見えなくなってから、やっとしごとをやめたほどでした。
それからヘムレンさんは、ねむりにつきました――つかれきっていましたが、心はみちたりて。



たちがどんなにはたらいたか、あんたには信じられないでしょ。ぼくたち、すくいにすくったんです。夜こっそりと、雨の中にでていって、水の中や林の中からいろんなしなものをひっぱりだして、かわかしたり、なおしたりしたんですよ。いまじゃ、ほとんど、もとどおりになったの。」

「なにをすくいだしたの。」

と、ヘムレンさんはききました。

「もちろん、遊園地ですよ。」

と、ホムサはさけびました。

「そういってはいいすぎるなら、ぼくたちの見つけることができたもの、あそこにのこっていたもののぜんぶですよ！　すばらしいでしょ。きっとヘムルのおじさんたちは、ぼくらのために、またあれをくみたててくれるでしょ。そしたらあなたももどってきて、また入場券をパチンパチンやれますよ。」

「ううん。」

とうなって、ヘムレンさんはバスケットを土の上におきました。

「すばらしいじゃない？　あなたももとどおりになれるのよ！」

ホムサはこういってわらって、手をふってかえっていきました。

あくる朝、ヘムレンさんは門のところで、わくわくしながらまっていました。そこで、おべん

れるのは、いやだったのです。でも、ヘムレンさんは、人のうったえをききつけていましたから、たちさることもできませんでした。

「あなただって、かなしいんでしょ。あなたはいつも、入場券をパチンパチンやっていたものね。だけど、それがごく小さい、ぼろをきた、きたない子だと、あんたは入場券でなくて、よそのほうをパチンとやったよね。だからぼくたち、二ども三ども、そのふだをつかうことができたんです。」

こう、ホムサが、同情したようにいいました。

「ぼくは、目があんまりよくないんでね。」

ヘムレンさんはこういって説明してから、つづけました。

「家の人たちがまってるよ、おかえり。」

ホムサはこっくりしましたが、それでもうごきませんでした。それどころか、門に近よってきて、鼻をこうしのあいだからつっこんで、小さい声でいいました。

「あんたにおしえてあげるけど、ぼくたち、ひみつをもってるんだよ。」

ヘムレンさんは、おどろいた身ぶりをしました――人がひみつをもっているのも、それをうちあけられるのも、すかなかったからです。しかしホムサは、こうふんして話しつづけました。

「ぼくたち、ほとんどぜんぶすくいだして、フィリフヨンカの小屋に、いれてあるんです。ぼく



ヘムレンさんはうれしそうにいって、門のかぎをあけてバスケットをホムサからうけとりました。それからまた門をしめましたが、ホムサはものもいわないで、そのまま、まえのところにつったっていました。
「きみのほうはうまくいってるかい。」
と、ヘムレンさんはいらいらしていいました。公園にもどりたくてむずむずしていたのです。
「だめなんです。」
と、ホムサはしんけんな顔でいいました。
「ぼくたち、みんなこまってるんです。ぼくたち、ちっちゃいものは、遊園地がなくなっちゃったんで、ないてばかりいるんです。」
「やれやれ。」
と、ヘムレンさんは、じぶんの足をみつめながらいいました。かなしいことを考えさせら

ヘムレンさんは、ちょっとこんなふうに考えかけましたが、その場所のひっそりしたさびしい気分にうたれて、そんなこともわすれてしまいました。

そして、木のみきのあいだにおちている月の光にさわってみたり、いちばんうつくしい木にだきついたりしました。それから葉っぱで花輪をこしらえて、首のまわりにかけてもみました。こんなふうで、さいしょの晩は、ぜんぜんねむる気にもならなかったのです。

朝になると、チリチリと鳴る音がきこえてきました。門のところに、まだおばあさんのふるいベルがかかっていたのです。ヘムレンさんは、心配になりました。だれかが外にたって、はいってこようとしているのでしょうか。だれかがなにかをじぶんに要求するのではないでしょうか。

ヘムレンさんはそっとかべぎわのしげみの下にもぐりこんで、ものもいわないでいました。

ベルがまた鳴りました。首をのばしてみると、とても小さいホムサが、門の外でまっていました。

ヘムレンさんは不安になってさけびました。

「あっちへいきな。ここは私有地なんだ。ぼくが住んでるんだぞ。」

すると、ホムサがいいました。

「知ってますよ。ヘムルのおじさんたちが、あなたのおべんとうをもたしてよこしたんです。」

「やあ、それはありがとう。」

の人たちは、ほんとにいい人たちだなあ。しかも、いまではもう、あんなれんじゅうのことは考えなくてもいいんだ。」

ヘムレンさんは、長い、きらきら光っている草のあいだをぬけていき、木のみきにだきつきました。そうして、しまいには公園のまん中のあき地で、日なたぼっこをしながら、ねむりにおちました。

ここはヘムレンさんのおばあさんの家があった場所なんです。おばあさんの大がかりな花火大会は、とっくのむかしにおわってしまいました。いまではわかい木が、そこらじゅうにはえていました。おばあさんの寝室があったあとは、ばかでっかいばらのしげみになって、赤い実が千もなっていました。

夜になると、大きな星がどっさりでました。ヘムレンさんは、いよいよこの公園がすきになりました。それはひろくて、神秘な感じがして、どうかすると道にまようほどでしたが、それでいていかにもじぶんの家にいるように、くつろぐことができたのです。

ヘムレンさんは、何時間もぶらつきました。

おばあさんの果樹園のあとも見つかりましたが、そこの草の上には、りんごやなしがごろごろころがっていました。

「ざんねんだなあ。ぼくには、はんぶんもたべられないや。いっそのこと、こうしようか……。」


Tove

りわすれてしまいました。ヘムレンさんが、じぶんの家の門をあけてまたしめたのは、生まれてはじめてだったからです。そこはじぶんの家でした。だれかほかの人の家に住むのとは、ちがうんです。

雨雲はだんだん遠くへいってしまい、日がさしてきました。

ヘムレンさんのまわりでは、雨にぬれた公園がしきりにゆげをたて、日にきらめいていました。そこはいかにも青々と、気ままにおいしげっていました。もう長いこと、だれひとり、えだをきったり、木の下をはいたりしたことはなかったのです。木々のえだは土の上までたれ、ばらやぶがたてよこ十文字に、木々にはいあがっていました。みずみずしい草のあいだを、おばあさんが生前に庭にみちびいておいた小川が、さらさらと流れていました。

ヘムルたちは、この小川のせわは、それっきりしないで、ただじぶんたちのことにばかり、かまけていたのです。それにしても、道はもう草にうずまっていましたけれど、小川にかけた小さい橋は、まだたいていくずれおちないでいたのです。

ヘムレンさんは、この青々した、なつかしいしずけさの中へ、まっしぐらにとびこんでいきました。そして、その中でおどり、その中をころげまわって、いままでになかったほど、わかがえった気持ちになったのでした。

「ああ、とうとう年をとって、年金をもらうというのは、なんてすばらしいんだろ。ぼくの親類

ことなんです。

さて、ヘムレンさんは、いまはじぶんのものになったおばあさまのむかしの公園に、でかけていきました――かぎをポケットにいれて。

その公園は、おばあさまが花火で家をやいてしまって、よそへひっこしてしまってからというもの、だれにもつかわれないで、しめきりになっていました。

それはずっとむかしのことでした。ですからヘムレンさんは、公園へいくには、どういけばよいのか、すこしは不安だったのです。

木々はすっかり大きくなっていて、道も小道も、水につかっていました。ヘムレンさんがそんな道をばしゃばしゃやっていくと、八週間まえに雨がきゅうにふりはじめたのとおなじに、きゅうに雨があがりました。でも、ヘムレンさんは、そんなことには気がつきませんでした。じぶんのゆめがうしなわれてしまったのに、すっかり心をうばわれて、もはやおもちゃの家をこしらえる気持ちにもなれないのを、かなしがっていたからです。

そのうちに、公園のかべが見えてきました。一部分はくずれていましたけれど、そのかべは、まだとても高かったのです。門はもうさびついてしまっていて、あけるのがとてもやっかいでした。

ヘムレンさんははいっていくと、門にまたかぎをかけました。おもちゃの家のことは、すっか

ヘムルたちはあんまりわらったので、とうとうそこにすわりこまなくてはなりませんでした。
それからみんなは、さかんにひじでつっつきあって、さけびました。
「おもちゃの家だとさ！　あんた、きいた？　おもちゃの家だってよ！」
そしてまたなみだがでるほど大わらいして、ヘムレンさんにいうのでした。
「ねえ、ぼうや、おまえのすきなようにおし！　おまえに、おばあさまの大きい公園をやるとしよう。たぶんあそこは、いまじゃ墓場みたいにしずかだよ。おまえがほっつきまわって、すきかってなことをしてあそぶには、もってこいの場所さ。じゃあ、元気でな。うまくいくことをねがってるよ！」
「ありがとう。あなたがたが、いつでもぼくのためを思っていてくださることは、よくわかりました。」
こういってヘムレンさんは、すこし身をかがめました。
しずかなうつくしいへやがいくつもある、おもちゃの家というヘムレンさんのゆめは、きえてしまいました、親類のヘムルたちにわらいとばされて。しかし、だからといって、まったくのところ、その人たちがべつにわるいのではありません。その人たちだって、だれかがヘムルたちのおかげで一生をだいなしにしたというのをきいたら、心からかなしく思ったことでしょうね。それにまた、心の中のいちばんひみつなゆめを、すこしでもはやめにもらすのは、とてもきけんな

のしくやっているものと信じていたのに。」
と、親類の人は、こまったようにいいました。
「お話しする元気がなかったんです。」
と、ヘムレンさんはいいました。
　それをきくと、みんなはまた大わらいをしました。ヘムルたるものが、ただはらをきめることができなかったばかりに、じぶんのすきでもないしごとを一生つづけなければならなかったのを、とてもおもしろいことに思ったのでした。
「わかったわ。で、これからはどうしようというの。」
と、母かたのおばさんが、ゆかいそうにたずねました。ヘムレンさんは、小さい声でいいました。
「ぼく、じぶんでおもちゃの家をたてようと思うんです。世界一きれいなおもちゃの家なんです。いくつもいくつもへやがあって、それがみんなからっぽで、しいんとしていて、おごそかなんです。」



トのカーテンだぜ！　あそこにうかんでるのはおどり場のゆかさ！　あそこにまっ黒いこうもりが五ひきいるが、あれはフィリフヨンカの家の屋根にあったおばけの家からにげてきたんだよ！ゆかいじゃないか！」
　みんなは、このうえない上きげんで、つぶれてしまった遊園地のかわりに、スケートリンクをはじめることにしました――もちろん、氷がはってからの話ですけれどね。そうして、
「しごとがまたはじまりしだい、きみをもういちど入場券にはさみをいれるかかりにしてやるよ。」
といって、ヘムレンさんをなぐさめました。それなのにヘムレンさんは、だしぬけにいいました。
「いや、いや、いや、ぼくはそんなものになりたくありません。ほしいのは、老人年金ですよ。これからはぼく、じぶんのしたいと思うことをしたいんです。どこかしずかな場所で、まったくのひとりぼっちでくらしたいんです。」
「だがね、いとしいおいよ、そりゃいったい、どういう意味だね。」
と、おったまげたおじさんのひとりがいいました。
「いまいったとおりですよ、すみからすみまで。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「じゃあ、なぜまえにそれを話さなかったんだね。わしらはいままでずっと、きみはけっこうた

それらの光景の上に、子どもたちのなき声がたちのぼったのです。子どもたちはじぶんたちの両親を、絶望におしやりました。それというのも、遊園地がなくなってしまったのをかなしむことのほかには、なんにもしなかったからです。

ふき流しやしぼんだ風船が、木々からぶらさがっていました。「幸福の家」はどろでうずまり、頭が三つあるわには、海までおよいでいってしまいました。あとには、頭が二つだけのこっていました――なにしろ、それはにかわでくっつけてあっただけでしたから。

ヘムルたちは、これらのことをすべて、すばらしいじょうだんととりました。かれらはまどのところにたって、そっちを指さしてわらっては、たがいにせなかをぶちあって、さけびました。

「ほら、あそこに流れていくのはアラビアン＝ナイ





あげてまがってしまうし、メリーゴーラウンドはしだいに大きな灰色(はいいろ)の池や水たまりにかわってしまい、さいごには、雨でできたあたらしい川におし流(なが)されてしまいました――かすかにチンカラチンカラ音をたてながら。

すべての小さい子どもたち――はい虫やホムサやミムラのなかまたちは、毎日毎日、まどガラスに鼻(はな)さきをくっつけては、かれらの七月が水びたしになり、いろんなうつくしい色も音楽も、水に流(なが)されていくのを、かなしそうにながめているのでした。

「かがみのへや」はくずれおちて、何百万ものぬれた破片(はへん)になり、「ふしぎの庭(にわ)」の雨にぬれたピンク色の紙のばらは、何百となく水にうかんで、ぷかぷかとはたけのほうへ流(なが)れていきました。

と、おじさんはいいました。
しかし、花火はとうとうあがらなかったのです——その午後から、大雨がふりだしましたから。雨はその晩と、つぎの日一日ふりつづき、そのつぎの日もまたふって、とうとうつぎの週まで、もちこしたのでした。
しょうじきにいって、その雨は、中やすみなしに、八週間ぶっつづきました。こんなひどい雨は、だれひとり、ついぞ知らなかったのです。
遊園地はすっかり色あせ、雨にうたれた花みたいに、しぼんでしおれていきました。それは青ざめ、さびついて、それからのろのろとくずれていきました——なにしろ、すなの上にたっていましたものね。
ローラーコースターの線路は、うめき声を



まして、なきわめくのです。するとヘムレンさんは、手まわしオルガンを鳴らして、そんな赤ちゃんたちをあやしてやるのでした。

あまった時間は、ヘムルがうようよ住んでいる大きな建物の、どこか人手がいりそうな場所へでかけていって、手をかしてやります。ですから、いつなんどきでもかれのまわりには、にぎやかなとりまきができて、みんながわれがちにわいわいと、考えたことや、したことや、計画していることを、ヘムレンさんに話すのでした。ただ残念なことに、みんなはヘムレンさんに、ちゃんとした返事をする時間を、あたえてくれません。

「ぼくは、もうじき年よりになるでしょうか。」

あるときヘムレンさんは、お昼のときに、こういっておじさんにきいてみました。

「年よりに？　おまえが？　とんでもないよ。元気をだすんだ、元気をだすんだ。年をとるのは気持ちからだぜ。」

と、おじさんは大きな声をだしました。

「でも、ぼくはほんとにもう年をとったと思うんですが。」

と、ヘムレンさんは、なにかうれしそうにいいました。

「ちぇっ、ちょっ！　おれたちは今夜、とくべつじかけの花火をあげるんだぜ。それに、夜があけるまで楽隊もやるんだ。」



チンパチンとやっていました。そうして、できるだけはやく、年をとりたいものとねがっていたのです。

　メリーゴーラウンドはまわり、トロンボーンはいせいよく鳴り、毎晩ローラーコースターの中では、ガフサやホムサやミムラたちがきゃあきゃあいっていました。エドワード大王は、せとものこわし大会で、一等賞をもらいました。どこでもかしこでも、ゆめ見るようなかなしい顔つきをしたヘムルたちが、おどったり、さわいだり、わらったり、けんかをしたり、たべたりのんだりしていました。だんだんとヘムレンさんは、そうやってうかれているさわがしいれんじゅうを、ひたすらおそれるようになっていきました。

　かれはいつも、ヘムルの幼児引受所でねることにしていました。そこは昼間はあかるくて気持ちのいい場所でしたけれど、夜になると赤ちゃんが目をさ

しかしヘムレンさんは、じぶんの気持ちを説明していいました。
「ぼくはけっして、さびしくなんかないんです。そんな時間だって、ありません。いろんな人が、ぼくをおだててくれますけれどさ。お気にさわるんでなければ、ほっといてくれませんか……。」
「こりゃあ、たいしたもんだ。」
こういって、親類の人は、ヘムレンさんのせなかをどやしました。
「それがかんじんの点さ。けっしてさびしくない。いつでも全力をつくしてる、とね。」
ヘムレンさんはあいかわらず、偉大なおどろくべき沈黙のことをゆめ見ながら、入場券をパ



てきかせた説明でした。

この人には、とても親類がおおかったのです。おたがいにあいてのせなかをたたいては、わっはっはと気がちがったみたいにわらうような、とても大きな、ようきでおしゃべりのヘムルが、うんといたのです。

そんなヘムルたちが、共同でその遊園地をやっていて、ひまなときには、トロンボーンをふいたり、ハンマーなげをやったり、おもしろい話をしたり、人をおどかしてよろこんだりしていたのです。でも、それはみんな、世の中のためにたちたいという、りっぱな心がけでやっていたことなんですよ。

しかし、ヘムレンさんその人は、役員ではなかったのです。つまり、ヘムルの一族としては傍系で、はんぶんしか親類でなかったからです。そんなわけで、どんなしごとにも、またどんな人ともとくべつな関係ができないで、いつでも赤ちゃんのおもり役とか、メリーゴーラウンドの大きなかごのせわなんかをしていたのです。たいていのときは、入場券をパチンパチンやっていましたがね。

「あんたはろくなしごともなくて、さびしいだろ。すこし人に手をかして、みんなとつきあったら、元気がでるんじゃないかね。」

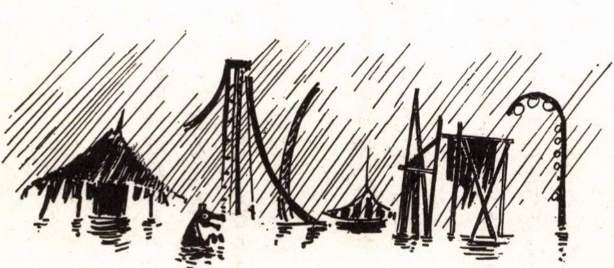
ほかのヘムルたちは、いつもこんなふうに、なれなれしくいうのでした。

ずっとまえのことですが、一ぴきのヘムルが遊園地につとめていました。遊園地だからといって、そうそうおもしろいことがあるわけはないのです。このヘムル――ヘムレンさんとしておきましょう――の役目は、おなじ入場券を二回もつかわれないように、それにパチンとあなをあけることだったのです。こんなしごとは、もし一生これをやらなくてはならないのだとしたら、だれだって、まったくかなしい気持ちにさせられますよね。

ヘムレンさんは、パチンパチン、パチンパチンと、あきるほどやりました。そうやってはさみをいれながら、いつでも空想するのでした――さいごに年金をもらうようになったら、それからはなにをしようかな、と。

年金がどういうものだか知らない人があるといけないから、説明しておきましょう。それはあなたが年よりになったときに、だれにもじゃまされずに、すきなようにしてくらすことのできるお金なんです。すくなくともそういうのが、ヘムレンさんの親類のものが、ヘムレンさんにいっ

しずかなのがすきなヘムレンさん



「たぶん、きみのいうとおりかもしれない。にげていってしまって、それでいいんだろうね。うん、そうだ。ぼく、そう思うよ、スナフキン。おや、きみはあたらしいうきをこしらえたね。水によくうつるじゃないの。赤くてさ。」
「わるくないね。きみにもひとつ、つくってあげよう。あした、つりをするつもりかい？」
と、スナフキンはききました。
「もちろんさ。きまってるじゃないの。」
と、ムーミントロールはいいました。



う、ムーミントロールがききました。
「あいつ、やみの中でも光る?」
「だれのこと?」
「うん、りゅうのことさ。ああいう虫が、やみの中でも光ったらおもしろいだろうと思って、ちょっときいてみたのさ。」
「ぼくは知らないなあ。じぶんで家へいって、見てごらんよ。」
と、スナフキンはいいました。
「だって、ぼくははなしてやったんだぜ。きみのところへこなかったの?」
と、ムーミントロールはさけびました。
「へえ、こないね。」
と、スナフキンは、パイプに火をつけながらいいました。
「小さいりゅうなんてものは、気まぐれだからねえ。きみも見たとおり、あちこちとびまわって、もしふとったはえでも見つけようものなら、ほかのことはすべてわすれちまうんだ。りゅうなんて、そんなものさ。とてもつかまえておけるもんじゃないね。」
ムーミントロールは、ずいぶん長いこと、おしだまっていました。それから草の上にすわると、こういいました。

「うん。うん。うん。」
ヘムルはこういって、かどをまがってきえていきました。
「あいつ、きっといくどか、指（ゆび）にやけどをするな。うまくいけばいいが。」
こうスナフキンは、心の中で思いました。

お日さまがしずんでから、ムーミントロールがやってきました。
「やあ！」
と、スナフキンはいいました。
「やれ、やれ。」
と、ムーミントロールは、元気のない声でいいました。
「つれた？」
「まあね。きみもすわらない？」
と、スナフキンはいいました。
「いや、ぼくはちょっととおりかかっただけだから。」
と、ムーミントロールはいいました。
それっきり、ふたりは口をつぐみました。ばつのわるい、手もちぶさたの沈黙（ちんもく）でした。とうと

いって、どこかいい場所にすててくれたまえ——はえがたくさんいそうな場所にさ。ぼうしを巣らしく見えるようにたたんで、このりゅうがおちつけるように、やぶの下かなんかにおしこんでくれればいいんです。」

「りゅうだって？　かみつきやしない？　たべものはいくどやればいいんだね？」

と、ヘムルは信じられないといったふうに、ききました。

　スナフキンはテントの中へはいっていくと、ふるい紅茶わかしをもって、もどってきました。それから、ひとつかみの草をその中にしいて、その上に注意ぶかく、ねむっているりゅうをのせてから、ふたをしっかりしめていいました。

「つぎ口から、ちょいちょいはえをいれてやってください。それから、水もときどき、二、三たらしずついれてやってよ。紅茶わかしがあつくなっても、心配ありません。さあ、これでよしと。二、三日うちには、かたづきますよ。」

「うぐい五ひきにしちゃ、わりのあわないしごとだぜ。」

　こうヘムルは、ふくれっつらをしていって、もやいづなをひっぱりよせました。ボートは流れにのって、くだりはじめました。

「ぼうしのことをわすれないでね。ぼくのだいじなぼうしなんだから。」

と、スナフキンは遠くからさけびました。



夕がたちかく、一そうのボートが、川をくだってきました。のっていたわかいヘムルが、ききました。
「つれたかね？」
「まあね。遠くまでいくの？」
「そんなとこさ。」
「つなをこっちへほうりなさいよ。さかなをすこしあげましょう。ぬれた新聞紙にくるんでやくと、わるくないですよ。」
と、スナフキンはいいました。
「で、きみのほうはなにがほしいの？」
と、おくりものをもらいつけていないヘムルはききました。
　スナフキンはわらって、りゅうがねむっているままのぼうしをぬいでいいました。
「ねえ、こいつをできるだけ遠くまでもって

そうはいっても、それが役にたたないことは、よく知っていたのです。どんなことがあったたって、りゅうはかれのそばをはなれないでしょう。しかも、こいつは百年もいきるのです。

スナフキンは、じぶんの注意をひこうとしていっしょうけんめいになっている、この小さいきらきら光っている動物を、すこしばかりかなしそうにながめて、いいました。

「うん、うん、おまえはいいやつさ。いっしょにつれていったら、さぞおもしろいだろうな。だけど、おまえにゃわからないのか、ムーミントロールがあそこで……。」

りゅうはあくびをすると、スナフキンのおんぼろのぼうしのふちにとまって、まるまりこんでねむってしまいました。

スナフキンはためいきをついて、つりばりを川になげこみました。あたらしいうきが、赤いあざやかな色をして、流れの中でういたりしずんだりしました。ムーミントロールが、きょうはつりをする気になれないことは、よくわかりました。モランが、こんないざこざは、みんなさらっていくといいんです……。

時間はどんどんたっていきました。

小さいりゅうは、ときどきとびたってははえをつかまえて、またぼうしにもどってねむりました。スナフキンはうぐいを五ひきと、うなぎを一ぴきつりましたが、うなぎには手をやいたので、また水にはなしてやりました。

た。
かれは戸口にいって、ドアをあけました。いなずまみたいにりゅうは、かれのそばをはしりぬけて、外へとびだしました。
「まあ！　もう二どとつかまらないわよ。なぜだしてやったの？　わたし、まだろくろく見なかったのに！」
と、スノークのおじょうさんがさけびました。
ムーミントロールは、歯をくいしばっていいました。
「スナフキンのとこへいってみるさ。あいつ、きっとあの人のかたにとまってるよ。」
「まあ、ぼうや。わたしのかわいいトロールったら！」
と、ママはかなしそうにいいました。

りゅうがとんできてかたにとまったとき、スナフキンはまだつりざおをとりだしたばかりでした。りゅうはスナフキンをもういちど見つけたうれしさで、からだをくねらせました。
「こいつはまったくかわいいやつだわい。」
スナフキンはこういって、りゅうをおいたてようとしました。
「しっ。あっちへいけ。家へおかえり！」



「りゅうというものは、人々の意識から、ほぼ七十年まえにきえてしまったのだ。わたしは百科事典であたってみたがね。いちばんさいしょにほろびたのが、つよい発火器官をもった感情的な種類だったとさ。やつらはとくにがんこで、ぜったいに考えかたをかえないからね。」

「コーヒーをごちそうさま。ぼくは二階へいきますよ。」

こういってムーミントロールは、席をたちました。

「ぼうや、おまえのりゅうは、ベランダにだしておいたままでいいの？　それとも、おへやへつれていきますか。」

と、ムーミンママがききました。

ムーミントロールは、返事をしませんでし

ちょっとした沈黙が、その場をおとずれました。

「なにをちびさんがぺちゃくちゃやってるんだか。」

こういってスナフキンは、テーブルからたちあがりました。

「一、二時間のうちにゃ、こいつがどこに住みつくか、わかるだろうさ。そら、とんでいけよ、おまえの主人のとこへ！」

しかしりゅうは、またもやスナフキンのかたにとまって、六本の足のつめでしっかりとそこにしがみつきながら、まるでミシンみたいにブルルルをやりつづけました。スナフキンは親指と人さし指でそれをつまみあげると、コーヒー茶わんの下におしこみました。それからガラス戸をあけて、庭にでていってしまいました。

「これじゃ、息がつまっちゃうぞ。」

ムーミントロールがいって、茶わんをすこしもちあげてやりました。りゅうはいなずまみたいにとびだしてくると、まっすぐにまどのところへとんでいって、前足でまどガラスにとまりながら、じっとスナフキンを見おくりました。

しばらくすると、りゅうはしくしくやりはじめました。そうすると、金色をしたからだが、首のところから尾のさきまで、灰色にかわってしまったではありませんか。

そのときムーミンパパが、沈黙をやぶっていいました。

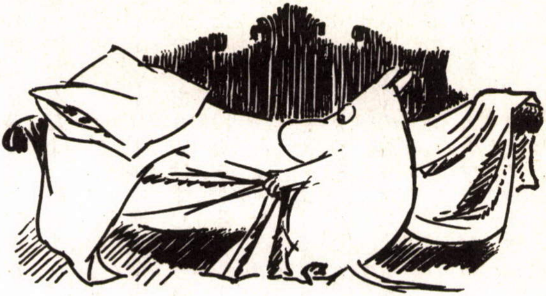
と、ムーミンママは心配しました。
「もちろんよ。もうすこし大きくなるまで、まっててごらんなさい。あたいたちの家だって、もやしてしまうから。」
こういってミイが、おかしのかけらに手をのばしたとたんに、いきなりりゅうは、小さい金色のいかりの女神みたいにミイにとびついて、その足にかみつきました。
「ちくしょう！」
こうどなって、ミイはナプキンでりゅうをぶちました。
「そんなことをいうと、おまえはけっして天国へいけませんよ。」
と、ミムラねえさんが、さっそくいいました。
それをさえぎって、ムーミントロールがさけびました。
「りゅうがわるいんじゃないよ。りゅうはただ、きみがおかしにたかったはえをとろうとしてる、と思っただけなんだい。」
「あんたとあんたのりゅうときたら！」
と、前足をひどくやけどしたミイは、さけびました。
「でも、あんたのせいじゃないわね。これはスナフキンのせいよ。このりゅうがすいているのは、スナフキンだけだもの。」

かされました。
りゅうはベランダのテーブルの上の、スナフキンのコーヒー茶わんのそばにすわって、前足をなめていました。かれは、スナフキンをのぞいたすべての人間に、かみつきました。そして、なにかにはらをたてるたびに、どこかしらにあなをあけるのでした。
「なんてかわいいいんでしょう。名まえは、なんていうの。」
と、スノークのおじょうさんはいいました。
「とくべつの名はないさ。ただのりゅうだもの。」
こういってムーミントロールは、用心ぶかくテーブルごしに手をのばして、金色をした一本の小さい足にさわりました。すると、すぐさまりゅうは、ぐるぐるテーブルの上をまわって、かれにむかってシューシューいって、小さいけむりの雲をはきかけました。
「まあ、かわいいのね。」
と、スノークのおじょうさんはさけびました。
りゅうはテーブルの上にのっていたスナフキンのパイプのところへはしっていくと、鼻をくんくんさせてにおいをかぎました。かれがすわっていた場所のテーブルかけには、ふちが茶色にこげたまるいあながあきました。
「ビニールびきの布だって、やけこがしてしまうんじゃないかしら？」

と、ムーミントロールはさけびました。
「わかってるよ。」
スナフキンはこういってから、上をむいていいました。
「そんなにとびはねないで、しずかにしておいで。」
りゅうは空中でじっととまりました——がのように羽をぶきみにふるわして。それからだしぬけにさっとまいおりると、ムーミントロールの耳にかみつきました。そして、こちらが、「あっ。」とさけんでいるあいだに、りゅうはスナフキンのところへとんでいって、そのかたにとまったのです。

それからスナフキンの耳のそばまでずっていくと、目をとじて、ブルルルをやりはじめました。
「なんておかしなやつだろう。こいつはからだじゅうあつくなってるぜ。どうしたんだろうね。」
スナフキンは、びっくりしていいました。
「きみがすきだからさ。」
と、ムーミントロールはいいました。

午後になると、ちびのミイのおばあさんのところへでかけていたスノークのおじょうさんが、かえってきました。さっそくおじょうさんは、ムーミントロールがりゅうを発見したことを、き



「どうやってあんな高いとこに、のぼったんだろう。おっこちたらたいへんだ……じっとしているんだよ。ちょっとおまち……口をきいちゃだめだぜ……。」

そういって少年は、じぶんの寝台からふとんをひっぱってくると、まどの下のゆかの上にしきました。それからヘムレンさんの古ぼけた捕虫網をもってくると、りゅうのほうへさしのばしていいました。

「さあ、とびおりるのよ。ちっちゃいプル＝プル＝プルちゃん……こわくはないの。けがなんかしませんよ。」

「そんなことをしたら、こわがるばかりだぜ。」

と、スナフキンはいいました。

りゅうはうなってしたをならすと、捕虫網にがっとかみついて、小さいエンジンそっくりにブルルルとやりはじめました。それからだしぬけに羽をひろげると、てんじょうの下をぐるぐるとびまわりだしたのです。

「とんだよ、とんだよ、ぼくのりゅうがとんでるよ！」

ついてくるんだ……。」
それからきゅうにとびあがって、ムーミントロールはさけびました。
「見つけたんだよ、ぼく！　ほんもののそういう小さいりゅうを！」

ムーミントロールの家まで歩いていくあいだに、スナフキンは、不信と、おどろきと、驚嘆の、ぜんぶをとおりぬけました。それこそ完全でした。

ふたりは階段をあがると、とても用心して戸をあけて、中へはいっていきました。

水をいれたびんは、あいかわらずテーブルの上にのっていました。しかし、りゅうのすがたは見えませんでした。ムーミントロールは、寝台の下をのぞいたり、たんすのうしろをのぞいたりして、へやじゅうをさがしました――そのあいだじゅう、
「小さいぼくのお友だち……かわいい、かわいいお友だち、きみはいったいどこにいるの。」
とよびながら。

そのとき、スナフキンがいいました。
「ムーミン、まどのカーテンにとまってるぜ。」

そうでした。てんじょうの近くのカーテンの横ぼうの上にとまっていたのです。ムーミントロールは、おどろいてさけびました。

のことじゃないだろうね。きみのいうのはほんもののりゅうだろ。いや、あったことはないね。あいつらは、ほろびちまったんだぜ。」

「だけど、一ぴきぐらい、いきのこってるかもしれないよ。そして、だれかがいつかつかまえて、ガラスびんにかってるかもしれないさ。」

と、ムーミントロールはいいました。

　スナフキンはするどい目でにらんで、ムーミントロールがよろこびとどきどきするような期待で、はじけそうになっているのを見ました。そこで、ごくみじかく答えました。

「そんなことは、信じられないね。」

「たぶんそいつは、マッチ箱ほどの大きさしかないかしれないけど、それでもちゃんと火をふくことはできるんだ。」

　こうムーミントロールは、わざとあくびをしながらいいました。

「へえ、そんなことはもちろん、まるっきりの空想さ。」

おどろきというものがどのようにしてしくまれるか、それをよく知っているスナフキンは、答えました。

　あいては、ずっと遠くを見つめながらいいました。

「小さいみどり色の足をもった純金のりゅう——それがだれかさんをすきになって、どこへでも

責任はもてないからね。」

「いいですよ。おまえのへやのドアは、だれにだってあけさせません。」

ママはこういって、ちらとちびのミイのほうを見ました。

ムーミントロールは、おもおもしく沈黙して、おかゆをかたづけました。それから庭をぬけて、橋のほうへおりていきました。

スナフキンはテントのまえにすわって、コルクのうきにペンキをぬっていました。

ムーミントロールは親友を見つけたので、すぐに幸福になって、あのりゅうを見つけたことをうれしく思いました。

「やれやれ、家族ってものには、ちょいちょいまったくうんざりするよねえ。」

こうムーミントロールがいうと、スナフキンは口にパイプをくわえたままで、うなずいてみせました。ふかい男どうしの愛情で、ふたりはしばらく、じっとだまってすわっていました。それからムーミントロールが、だしぬけにいいました。

「ところで、きみは旅のとちゅうでりゅうにであったことがある？」

スナフキンは、長いことだまっていてからいいました。

「そりゃあもちろん、サラマンダー（火の中にすむという神話の中のりゅう）とか、とかげやわに

新聞から目をあげて、ムーミンパパがききました。

「ムーミントロールが、あたらしい動物を見つけたんですよ。」

こうママは説明してから、ききました。

「その動物は、かみつきやしないだろうね。」

「とっても小さいんだもの、そうひどくはかみません。」

むすこはもぐもぐと口の中でいいました。

「それ、じきに大きくなるの？　いつわたしたちに見せてくれる？　それは、口がきけて？」

と、ミムラねえさんがききました。

ムーミントロールは返事もしませんでした。またもや、なにもかもだめになってしまったのです。人はひみつをもつ権利がないのでしょうか。それをもっていればこそ、あとで人をおどろかすこともできるんです。ところが、家族の中にいては、そうはいきません。みんなはさいしょからすべてを知ってしまうので、あとではちっともおもしろいことがおこらないのです。

「ごはんがすんだら、ぼく、川のほうへいくからいい。」

ムーミントロールは、のろのろと、さもけいべつしたようにいいました。りゅうのようにけいべつをこめてです。

「ママ、だれにもぼくのへやへはいらないようにいってね。どんなことがおこったって、ぼく、



「だまれ！」
と、ムーミントロールはどなりました。
　それでもミイはつづけました。
「その人はきっと、一分間に百ぴきにもふえるひるか、しろありか、でなければあんまり大きくないむかでかなんかを、かっているんだわ。そうとしか思われないわ。」
「ねえ、ママ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「ママは知ってるでしょ、ぼくがいつでもなにかぼくをあいしてくれる小さい動物を、かいたがってたことを。でも、そのペットは、ええと、ええと……。」
「ええと、ええと、ええと……、ブクブクブク。」
　こういってちびのミイは、コップについだ牛乳をブクブクふきました。
「どうかしたのか？」

それから、小さいまっ白い歯がカチカチいったかと思うと、口が大きくひらいて、きんばえのすがたはもう見えませんでした。りゅうののどが、ごくんごくんと二どうごきました。それから、口のあたりをなめまわし、耳をひっかいてから、「どんなもんだい。」といわんばかりに、かたほうの目をつぶって、ムーミントロールにあいずしてみせたのです。

「きみはなんてすごいんだ！　ぼくのちびっ子のボーボー、ローボー、ドーボー！」

と、ムーミントロールはさけびました。思わずこんなことばがでてしまったのです。

ちょうどそのときに、下のへやでムーミンママが、朝ごはんのあいずのゴング＝ゴングをならしました。

「ちょっとまっててね。すぐもどってくるから。」

こういってムーミントロールはたちあがりましたが、しばらくのあいだ、もういとしくってたまらないというふうに、りゅうを見つめていました。でも、とても、だきしめるというわけにはいきそうもありません。そこで、

「いとしいいとしいお友だち！」

とささやいただけで、階段をはしりおりてベランダにでました。

ところが、まだ少年がおかゆにさじをつっこまないさきから、ちびのミイがはじめました。

「だれかさんは、へんなガラスびんの中に、ひみつをかくしているらしいわ。」

と、ムーミントロールは声をあげました。やけどをしたんです。たいしてではありませんが、たしかにやけどはやけどでした。

少年はいよいよこのりゅうに感心して、いいました。

「きみは、おこったんだね。そうだろ？　なんてらんぼうで、おこりんぼで、いじわるなんだ、きみは？　だからぼくは、きみがすきで、すきで、すきなんだよ、小さいりゅうくん！」

りゅうは鼻をならしました。

ムーミントロールは寝台の下にはいこんで、じぶんの夜の箱をとりだしました。中には、もう、すこしかわいてかたくなった小さいパンケーキが二つと、バターをぬったパンの半かけと、りんごが一つはいっていました。

少年は、それをみんな小さな切れにきると、テーブルの上に、その小さいかたまりをならべました――りゅうをかこんで、それがぐるっと輪をかくように。

りゅうは、ちょっとにおいをかいでみてから、さもムーミントロールをけいべつしたように、ちらと見ました。が、そのとたんにぱっとまどにとびつくと、むちむちふとった大きなきんばえをつかまえました。

はえはブンブンいうのをやめて、ヒーヒー悲鳴をあげはじめました。りゅうはもう小さいみどり色の前足で、そのくびをしめつけて、その目に小さいけむりをはきかけていたのです。

と、ムーミントロールは答えました。
「びんでしょ。なにがはいってるの。どういうわけでかくすの？」
と、背のびをしてのぞきながら、ちびのミイがいいました。
ムーミントロールは階段をかけあがって、じぶんのへやにはいると、テーブルの上にびんをのせました。水がはげしくゆれたため、りゅうはつばさにくるまって、まりみたいにまるまっていました。それがいま、そろそろと手足をのばしたと思うと、歯をむきだしました。
「こんな思いは、二どとさせないよ。すまなかったねえ、お友だち。」
ムーミントロールはこういってやくそくすると、びんのふたをとってやりました――外のけしきがりゅうによく見えるように。それから戸口にいって、かけがねをかけました。あんなちびのミイには、ぜったいにあわせないために。
戸口のところからかえってみると、小さいりゅうは水の中からはいだして、びんの口にすわりこんでいました。ムーミントロールは、こわごわとかたほうの前足をのばして、りゅうをあやしてみました。
するとりゅうは、またしても口を大きくあけて、小さなけむりの雲をはきだしました。まっかなしたが、ほのおのようにとびだして、すぐまた見えなくなりました。
「あっちちちち……。」



てできます。それとも、見せないほうがいいでしょうか。
「うん、まだ見せられないな。もう四、五日ないしょにしておいて、これが人になれてからでなくちゃ。それに、いちばんおもしろいのはスナフキンだから、あの人に見せてからにしよう。」
ムーミントロールはびんをしっかりとむねにおしつけたまま、できるだけなにくわない顔をして、家のうら口のほうへ、ぶらぶら歩いていきました。みんなは、おもて口のベランダのあたりにいたからです。
そうやってムーミントロールがうら口の階段をあがりかけたときに、ちびさんのミイが、だしぬけに水おけのかげからとびだしてきて、よびかけました。
「なにをもってるのよ、ムーミントロール？」
「なんにももってやしないさ。」

から、びんのそばにねそべって、よくよくようすをかんさつしたのです。
　りゅうは、ガラスのかべのそばまでおよいできて、小さい口をひらきました。口の中には、まっ白い歯がならんでいます。
「きっと、おこってるんだ。こんなに小さくても、おこるのかなあ。どうしたらこのりゅうに、ぼくをすきにならせることができるかしら。……いったい、なにをたべるんだろ。りゅうってものは、なにをたべてるのかなあ。」
　こんなことを考えると、ムーミントロールは、すこし心配になってきました。そこでびんをもちあげると、りゅうがガラスにぶつかってけがをしないように気をつけながら――なにしろ、とても小さい、きゃしゃなりゅうでしたからね――そろそろと家のほうへ歩きだしました。
「ぼく、きみをだいじにして、ペットにするよ。きみはぼくのまくらの上でねてもいいよ。もしきみが大きくなって、ぼくとなかよしになってくれたら、海へだって、およぎにつれていくさ……。」
と、こんなことをささやきながら。
　ムーミンパパは、うら庭のたばこばたけで、はたらいていました。
　パパには、いつだってもりゅうを見せてもいいし、りゅうについて、いろいろときくことだっ

そのりゅうは、ほんのマッチ箱ほどの大きさでしたが、きんぎょのひれのようにうつくしい、すきとおった羽をうごかしておよぎまわるすがたは、このうえもなくじょうひんでした。

しかも、どんなきんぎょだって、この小さいりゅうほどすばらしい色はしていなかったのです。お日さまの光をうけると、そのいぼだらけのはだは金色にかがやき、小さい頭はエメラルドグリーンに、その二つの目はレモンイエローにかがやきました。金色をした六本の足には、それぞれかわいいみどり色の指がついていましたし、しっぽはさきのほうへいくにつれて、みどり色にかわっていました。ほんとにすばらしいりゅうでしたっけ。

ムーミントロールは、しっかりとびんのふたをしめると（ふたにはもちろん空気ぬきのあながありましたが）、それをそっとこけの上におきました。それ



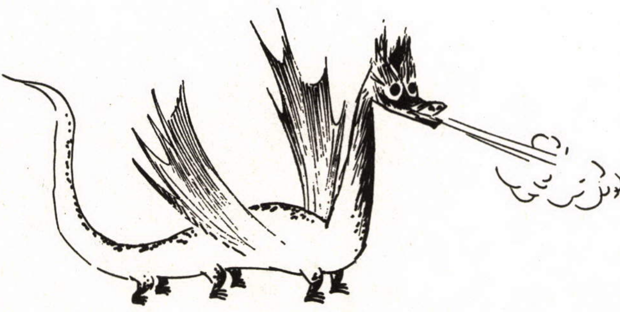
土用のおわりごろの木曜日のことでした。ムーミントロールが、パパがハンモックをつる木の右手にある赤っちゃけた池で、小さいりゅうをつかまえたんです。

もちろん、りゅうをつかまえるなんてことは、ゆめにも思っていませんでした。ムーミントロールはただ、池のそこのどろの中をはいまわっている小さい虫どもをつかまえて、そんな虫たちがおよぐときにはどんなふうに手足をうごかすか、あとじさりすることができるか、それをしらべてみたいと思っただけなのです。ところが、えものをいれたガラスびんを、お日さまのほうにかざしてみると、まるっきりそんな虫とちがった、へんなものがはいっていたではありませんか。

「おどろいたなあ、ぼくの永遠のしっぽにちかって！」

ムーミントロールはこうつぶやいて、両手でびんをつかんだまま、あきれて見つめるばかりでした。

世界(せかい)でいちばんさいごのりゅう



「だけど、ほんとのことをいうと、そんなことなさる必要はなかったのよ。もしご心配でしたら、すすぎ水の中にちょっぴり酢をいれるのが、いちばんよくてよ。そうしたら、色がさめませんの！」

そういってフィリフヨンカは、すなの上にすわると、なみだをこぼしながらわらったのです。

と、ガフサ夫人はさけびました。
「おはようございます！」
こういっておいてから、フィリフヨンカはれいのじゅうたんを、浜べにひっぱってきました。
「ガフサさん、きょうのごきげんはいかが。」
「めちゃくちゃよ。なんていう一夜だったのでしょう！　わたし、あなたのことばかり考えていましたわ。だって、わたしこの目で見たんですもの、あれがやってくるのを。まあなんてあらしだったでしょう。」
こう、ガフサ夫人はいいました。
「それ、なんのことですの。」
と、フィリフヨンカは、むじゃきにききました。
「あなたのおっしゃったとおりよ。なんてあなたはただしかったのでしょう。あなたは、大きなさいなんがくるって、おっしゃったわね。ああ、あなたのあんなにすばらしいしなものが！　うつくしいおうちが！　わたし、気になって気になって、ひと晩じゅうあなたに、お電話していたんですよ。それなのに、電話線がきれてしまって……。」
「それはごしんせつさま。」
と、フィリフヨンカはぼうしの水をしぼりながら、つづけました。

お日さまは、もうだいぶ高くのぼっていました。フィリフヨンカは、ぬれた砂浜のほうへおりていってみました。海は海草だの貝がらだので、おけしょうしていましたし、かの女のじゅうたんは、これいじょうきれいにはあらえないほど、てってい的にあらいすすいでありました。

フィリフヨンカはくっくっとわらいながら、両手でそのじゅうたんをひきずって、海の中へはいっていきました。

それから、みどり色をした大波の中へ、ざぶんとばかりに頭からもぐると、そのじゅうたんの上にのっかって、シューシューいっている白いあわの上で、波のりをしました。それからまた、ざぶんとばかり、水にもぐります。

つぎからつぎへと、みどり色にすきとおるような大波が、フィリフヨンカの上を、ころがっていきました。それからまた、水のおもてへうかびでてきて、息をついては、お日さまをながめるのでした。こんなにして、かの女はじゅうたんにのって波のりをして、さんざんきゃあきゃあいったり、わらったり、どなったり、おどったりしました。

生まれてからこのかた、こんなにおもしろかったことは、いちどもなかったのです。

ガフサ夫人がいくどもいくどもよんだりさけんだりしてから、やっとフィリフヨンカは、そちらに目をむけました。

「こわかったわねえ、フィリフヨンカのおくさま！」

のセット、おばあさまのかたみの銀のクリームいれ、きぬ糸と銀糸で格言などをぬいとりしたもの——かの女のこまごましたお気にいりの品も、みんな目のまえで天国へとんでいってしまったのです、ひとつのこらず。

かの女はうっとりとして考えました。

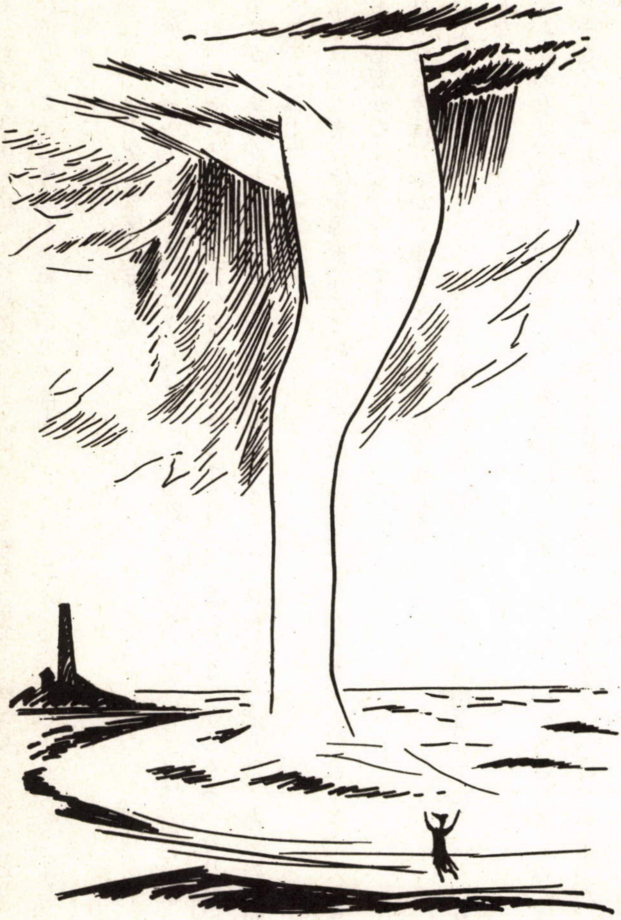
「まあ、なんてなんて、ふしぎなんでしょう！　大自然の大きな力にたいしては、かわいそうに、小さいフィリフヨンカに、いったいなにができるでしょう。まだ、なにかつくろったり修理したりするものが、あるかしら。なんにもありません。みんな、きれいさっぱりと、あらいながされてしまったのだわ！」

たつまきはどうどうと野原をこえていくと、だんだんほそくなって、くずれてきえてしまいました。もう必要がなくなったのです。

フィリフヨンカは、ふかく息をして、つぶやきました。

「もうわたし、二どとびくびくしなくてもいいんだわ。いまこそ、自由になったのよ。これからは、どんなことだってできるんだわ。」

それからかの女は、せとものねこを、岩の上にのせました。ゆうべのあいだに、ねこはかたほうの耳をなくしてしまったかわりに、鼻の上に黒いあぶらのしみをくっつけていました。おかげで、いくらかいたずらっぽい、なまいきそうな顔になりました。



それは下のほうが大きならせん状をして、くるくるまわっている白い雲の柱でした。そしてそれが海のおもてにふれると、チョークみたいな色にかわって、おそろしいいきおいで水をすいあげるのでした。

うなり声もたてなければ、ザーザーいう水の音もしません。ひっそりとおしだまったまま、それはわずかにゆれながら、そろそろと岸のほうへ近づいてきます。お日さまがのぼると、その雲の柱は、ばらの花びらの色にそまりました。

そのはてしもなく高い柱が、音もなく力づよくまわりながら、のろのろとこちらへ近よってくるのでした。

フィリフヨンカは、身うごきすることもできませんでした。ひしと、せとものねこをつかみながら、かの女はそこに無言でたちつくして、考えました。

「ああ、なんてうつくしい、ふしぎな、この世のおわりでしょう！」

たつまきは、フィリフヨンカからそうはなれていない、岸べに上陸しました。かの女のそばをとおりすぎるときには、その白いすばらしい柱がすなの柱になっていて、それがあのヘムルさんの家の屋根をしずかにもちあげました。

フィリフヨンカは、それが空高くのぼっていってすがたをけすのを、その目で見たのです。かの女の家具が、みんなまきあげられて、きえていくのも見ました。灰ざらしき、写真たて、お茶

てくらすことでしょう……それはいまからわかっていました。そして、たつまきがまたかの女をねらって、おしよせてくるのです。台風だっても……。

かの女ははじめて、ヘムルさんがたてたあの家を、ふりかえってみました。それはまえとおなじにたっていました、こわれたがらくたにうずまって。それはかの女がもどってきて、かたづけてくれるのをまっているのでした。ほんもののフィリフヨンカなら、じぶんの相続したしなものをほったらかしてしまうということは、考えられませんからね。

「ママがフィリフヨンカの義務というものを思いださせてくれたようだわ。」

と、かの女はつぶやきました。もう、朝になっていました。

東の水平線は、日の出をまちかまえています。びっくりしたように、小さいスコールがはしっていきました。空には、あらしがおきわすれていった雲が、まきちらされていました。一どか二ど、よわよわしいかみなりが、ころがっていきました。

天気は、じぶんでもまだ心がきまらないらしく、ぐずぐずしていました。フィリフヨンカもおなじことでした。

そのとたんにフィリフヨンカは、あの大たつまきを見たのです。

そのたつまきは、かの女が思っているどんなたつまき——それは黒光りしている大きな水柱でしたが——とも、にていませんでした。うそじゃありません。それはあかるく光っていたのです。

たのです。
むかしふうのフィリフヨンカは、うしなわれてしまいました。しかも、じぶんがあの人たちをたちもどらせたいとねがっているのかどうかさえも、かの女にはわからなかったのです。それからまた、あのふるいフィリフヨンカの持ちものは、どうしたらよいでしょうか。
なにもかもが、こわれてよごれてしまったり、つぶれてびしょぬれになったりしているではありませんか。それを、にかわではりあわせたり、つくろったり、なくなってしまった破片をさがしていたりしたら、何週間も何週間もかかることでしょう……。
きっとかの女は、それをあらって火のしをかけたり、色をぬりなおしたり、どうやってみても修理できないしなもののことをかなしんだりすることでしょう。それからまた、そこらじゅうにちらばっている破片をながめては、むかしはそれがどんなにうつくしいかたちをしていたかを思うことでしょう……。いいえ、そればかりか、きっとそれらをのこらず、あのさむざむしたくらいへやにあつめて、もういちど、うつくしかったむかしのすがたにかえそうとつとめることでしょう……。
「いや、そんなことをするもんですか！」
こうさけんで、フィリフヨンカは、びっこひきひきたちあがりました。すべてをむかしのとおりにしたら、かの女もむかしのとおりになることでしょう。そうして、もういちど、びくびくし

うしろのほうでは、まだしきりに家の中で、なにかがたおれてはくだけているようです。でも、かの女は、ふりかえることもしませんでした。そこにあった大きな岩のかげにかがみこむと、目を大きく見ひらいて、やみの中を見つめました。

つめたさも、もう感じません。ふしぎなことに、かの女は、きゅうにじぶんがまったく安全なのを、感じたのです。とてもふしぎな気持ちでした。しかも、なんともいえず気持ちがいいのです。なにをくよくよすることがあるでしょうか。とうとう、大きなさいなんがきてしまったのです。

あけがた近くなって、あらしはふきやみましたが、フィリフヨンカは、ほとんどそれにも気がつきませんでした。そこにすわりこんだまま、じぶん自身のことや、じぶんのさいなんのこと、じぶんの家具たちが、どんなになつかしいものであったかなどを、ふかく考えこんでいたからです。しょうじきのところは、えんとつがたおれただけで、たいしたことはおこらなかったのですがね。

それにしてもかの女は、一生のあいだに、これほど重大なできごとはおこらなかったと、感じていたのです。あらしはかの女をふるえあがらせ、なにもかもを、ひっくりかえしてしまったのでした。くらしをたてなおすにはどうしたらよいか、フィリフヨンカには、めあてもつかなかっ

きけんなのは家の中にいるからで、外にいればきけんはないんです。

フィリフヨンカはほっと息をついて、海草のしょっぱいようなにおいをかぎました。それから、目をあけてみました。

あたりはくらいといっても、じぶんのへやにいたときほどには、くらくありません。浜べにうちよせる波が見え、灯台ののばした長い光のうでが、ゆっくりとやみの中をうごいて、かの女をかすめ、砂丘をこえて、遠い水平線のほうまでいっては、またもどってくるのが、目にうつりました。そのおだやかな光は、しずかにあらしを見まもりながら、くるりくるりとまわっていたのです。

「わたし、これまでにいちども、夜中に外へでたことはなかったんだわ。もし、ママがこのことを知ったら……。」

フィリフヨンカは、こんなことを考えながら、風にさからって、浜べのほうへ、はいおりていきました。できるだけ、あのいまいましいへムルの家から、遠くにはなれたいと思ったのです。せとものねこは、まだ左の手にもっていました。なにか保護してやるものをもっていると、心がおちつくからでした。

そこまでいってみると、海はすっかり青と白に見えました。波がしらは見るまにふきとばされて、けむりみたいになぎさにただよっています。そのけむりは、塩からいあじがしました。

そのとき、まどがふきとばされて、小さな破片となったまどガラスが、ゆかいちめんにとびちりました。マホガニーの家具の上に、雨がばらばらとうちつけ、どうどうとした石膏のヘムルさんの像は、台座の上からころげおちて、いくつかにくだけました。

ごじまんの大シャンデリアは、ゆかの上におちて、うめくような音をたてました。これはフィリフヨンカの母かたのおじさんの、記念の品だったのですがね。

かの女の持ちものという持ちものが、みんなまわりで、ないたりわめいたりしていました。

そのときふと、フィリフヨンカは、じぶんの青ざめた鼻が、かがみのかけらのひとつにうつっているのを、ちらと見たのです。なにを考えるよりもまえに、かの女はまどのところにはしっていくと、外にとびだしました。

気がついたときには、すなの上にすわりこんでいました。あたたかい雨のしずくが、かの女の顔をうちました。きものはまるで帆のように、からだのまわりでパタパタはためきました。

かの女はしっかりと目をつぶりました。いまこそきけんのまっただ中にいるのです。まるっきりのぞみはないのです。

あらしはあいかわらず、あれくるっています——なにものにもさまたげられることなく、着実に。

ところが、気がついてみると、あのやかましい音は、きえてしまっているではありませんか。あのうなり声もたたきつける音も、ドスンとものたおれる音や、なにかのさけるような音も。

バタバタ、ガチャガチャ、バタンドスンと、やりはじめたのです。とびらというとびらはバンバンはねるし、がくぶちはガラガラピシャンとゆかにおちました。

　スカートを風にバタバタとはためかしながら、フィリフヨンカはぼうぜんとへやのまん中につったって、こんがらかった頭で考えました。

「そうだわ。いまこそ、この世のおわりがきたんだわ、とうとう。こうなったら、なにもうまちうけることはないわよ。」

　かの女は受話器をとりあげて、ガフサ夫人をよびだそうとしました……そう、あの夫人をそれこそたたきのめしてやるようなことを、ひとことふたこと、いってやろうと思ったのです。つめたく、かちほこるようにね。

　ところが、電話線がきれてしまっていたとは。きこえてきたのは、あらしのほえる声と、屋根がわらがゆるんでガタガタ鳴っている音だけでした。フィリフヨンカは思いました。

「もしわたしが屋根うらへいったら、屋根がふっとんでしまうだろうし、もし地下室へいったら、家ぜんたいが、わたしの上にくずれおちるかもしれないわ。どっちみち、そんなことになるでしょうよ。」

　かの女は、せとものねこをつかんで、しっかりとむねにだきしめました。


Tove

かったかのように……。」
フィリフヨンカは、ふとんのあいだから鼻をつきだすと、きびしい目で、やみの中をのぞきながらいいました。
「いまに、見ていらっしゃい！」
それは、どういう意味だったのでしょう。
それからかの女は、ふとんの中にまるまりこむと、両方の手で耳をふさいだのです。

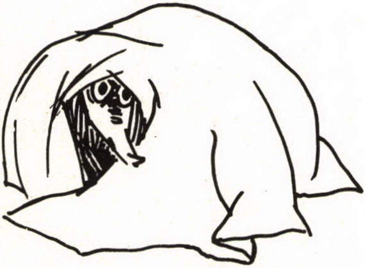
しかし、外ではあらしが、真夜中にかけて、じりじりとつよまってきました。そして午前一時には、秒速四十六メートルにもなったのです。
朝の二時ごろには、えんとつがふきたおされました。そのはんぶんは、家の外にたおれおちましたが、あとのはんぶんは、台所のかまどの中にくだけおちました。てんじょうにあいたあなからは、まっ黒な夜の空と、ふきとんでいく大きな雲が見えました。
それからあらしは、家の中にはいりこんできました。ふきとばされる灰と、バタバタやっているカーテンやテーブルかけと、くるくるまっているおばさまやおじさまの写真のほかは、なにひとつ見えませんでした。
フィリフヨンカのたいせつなしなものたちに、みんないのちがふきこまれて、そこらじゅうで、

近く、いよいよ近く……。

かの女が心にえがいているあらしは、このうえもなくひどいものでした。しかもフィリフヨンカは、心のそこでは、じぶんをおそってくるこのさいなんを、いくらかほこりにしていたのです――ほかのだれだって、こんなさいなんにはあえないのですから。

「ガフサのおくさんなんて、とんちきよ。おかしとまくらおおいのことを考えるだけでいっぱいな、ばか女ですもの。お花のことはちっとも知らないし、わけてもわたしのことときたら、ぜんぜんさ。

いまごろはあの人、家にすわって、わたしがなんにも知らないおじょうさんだと思ってることでしょうよ。だけどわたしは、この世のおわりを、毎日毎日、見ているんだわ。しかもわたしは、毎日きものをきてはぬぎ、食事をしてはおさらをあらいして、訪問までうけているんだわ――なにごともおこらな



家はごくかすかにですが、ゆれていました。風がビュービューふきつけてきます。海のほうから、あらしがぐんぐんおしよせてくる音を、きくことができました。

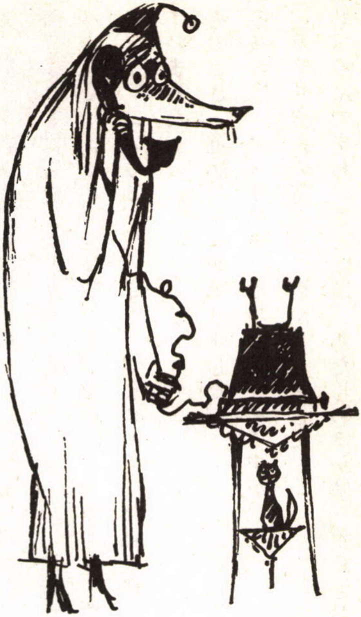
屋根のかわらが一まい、ずるずると屋根をすべってきて、地におちてくだけました。フィリフヨンカはとびあがって、寝室ににげこみました。でも、寝室はあまりひろすぎて、安全とは思えません。では、ものおきは。あそこならせまくてちょうどいいかもしれません。フィリフヨンカは、ベッドのふとんをもって、大いそぎで台所のろうかをぬけ、ものおきのドアを足でけとばしてあけて、中へはいって戸をしめました。

すこしばかりフィリフヨンカは、息をはずませていました。でも、ここだと、風の音はそれほどきこえないのです。それに、このへやにはまどがなくて、小さいベンチレーター（換気扇）がまわっているだけなのです。

かの女はくらやみの中を、手さぐりですすんでいくと、じゃがいものふくろなんかをかきわけて、ジャムつぼをならべた、たなの下のゆかにつっぷして、ふとんにくるまりました。

だんだんとフィリフヨンカの頭は、いまかの女の家をゆすぶっているあらしよりも、ずっとあらあらしくまっ黒に、あらしのすがたを、ぬりつぶしていきました。浜べにうちよせる波は、まっ白い大きいりゅうになり、ほえたけっているたつまきとなって、水平線にたつ黒い柱みたいに、海をすいあげました。そしてその柱が、かの女をめがけて突進してくるのでした。だんだん

と、フィリフヨンカは答えました。
「まあ、そんならいいの。おまねきくださって、ありがとう。とてもたのしかったですわ。じゃあ、なにもおかわりはなかったのね。」
「そうよ。きてくださって、ほんとうにありがとう。これからもちょいちょいおあいしたいものね。」
「わたしもよ。」
こういってガフサ夫人は、電話をきりました。
フィリフヨンカは、そのまましばらく、じっと受話器をみつめてたっていましたが、だしぬけに、ぞっと寒けを感じました。
「ああ、またまどがくらくなってきたわ。まどにもうふでもかけなくちゃ。それから、かがみはかべのほうにむけかえたらいいわ。」
かの女は、こんなことを思いましたが、なんにもしないで、えんとつの中でうなりはじめた風の音に、耳をすましました。その音は、家のない小さいなにかの動物の声に、にないわけでもありませんでした。
家の南がわでは、ヘムルさんのさかなをとるあみが、かべにぶつかりはじめていました。でもフィリフヨンカは、外へでていって、それをしまう気にもなれませんでした。



と、フィリフヨンカはいいました。

「ええ、おかげさまで。」

そういってガフサ夫人は、しばらくだまっていたあと、あいそうよくつづけました。

「ひどく風がでてきましたわね、フィリフヨンカのおくさま。あなたは、ずいぶんこわいことをおっしゃったけれど、そういうことがちょいちょいあなたにはおこりましたの？」

「いいえ。」

「じゃあ、一どか二ど？」

「いいえ、一どもよ。ほんとうをいえば、ただわたしが、そう感じただけなの。」

ると、じぶんのへやにもどりました。
なんともたまらないいやな気持ちになって、お茶のパーティーは、もうこりごりだと思いました。あの小さい灌木は、テーブルの上にたっていました——灰色をして、とげだらけで、小さい赤茶けた花をぎっしりとつけて。とつぜんにフィリフヨンカには思われてきました——かの女のお茶のセットに、その花がにあわないのではなく、どんなものにもにあわないのが、そのお茶のセットなのだと。
フィリフヨンカは、その花びんを、まどがまちの上にうつしました。
海のようすは、すっかりかわりました。いちめんに灰色になって、波は白い歯をむいて浜べにかみついていました。空は血のような色になって、おもおもしく見えます。
フィリフヨンカは、長いこと、つよまってきた風の音に耳をすましながら、まどべにたちつくしていました。
そのとき、電話のベルが鳴りました。
「そちらは、フィリフヨンカのおくさまですか。」
と、ガフサ夫人の気どった声がききました。
「もちろんですわ。ここには、わたしのほかは、だれもおりませんもの。あなた、ぶじに家におつきになりました？」

たしは知っていますの——なにもかもわるいほうにかわるんですわ。しょっちゅうわたし、そのことばかり考えてますの。あのじゅうたんをあらっていたときだってもね。こんな気持ち、おわかりになる？　あなたも、そんなふうにお感じになることがありまして？」

「おくさまは、酢をおつかいになったことがありまして？　すすぐときの水に、ほんのすこし酢をおいれになると、色がとてもよくもちますわよ。」

と、ガフサ夫人は、紅茶茶わんの中をにらみながらいいました。

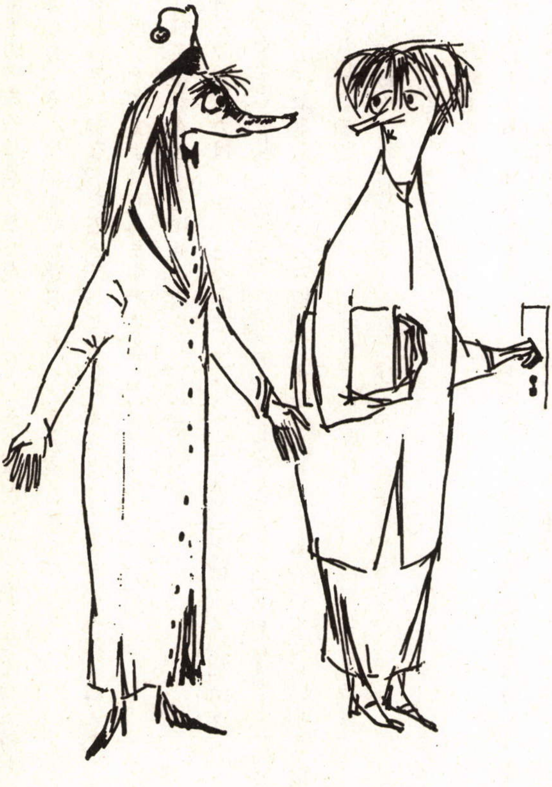
　これをきいてフィリフヨンカは、かっとなりました——こんなことは、じつにめずらしいことですがね。かの女は、なんとかしてガフサ夫人に、しかえしをしてやりたく思いました。そして、いきなり思いつくままに、ぶるぶるふるえる指で、花びんにさしたあのいやらしい小さい灌木をさすと、こういってどなったのでした。

「ほら、きれいでしょ。わたしのお茶のセットに、ぴったりとあうじゃないの！」

　するとガフサ夫人のほうも、ちょうどおなじくらいうんざりして、はらをたてていましたので、足をふみ鳴らして答えたのでした。

「とんでもありませんわ！　あれは大きすぎるし、とげだらけだし、ぎょうぎょうしすぎます。まるで、しんちゅうみたい。お茶のテーブルにはぜんぜんにあいません！」

　そのままふたりのレディーは、わかれをつげました。フィリフヨンカはピシャリとドアをしめ



夕やみが海の上にせまってきて、浜べはしきりにぶつぶついっていました。ランプをともすにはすこしばかりはやすぎますし、そうかといって、ものがきれいに見えるには、すこしくらすぎる時刻です。ガフサ夫人のとんがった鼻は、いつもよりもしわがよって見えました。そして、はたから見ても、夫人がいらいらしているのが、よくわかりました。

それでもフィリフヨンカは、友だちがおいとまをつげるのにあいさつもせず、見おくりもしないで、だまってすわりこんだまま、アイスクリームのかたまりを、めちゃめちゃにこわしているだけでした。

「こうしているのは、まったくくるしいわ。」

ガフサ夫人はこう思って、ハンドバッグを、わきの下にかかえました。そとでは、南西の風が、いくらか声を高くしていました。

「おくさまは、風のことをおっしゃいましたね、あなたのせんたくものをふきとばしたって。」

と、だしぬけにフィリフヨンカがいいました。

「だけど、わたしの申しあげたのは、つむじ風、台風のことですよ、ガフサさん。いいえ、トーナドー（アメリカ西部などでおこる大せんぷう）、たつまき、すなあらし……家でもなんでもおし流してしまう大洪水のことですわ。……でも、なかでもわたしがお話ししたのは、わたし自身と、そんなことはおこらないと知っていたばあいにしても、わたしの感じている恐怖のことなのよ。わ

ばよかったな、と思いました。それでも、さいごに、ようじんしいしいいいました。
「この季節には、きゅうにあらしがくることがありますものね。」
フィリフヨンカは、がっかりして口をつぐみました。ガフサ夫人は、すこしまごつきましたけれど、しばらくしてから、話をつづけました。
「わたくし、先週の金曜日に、せんたくものをほしたんでございますよ。ところが、おどろいたじゃありませんか。だしぬけに風がふいてきましてね、わたしのいちばんいいまくらおおいが、門のところにとんでいきましたのですよ。ところで、おくさまは、どういう洗剤をおつかいでございますの？」
「わたし、そんなことぞんじませんわ。」
フィリフヨンカは、ガフサ夫人がじぶんの気持ちを理解しようとさえしないのに、きゅうにあいそうがつきて、みじかく答えました。それから、こういってききました。
「お茶をもうすこしあがりません？」
「ありがとうぞんじます。でも、もうけっこうですの。ほんとにたのしい訪問でございましたわ――あんまり時間がなくて残念でしたけれど。わたし、そろそろおいとましなくては――。」
「はいはい、わかりましたわ。」
と、フィリフヨンカはいいました。

「このおだやかさは、ふつうじゃないわね。なにかおそろしいことが、きっとおこるのよ。ねえ、ガフサさん、わたしたちはとても小さくて、とるにたりないいきものですわ。それから、わたしたちのこのおかしだとか、じゅうたんだとか、いろんなものもね。それでいて、こうしたものは、とてもわたしたちにとってたいせつなんだけれど、それがいつでもいじわるななにものかに、おびやかされているんですわ……。」

「まあ！」

おちつきこんでいたガフサ夫人は、きゅうに気分をそこねました。

「そうなのよ、それはとても無慈悲なものなの。」

と、フィリフヨンカは、息をひそめていいつぎました。

「そのものにたいしては、ゆるしをもとめることもできなければ、議論するわけにもいかないし、理解することもできなければ、それがどういうものだということもできないの。でも、それが近づいてくるのが、黒いまどガラスをとおして見えるのよ――ずっと遠くの道の上や、遠くの遠くの海のほうに。そしてだんだん大きくなってくるんだけれど、それがじっさいに目に見えるようになったときには、もう手おくれなの。ねえ、ガフサさん、あなたもそういうことを感じたことがあって？　どうぞ、おっしゃって。――わたしの申しあげたことが、おわかりになって？」

ガフサ夫人は、顔をまっかにして、角ざとういれを手の中でくるくるまわしながら、こなけれ



そのとき、お日さまが雲にかくれて、テーブルクロスが、きゅうに灰色になりました。いかめしい大きなまどいっぱいに、灰色の雲のかたまりがあらわれました。海のほうから、あたらしい種類の風の音がしてきます。遠くかすかな、ほんのささやきくらいの音でしたけれど。

「フィリフヨンカさん、あなたがじゅうたんをおあらいになっているところを、はいけんいたしましたわ。」

と、ガフサ夫人が、とてももったいぶっていいました。

「ええ、じゅうたんをあらうには、海の水がいいといわれていますのよ。色がちっともさめないんですって。それに、浜べはとてもいいかおりがしますものね……。」

フィリフヨンカはこう答えながら、心の中で思っていました――ガフサさんに、あのことをわからせなくては。わたし、わたしがなにかにおびえていることをだれかしらに話して、なんとかいってもらいたいのよ。もちろん、この人はよくわかってくれるはずだわ。だけど、ほんとうのところ、なにをおそれることがあるんでしょう。きょうのようなすばらしい夏の日に。でも、なにかあるんだわ、なにかが。

「そのおかしは、わたしのおばあさまのおとくいのメニューだったのよ。」

こういってからフィリフヨンカは、テーブルの上に身をのりだして、声をひそめてささやきました。

きっと……いいえ、わたしのとこは、もちろん、これっきりなの。ごらんのとおりのくらしよ。でも、大自然のふところにだかれてはいますわ。それに……なにもかもかたづいたでしょ。そう思わないこと？」

――この人、いつもよりもあがってるわ。

ガフサ夫人は手ぶくろをぬぎながら（なにしろかの女はほんとうの貴婦人でしたから）、こんなことを考えながら、大きな声でいいました。

「まったくよ。フィリフヨンカさん、あなたのおっしゃるとおりだわ。」

それからふたりはテーブルにつきましたが、フィリフヨンカは友だちがたずねてきてくれたよろこびで、もうむちゅうでした。ですから、まるっきり意味もないおしゃべりをぺちゃくちゃやって、テーブルかけの上に、お茶をすっかりこぼしてしまいました。

ガフサ夫人は、おかしや、おさとういれや、そのほか目についたものについて、おせじをならべました。でも、花びんについては、もちろん、ひとこともいいませんでした。ガフサ夫人はそだちのいいおじょうさんでしたから、あのおこったような、とげだらけの灌木が、お茶道具とつりあわないことは、よく知っていたのです。

しばらくすると、フィリフヨンカはおしゃべりをやめました。ガフサ夫人もなんともいいません。そこで、へやの中はしいんとしずまりました。

らはしっていってドアをあけるの。それから、ふたりとも大よろこびして、おせじをいいあって、おしゃべりをするの……。
　まどをのぞいたって、浜べのずっとむこうの灯台のほうまで、人っ子ひとり、見えないかもしれないものね。ひょっとすると、ほんの小さい点が、こっちへうごいてくるのが見えるかもしれないけれど、わたし、のろのろこっちへ近づいてくる人を見るのは、すきじゃないわ。……まして、その小さい点がむこうのほうへいって、だんだん小さくなるんだったら、なおぐあいがわるいもの。そうでしょ……。」
　フィリフヨンカは、そう思うと、からだがふるえだしました。
「そうなったら、わたし、どうなるかしら。こんな気持ちは、ガフサには話さないこと。ほんとのことをいうと、あんな人とおしゃべりしても、ちっともたのしくないんだもの。だけど、この近くには、ほかに話をする友だちもいないものねえ。」
　そのとたんに、戸口をノックする音がしました。フィリフヨンカはげんかんにはしっていって、まだドアのところまでいかないうちから、さけびはじめました。
「……なんてすばらしいお天気でしょう。それに、海ときたら……あなた、海をごらんになって……なんてきょうは青くて、なんてあいそうよく見えるでしょ。さざ波ひとつたってませんわ。あなた、ごきげんはいかが。まあ、まるで光りかがやいてるわよ。こんなふうだと、あなたは

かの女は台所へいくと、せっけんとたわしを、流し台の上におきました。それから、やかんの下に火をつけると、おとっときの、金のふちをとったお茶わんをとりだしました。つぎにはおかしざらをおろして、ふっとほこりをふきはらってから、ガフサ夫人をおどろかしてやろうと思って、おかしをもりあげた上に、小さいアイスクリームをいくつかのっけました。

ガフサは紅茶にはけっしてミルクをいれないのです。それでもフィリフヨンカは、まんいちということもありますから、おばあさまのかたみの、ボートのかたちをした小さい銀のミルクいれを、おぼんの上にだしておきました。角ざとうは、しんじゅをはめたえのついた、かわいいビロードのかごにいれておきました。

それでも、お茶道具をならべているあいだに、かの女はすっかりおちついてきて、あらゆるいやな考えを、しめだすことができました。

この不幸な場所には、きれいな花がひとつも見つからないのは、まったく残念なことでした。この浜べにある植物ときたら、とげだらけのいやな小さい灌木だけで、そのけちな花は、とてもかの女の客間になんか、にあいません。フィリフヨンカは、テーブルの上の花びんを、ふゆかいそうににらんでから、ガフサ夫人がきたかどうか、まどのほうへいきかけました。

そのときかの女は、きゅうに考えました。

「いや、いや、のぞいたりしてはいけない。あの人がドアをたたくまで、まちましょう。それか

くっついてしまうし、長いすはかべぎわにはっていくし、電灯がなげる光の輪も、くらい森の中のランプの光みたいに、いかにもたよりないものでした。

　フィリフヨンカのつねとして、かの女もこちゃこちゃしたしなものを、どっさりもっています。小さいかがみだの、赤いビロードのわくにいれた写真だの、小さい貝がらとか、せとものののねこやヘムルが、かぎあみのレースの上にすわっているのだの、きぬ糸や銀糸で、うつくしいもんくをぬいとりしたものや、とても小さい花びんや、ミムラのかたちをしたきれいなお茶道具だの——そう、人生をいっそうたのしくゆたかにし、いっそうきけんのすくないものにする、ありとあらゆる品々です。

　ところが、そういうお気にいりのしなものも、浜べのこのふきさらしの家では、みんな意味とおちつきをなくしてしまうのです。フィリフヨンカは、それをテーブルの上からサイドボードにうつし、サイドボードからまどがまちにうつしてみました。でも、どこにおいてみても、かっこうがつきません。

「これで、みんなそろったね。すこしごたごたしてるけど。」

　フィリフヨンカは戸口にたって、じぶんの持ちものを見まわしてみました——せめてじぶんをなぐさめようと思って。でも、それらのしなものたちも、持ち主とおなじに、とほうにくれているだけでした。



それからフィリフヨンカは、げんかんの戸をしめると、家の中を気持ちよくすることにかかりました。

これがなかなかたいへんでした。てんじょうがとても高かったので、かげがやたらと多く見えます。まどはどうどうとして大きく、どんなレースのカーテンをかけても、どうしても、したしみぶかくはなりません。それは、外を見るためのまどではなくて、外からのぞくのにいいまどなんです。そう思うと、フィリフヨンカは、いやになりました。

そこで、せめて気持ちのいいすみっこをこしらえようと思いましたが、それがどうしても、気持ちのいいものにならないのです。家具をならべてみても、なんともかっこうがつきません。いすはテーブルのそばにぴったり

にいいセンスをもっているはずなのに、こんな殺風景な砂浜に住むなんて、まったく、がてんがいきません。ジャムにするプラムをうえるような庭もありません。ほんの小さい木とか、やぶさえもないのですから、あずま屋をこしらえるわけにもいきません。おまけに、そこからのながめときたら。

フィリフヨンカはためいきをついて、長い砂浜に、ただ波がうちよせているだけのみどり色をした夕がたの海を、とほうにくれて、ながめるばかりでした。みどりの水、白いすな、赤っ茶けてかわいている海草。大きなさいなんにおそわれた場面のセットそっくりで、安全な場所というものは、ただの一か所もないのです。

あとになって、もちろんフィリフヨンカは、それがぜんぜんまちがいだったのを知りましたがね。

このすさまじい浜べの、すさまじい家に、フィリフヨンカは、まるっきり必要もないのにひっこしたのでした。かの女のおばあさまは、まるっきりべつの家に住んでいたのですからね。でも、これが人生というものですよ、ね。

ところが、そういうことがわかるまえに、フィリフヨンカは知っている人たちにみんな、ひっこしの通知をだしてしまいました。ですから、いまさらやめるわけにもいかなかったのです。みんなはきっと、あの女はすこしばかだよ、と考えるかもしれませんものね。

わなわなふるえる手で、かの女はじゅうたんをそこにひろげてかわかすと、せっけんやらブラシやらをかきあつめて、家にはしってかえりました。五時には、ガフサ夫人がたずねてくると、やくそくしていたのです。

フィリフヨンカは、大きいばかりで、あんまりきれいでない家に、住んでいます。だれだか知らないが、古ペンキをかたづけちまおうと思った人が、この家の外がわはすっかりダークグリーン（暗緑色）で、うちがわはぜんぶ、こげ茶でぬりたくったのです。

フィリフヨンカはこの家を、家具はべつですが、あるヘムルからかりたのです。そのヘムルのいうところでは、フィリフヨンカのおばあさまが、わかいむすめだったころに、この家に住んでいたのだそうでした。

それをきくと、身内や親類の人たちにとても愛情を感じているフィリフヨンカは、さっそくそれをかりたのでした。そういう家に住むことで、おばあさまの思い出に、敬意をはらおうと思ったのです。

ひっこしてきたさいしょの晩に、かの女は戸口にすわって、いったいおばあさまはどんな人だったろうと、あやしみました。むすめのころのおばあさまは、たしかにかの女とは、まるきりちがった人だったのでしょう。ほんとうのフィリフヨンカなら、けしきのうつくしさというもの

ないだろうな。それに、いったい、きけんがせまっているというのに、あたらしいぼうしなんているかしら。どうせ死ぬんなら、ふるいのをかぶっていたって、おなじことだわ……。

フィリフヨンカはじゅうたんを岩の上にひっぱりあげると、たいらにのばして、足でふみつけて水をきりました。

天気はあんまりにすばらしすぎて、どうにもへんでした。なにかしらが、おこらずにはいないでしょう。かの女は、それを知っていました。どこか水平線の下のほうに、黒々としたおそろしいものが、まちぶせしているのです——だんだん大きくなりながら、いよいよあゆみをはやくして、こちらへ近づいてくるのです……。

「あれはいったいなにかしら。」

フィリフヨンカは、ひとりごとをいいました。むねはどきどきうち、せなかをつめたいものがはしりました。かの女は、まるで敵においかけられてるみたいに、ぐるぐるとそこらをまわりました。

でも、海はあいかわらずきらきらかがやいているし、光の反射は気まぐれに光の上でおどっています。そして、かすかな夏のそよ風が、やさしくおばさんの鼻をなでてました。

それにしても、それぐらいのことでは、なぜともしらず恐怖におびえているフィリフヨンカをなだめることは、とうていできなかったのです。

んがくるまえには、いつだって、世界は、とってもおだやかなんだから。」

おばさんは、とうとうさいごのしまのところまできました。それから、しばらく七ばんめの波でせっけんをすすがせておいてから、じゅうたんのぜんたいを、水の中からひっぱりあげました。

すべすべした岩が、したたりおちる水の下で、赤っぽく光りました。光の反射が、フィリフヨンカの足にたわむれて、十本の足指をのこらず金色にそめました。

かの女はそこにたったまま、考えました。――あたらしいぼうしがほしいわ。たぶん、赤みがかったオレンジ色のが、わたしににあうんじゃないかしら。それとも、ふるいののふちに、こんな光の反射をぬいとりしても、おもしろいわ。金で。だけど、それだとうごかないから、もちろん、おんなしには見え



あるとき、フィリフヨンカが、浜で、大きなじゅうたんを、あらっていました。
まず、せっけんをたっぷりぬりつけて、さいしょの青いしまのところまで、せっせとブラシでこすります。それから、七ばんめの波がくるのをまって、せっけんをあらいおとします。それからまた、つぎの青いしまのところまで、せっけんをぬっては、ブラシでこするのです。
お日さまがぽかぽかと、せなかをあたためます。フィリフヨンカはほそい足できれいな水の中にたって、こすりにこすりました。
じゅうたんをあらうのにもってこいの、とてもおだやかな夏の日でした。ねむたそうな波が、ゆっくりところがってきては、かの女のおせんたくをたすけました。かの女の赤いぼうしのまわりでは、ぶんぶんばちがブンブンやっていました。フィリフヨンカを、花とまちがえたんですね。
それでもかの女は、しんこくな顔をして考えました。
「だまかされてはだめよ。わたしゃ、世の中ってものを、よく知ってるんだから。大きなさいな

この世のおわりにおびえるフィリフヨンカ



心をきずつけられて、もうすこしでなきだしそうになっていたのです。
「パパ……、あの子ったらね……パパは信じないだろうけど、ぼくはもう、千年たったって、あんなとこへいくもんか。」
こういってからホムサは、あらあらしくつけくわえました。
「あいつ、ぼくをペテンにかけたんだよ！ まるっきりのうそをならべてさ！ あんなうそをきかされると、むなくそがわるくなっちまう。」
おとうさんは、なぐさめるようにいいました。
「まったくさ。うそというやつは、ときによると、まったくふゆかいなもんだからねえ。」
それからふたりは、家にかえって、のこっていたおやつを、すっかりたいらげたのでした。



といったのは、ホムサのおとうさんでした。

「こんな時間におさわがせして、まことにすみませんが、うちの子をお見かけにならなかったでしょうか。すえから二ばんめのぼうずですが……。」

「その子なら、長いすの下にいるわよ。」

と、小さいミイがいいました。

「さあ、でておいで。だれもしかりやしないから。」

こう、ホムサのおとうさんはいいました。

「まあ、長いすの下にかえ。」

おばあさんは、すこしばかりうんざりしたようにいいました。

「そりゃ、まごがたずねてくるのはうれしいし、ちっちゃいミイが、ここへあそび友だちをつれてくるのは、かまいませんよ。でも、あそぶのは、夜ではなくて、昼間にしてほしいねえ。」

「どうもすみません。このつぎには、この子は朝のうちにおじゃまさせます。」

こう、ホムサのおとうさんは、いそいでいいました。

ホムサは長いすの下からはいだしました。でも、ミイのほうは見もしませんし、ミイのおばあさんも見ません。まっすぐに戸口にむかっていくと、階段をおりて、やみの中へでていきました。

かれのおとうさんが、むすことならんで歩きました——なんにもいわないで。ホムサはひどく



たの。どうしてみんなは、わたしをしずかにねむらせてくれないんだろうね。」
おばあさんはとても年よりで、おこっていて、大きなまっ白いねまきをきていました。それからげんかんの戸口へいって、それをあけていいました。
「どなた？」
「こんばんは。」

と、ホムサはなき声をだしました。

「おあいにくさま。ここにはもう場所がないわよ。」

小さいミイがこういったとき、外のドアをたたく音がしました。

「おかしいな。すきかってにはいってこられるドアなのに、それをたたくなんて。」

こういって小さいミイは、ためいきをつきました。

ホムサは洋服だんすのところへとんでいって、その上によじのぼろうとしました。ドアをたたく音が、またもやしました。

「ミイ子、だれか戸口にきているようだよ。」

おくのへやから、声がしました。

「わかってる、わかってる、わかってるわよ。」

ミイはおくのへやへむかってどなっておいてから、ホムサに説明しました。

「あれがおばあちゃんよ。あの人がまだ口をきけるなんて、きせきだわ。」

ホムサは客間につうじるドアを、じっと見つめました。すると、それがぶきみな小さい音をたてて、のろのろとひらきました。ホムサはぎゃっとさけんで、長いすの下にもぐりました。

でてきたおばあさんは、いいました。

「ミイ子、げんかんに人がきてるっていったじゃないかえ。おや、なぜまたじゅうたんをまるめ

「そんなこと知らねえや。」
と、ホムサは小さい声でいいました。かれはすこしふるえていました。
「そんなこと知るもんか……。」
「あたいのおばあちゃんのからだには、いちめんにあいつがはえてるのよ。おばあちゃんは客間にいるわ。ほかにしようがないじゃないの。大きなみどり色のかたまりみたいになっちゃって、口ひげがいっぽうのはしからとびでているだけですもの。」
こう、小さいミイはいいました。
「はやく、そのじゅうたんをまるめて、ドアにおしつけなさいよ。きっと、それでふせげるわ——たしかとはいえないけれど。」
しんぞうはひどくどきどきするし、手はしびれてしまったものだから、ホムサにとって、じゅうたんをまるめるのは大しごとでした。
家のどこかで、とけいが、ゆっくりと時をきざんでいました。
「あの音は、きのこが大きくなるときにたてる音よ。あいつらはぐんぐん大きくなって、しまいには戸をつきやぶるんだわ。そうしたら、自由にあんたにとびかかれるものね。」
ミイはこういって説明しました。
「ぼくもたんすの上にあがらしておくれよう。」


Tove

「だれかさんには、ばかみたいに見えるかしれないわね。だけど、あたいにとっちゃ、こうしているのが、おそろしい運命をのがれる、ただひとつの手だてなのよ。」

こういってから女の子は、たんすのふちから身をのりだして、小さい声でささやきました。

「いきたきのこが、もう客間にきているのよ。」

「えっ！」

と、ホムサはいいました。

「ここから見ると、あいつたちが、そこのドアのうしろにすわってるのが、よく見えるわ。まちぶせしてるのよ。あんた、そこのじゅうたんをまるめて、すきまにつめこんだほうがいいわ。でないと、あいつたち、ひらべったくなって、ドアの下からこっちのへやへ、はいこんでくるわよ。」

こう、小さいミイはつづけました。

ホムサはのどになにかがつかえるのを感じながら、いっしょうけんめいにいいました。

「そんなこと、うそだい。いきたきのこなんて、けさまではいなかったんだ。ぼくが発明したんだもん。」

「あんたが発明したって？　へえ。」

と、小さいミイは、ばかにしたようにいいました。

「あのねばねばするやつ——あついもうふみたいに大きくなって、だれにでもくっつくやつを？」

それはまるい家でしたから、たぶん、ミムラかだれかの家なのでしょう。ホムサは戸をたたきました。二ども三ども、たたいてみました。でも、だれもでてきません。そこで戸をあけて、中へはいっていきました。

家の中はあたたかくて、こざっぱりしていました。まどがまちの上にランプがのっていて、外のやみを、いよいよ黒々と見せていました。どこかでとけいがカチカチやっています。大きな洋服だんすの上には、とても小さいミムラがはらばいになって、こちらをじっと見おろしていました。

「へーイ、ぼくは危機一髪というところでたすかったんだぜ――どろへびと、いきたきのこからさ。きみなんか、想像もつかないだろうけどね。」

こう、ホムサはいってみましたが、小さいミムラは、だまってひにくそうにこちらを見ているばかりでした。それからきゅうに、その女の子はいいました。

「あたい、ミイっていうのよ。あんたのことは、まえに見たわ。ふとった小さい赤ちゃんのおもりをして、なんかしきりにいっては、手をふりまわしていたじゃないの。ははは。」

「そんなことは、かってだい。きみはなぜ、そんなたんすの上にのっかってるの。まるで、ばかみたい。」



「いや、いけない。」

ぬまのずっとむこうのほうに、あかりがひとつともっていました。ゆうれい馬車じゃありません。小さい四角なまどがあって、ちゃんとしたあかりがともっていたのです。

ホムサは、じぶんでじぶんにいいきかせました。

「あそこへいこう。はしらないで、歩いていくんだ。はしると、こわくなるもの。なにも考えないで、ただ歩いていくこと。」

したようです。ヒースのしげみの上に、赤い火花がとびました。それから、ギーギー、ゴトゴトやって、だんだん速度をましてくるようです。

「はじめはちっとも気がつかなかったがなあ。だけど、いまはたしかにやってくるんだ。にげろ！」

かれの足にふみつけられて、草のほはなびき、くだけました。黒い水たまりが、すげのしげみの中から、大きな目で、かれを見つめました。足指のあいだで、どろがぴちゃぴちゃはねました。

「どろへびのことは、もう考えないこと！」

ホムサはつぶやきましたが、それだけはっきりとつよく、どろへびのことを考えていたのです。すると、すぐさまへびたちが、あなからはいだしてきました――口ひげをなめまわしながら。

「ぼく、ふとっちょの弟みたいだったら、よかったのになあ！」

ホムサは絶望してさけびました。弟の、あのふくらんだおなかと、すなや土をたべているすがたばかり、思いだしたのです。あの弟は、いちどなんか、ふうせんまでたべようとしましたっけ。もし、あれをたべたとしたら、赤ちゃんはもういなかったでしょうがね。

そのことを思いだすと、ホムサはちょっとはしるのをやめました。まるまるした赤ちゃんのすがたが、空高くにうきだしたからです。かなしそうに手足をつきだして、口からは糸をたらしています……。



んがひとりだちのホムサであることを、じぶんに見せたかったからです。

ぬまは青い色というよりも、ほとんど黒くなり、空はみどり色でした。地平線には、お日さまがしずんだあとの、あかるい黄色いしまが一本見えていて、その光がぬまをおそろしく大きく、ものさびしく見せていました。

「もちろん、ぼくは、うそなんかつきはしない。敵だって、どろへびだって、ゆうれい馬車だって、みんな、ほんとうなんだ。おとなりの人や、庭番や、めんどりや、ぼくのスクーターがほんとうなのと、ちっともかわりやしない。」

ホムサはこんなことをつぶやきながら、せかせかと歩いていきました。それから、とつぜんにたちどまって、耳をすましました。

どこか遠くのほうで、ゆうれい馬車がころがりだ

そこでホムサは、お日さまがしずむといっしょに、ねどこにいかなくてはなりませんでした。もちろん、パパとママにたいしては、すっかりはらをたてていました。ふたりはこれまでにも、いくどもむすこにたいして、つまらないことをしました。でも、こんどほどばかなまねをしたことはなかったのです。

ホムサは、家をとびだすことにしました。パパとママをこらしめてやろうというのではありません。ただもう、親たちがどんなにおろかで、なにがたいせつなことだかきけんなことだか、すこしも理解する能力がないのを感じて、きゅうに、いやけがさしてしまったのでした。

「あの人たちは、なんでもかんでもまっすぐに線を一本ひいて、線のこっちがわのものはすべてためになる、信用のできることだとして、線のむこうがわのものは、みんなでたらめで、役にたたないとするんだ。よし、こうなったら、死ぬまでにらみあいだぞ。」

ホムサは階段をおりて、こっそりと庭にしのびでながら、こんなことをつぶやきました。

「見ていろ、おったまげさせてやるから。でなけりゃ、うん、どろへびだ。いつか、あいつを一ぴき箱にいれて、おくりつけてやろう。ガラスのふたをしてね。だって、のみこまれちまったら、かわいそうだものな、まったく。」

ホムサは親たちからいくのをとめられている、れいのぬま地まで、もどっていきました。じぶ

「さあさあ、やめて、おねがい——。」
と、おかあさんはいいました。
「だから、おわりがよければ、ぜんぶがいいわけだい。——ところで、今夜はおやつがあるの？」
と、ホムサはうれしそうにいいました。

　これをきいて、おとうさんはきゅうにおこりだしました。
「おまえにゃ、やらん。うそをついてはいけないってことがわからんうちは、おまえには食事をさせんぞ。」

　ホムサはびっくりしていいました。
「もちろん、うそをついちゃいけないさ。うそをつくのはわるいことだもの。」

　そこへ、おかあさんが、口をはさみました。
「あなた、わかったでしょ。この子に、お夕飯をたべさせてやりましょうよ。まるっきりなにもわからないんですもの。」
「いや、ぼくが夕飯ぬきだといったら、夕飯はぬきだぞ。」
と、おとうさんはいいました。というのは、かわいそうにこのおとうさんは、じぶんがいちどいったことをひっこめたものなら、むすこはけっして父親を信用しないだろうと、かたく思いこんでいたからでした。

んで、せっせとすなをたべているではありませんか。
「こいつ、うそをついちゃいけないって、あれほどいってきかせたのに！」
こう、おとうさんがいうと、おかあさんはきんきん声でききました。
「ぴしゃりとやってやりましょうか？」
「たぶんね。だが、いまのところは、それほどまでにしなくもいいんじゃないか。もしこいつが、うそつきはわるいことだとみとめさえすればね。」
おとうさんがこういうのをきいて、ホムサはいいました。
「ぼく、うそなんかつきやしないよ。」
「おまえは、赤ちゃんがへびにのまれたといったのに、のまれてなんかいないじゃないか。」
おとうさんは、といつめました。
「わあ、すてき。」
と、ホムサはいいました。
「そうじゃない？　パパだってうれしいでしょ。ぼくはとてもうれしいな。赤ちゃんがたすかったんだもの。あのどろへびってやつは、だれだって、あっというまにのみこんじゃうんだよ。パパだって知ってるでしょ。あとには、なんにものこらないんだ。かなしみと、夜のやみと、ハイエナが遠くでわらう声のほかにはね。」



ムサの赤ちゃんよりも、どろへびはずっとたくさんいるんだもの。」
「まあ、へびだって？」と、おかあさんは大きな声をだしました。
　でも、おとうさんはいいました。
「心配するなよ。こいつはまた、でたらめをいってるんだ。おれがいつもいってるじゃないか。」
　それからおとうさんは、いそいでまどの外をのぞいてみました。すると赤ちゃんは、庭にすわりこ

なにばかだもの。もしあいつがどろへびにたべられたら、ぼくにはもう、赤ちゃんの弟がなくなって、ぼくがいちばんのちびさんになるんだ。」

かれはなきじゃくりながら、はしりました。こわさでかみの毛からは、ぽっぽとゆげがたちました。かれは中庭をはしりぬけると、たきぎ小屋をすぎて、げんかんのふみ段をかけあがりました――ありったけの声でさけびながら。

「おかあ！　おとう！　赤ちゃんがたべられちゃったよう。」

ホムサのおかあさんは、とても大きな人でしたが、心配性で、しょっちゅう心配ばかりしていました。

いま、むすこのことばをきくと、おかあさんはとびあがって、うわっぱりにいれていたおまめを、ゆかじゅうにこぼしてさけびました。

「なに、なんだって。なんだっていうの。赤ちゃんはどうしたのさ。おまえ、見ていなかったの？」

ホムサは、いくらかおちついていいました。

「赤ちゃんは、ぬま地のどろのあなにおちちゃったんです。そうしたら、すぐさまどろへびがでてきてね、赤ちゃんのまるまるふとったかわいいおなかにまきついて、あの子の鼻をくいきっちゃったの。うん、ぼく、きもをつぶしちゃった。だけど、どうにもしようがないでしょ？　ホ



鼻をくんくんやると、ただしい方角がわかったので、かれはそちらへむかって歩きだしました。

歩いているうちに、ちらと、どろへびと、いきたきのこたちのことが、頭にうかびました。あいつらは、よく人のあとをつけてくるんです。そう思っているうちに、そいつはそこにあらわれてきて、こけの上をはしりだしたではありませんか。

かなしい気持ちで、ホムサは考えました。

「こいつらは、赤ちゃんの弟なんか、ただのひとのみで、のみこんじゃうんだ。たぶん、もうのみこんじまったかしれない。なにしろ、どこにでもいるんだものなあ。どうか、いちばんわるいことがおこったのでなければいいが。でも、まだのぞみがあるぞ——救助隊をだして、弟をたすけなくちゃ。」

かれははしりだしました。

「かわいそうな赤ちゃん。あんなに小さくて、あん

「このぬま地は、はてしがないぞ。」
と、ホムサは思いましたが、じっさい、小さいホムサにとっては、はてしがなかったのです。そうかって、おとなのホムサなら、そんなところへいきはしませんさ。
――だけど、ここがなぜきけんだか知っているのは、ぼくひとりなんだ。ここはゆうれい馬車が、大きなおもたい車で、ゴロゴロころがっていく場所なんだ。御者を見たものはないけれど、ほら、遠くからゴロゴロいう音がきこえてくるじゃないか……。
「いや、いけない！」
と、ホムサはじぶんでじぶんをさえぎりました。みぞおちのほうから、とつぜん、恐怖と寒けが、つきあげてきたのです。一秒まえには、ゆうれい馬車なんて、どこにも存在しなかったのです。だれひとり、そんなもののことは、きいたこともありませんでした。ところが、かれがそれを思いついたとたんに、ゆうれい馬車がそこにでてきたのです。どこか遠くで、くらくなったらころがりだそうと、まちかまえているのでした。
「ぼく、いっそ、ぼくはもう十年もじぶんの家をさがしまわってるホムサだと、こう思いたいなあ。」
　こう、かれはつぶやきました。すると、そのとたんに、じぶんの家はきっとこの近くにあるにちがいないと、そんな気がしてきました。

た。
かれはなにかにだまされていたような気がして、考えました。
「赤んぼの弟なんて、いないほうがいい。あいつらは、大きくなってから生まれてくるか、でなけりゃ、まるっきり生まれないことだ。あいつらは、ぜんぜん戦いというものを知っちゃいない。戦いというものがわかるまで、箱の中にでもいれておくべきなんだ。」
みぞの中には、水がたまっていました。そこでホムサはたちあがって、水の中をわたりはじめました。
大きな、とても長いみぞでした。そこでかれは、南極を発見することにして、どこまでもすすんでいったのです。一日は一日と、だんだんつかれがひどくなりました。なにしろ、食料も水もおわってしまったからです。しかも、運がわるいことに、しろくまが足にくいつきました。
それでも、とうとうみぞは、大地の中にきえて、おわってしまいました。
だしぬけにホムサは、南極にきていたのです。
かれのたっているところは、ぬま地でした。
ぬま地は灰色と暗緑色で、ところどころに、黒く光った水たまりがありました。白いわたすげがいちめんにはえて、まるで雪のように見え、ちょっとかびくさい、いいにおいが、そこらにただよっています。

「おまえは、二どとうちへかえれやしないぞ。おまえのほねは、大草原にころがって、雨や風に、白くさらされるんだ。おとうとおかあは、ないてないて、なみだでおぼれ死んじまう。おまえのかたみは、なにひとつ、のこりゃしない。まるっきりのこらないか、ほんのちょっぴりのこって、それを見つけたハイエナが、ほえるだけのことさ。」

赤ちゃんのホムサは、口をあんぐりあけて、大きい息をつくと、なきだしました。

あにきのホムサは、その声をきいて考えました。

――このなき声じゃ、そうとう長くつづくぞ、って。

そこでかれは、弟をそこにおきざりにして、みぞの中を、もっとさきへはっていきました。敵がどこにいるか、その敵がどんなすがたをしているかなんてことは、すっかりわすれていまし





た。でも、ホムサは、「えいっ！」とばかりに、それをつきころしてやったのです。

　その活躍と興奮とで、かれは息をきらして、みぞの中にすべりおちました。そうして、まるでかえるのように、ひっそりとそこにすわりこむと、いっしょうけんめいに耳をすましたのです――しまいには耳鳴りがして、頭がわれそうになったほどに。

　でも、ほかの斥候たちは、ちっともさわぎません。だけれど、そのあいだにも、草の中をぬけて、おしだまってこちらへすすんできます。そこは、プレーリーの大草原でした。そして、敵の数はかぞえきれないほどなんです。

　そのとき、みぞのふちにいた弟が、きゅうにいいました。

「にいちゃん、うちへかえろうよ。」

　あにきは、むっとしていいました。

「マングローブ（熱帯の海岸に発達する森林）のぬま地にいったら、おまえはどんな色になりたいと思うんだ。青かい？」

「これはちしゃだね。」

と、弟はいいました。

「そのちょうしでいくと、おまえはたちまち、おとなになるな。パパやママみたいになって、さぞ世間の役にたつことだろう。そうなったら、おまえはただありきたりのことしか、見たりきいたりしないんだ。いっとくけど、そりゃなんにも見もせず、ききもしないってことだぞ。そうなったら、もうおしまいだな。」

こう、ホムサはいいました。

「ふん。」

こういって、赤ちゃんのホムサは、土をたべはじめました。

「そいつはどくだぜ。」

あにきはぶっきらぼうにいって、それからつづけました。

「この国のくだものだって、みんなどくがはいってるんだ。それに、見ろ、みんながおれたちをわらいものにしてるじゃないか。これも、おまえのおかげさ。」

えんどうまめのうねをこえて、ふたりの斥候が、鼻歌をうたいながら、こちらへやってきまし

うら庭のかきねのそばを、ホムサのすえから二ばんめの子が、はっていました。ときどきたちどまっては、敵がいやしないかとあたりを見まわしてから、また、さきへすすみます。弟の赤ちゃんホムサが、そのあとから、はっていきます。

やさいばたけのところへくると、ホムサは土の上にひらべったく身をふせて、ちしゃの葉っぱのかげに、横すべりにかくれました。こうするよりほかに、なかったのです。なにしろそこらには、敵の斥候がうようよいましたし、なかには、空をブンブンとびまわっているのもいましたから。

「ぼく、からだじゅう、まっ黒になっちゃったい。」

と、赤ちゃんの弟がいいました。

「いのちがおしかったら、だまってろ。」

と、ホムサはうしろをむいて、小さい声でいいました。

ぞっとする話



ウーの耳が、ちょっとはなれたところに見えて、こうさけぶのがきこえました。
「チェーリオ。ムーミントロールに、ぼくからよろしくとつたえてください。ぼくは、ありったけ、いきるのをいそがなくちゃならないんです。もうずいぶん時間をむだにしちまったもんでね。」
　それっきり、ティーティ＝ウーはいってしまいました。
「ふうん。よし、わかった。」
と、スナフキンはひとりごとをいいました。
　それからあおむけにねて、春の空をながめました。かれのま上は、すんだこん色をしているし、木のこずえの上のほうは、海のような色をしています。かれのぼうしの下のどこかで、あのしらべがうごきはじめました。——第一部はあこがれ、第二部と第三部は春のかなしみ、それから、そうです、たったひとりでいることの、大きな大きなよろこびでした。

つんです。だって、それはただおこるんじゃなくて、ぼく、ティーティ＝ウーにおこるんですからね。そして、ティーティ＝ウーであるぼくが、それについてあれこれと考えるわけですからね。——ぼくのいうことが、わかりますか。」

「わかるよ、わかるよ、よかったねえ。」

と、スナフキンはいいました。

ティーティ＝ウーはうなずいて、またやぶの中をガサガサやりはじめました。

「ぼくはね、まだ、ムーミントロールをたずねていくとちゅうだったんだよ。じっさいのところ、ぼくはあいつにあいたくてしようがないんだもの。」

こう、スナフキンはいいました。

「あれ、ムーミントロールって？　ああ、そうか。」

「たぶんきみは、ぼくが出発するまえに、なにかの歌をききたいんじゃないの。それとも、お話のほうがいいかね？」

スナフキンがこういうと、はい虫はやぶの中から頭をつきだして、いいました。

「お話？　うん、いいですね。たぶん、今夜おそくにね。いまはぼく、とってもいそがしいもんで——どうぞおかまいなく。」

そういって茶色のしっぽは、ヒースのしげみにかくれましたが、すこしすると、ティーティ＝

と、ティーティ＝ウーがやぶの中から頭をつきだして、答えました。
「ヘロー、そりゃうれしいな。だって、ぼく、あんたに見せたいものがあるんだもの。ごらんよ！　名ふだですよ、ぼくの名まえが書いてあるんです。ぼく、じぶんで家をもつようになったら、戸口にかけておくんだ。」
こういって、はい虫は、持ち主の名まえを書いたしらかばの皮を、スナフキンに見せながら、おもおもしくいうのでした。
「すてきでしょ？　みんながそういうんですよ。」
「とっても！　じゃあ、きみはじぶんの家をもつんだね？」
「そうですとも！　ぼく、かあさんの家をでて、あたらしい家をつくりにかかったんです。なんてすばらしいんだろ！　ね、わかるでしょ、ぼくはこれまで、そこらをとびまわるときによばれる名まえをもっていただけなんです。そりゃ、あれやこれやのことを、あれこれと感じたけれど、すべては、ぼくのまわりでただおこっているだけで、そんなものは、みんなくだらないことだったんです――。そりゃたのしいことも、そうじゃないこともあったけどさ。それがね、あなた……。」
スナフキンは口をはさみかけましたが、はい虫はそれにかまわず、なおもつづけました。
「ところがいまは、ぼく、一個の人格なんです。だから、できごとはすべて、なにかの意味をも

そこで、いつものように願をかけようとしました。――あたらしい歌ができますようにとか、ときどき道にまよったときにしたように、あたらしい道を教えてくださいとか。ところが、そのとききゅうに思いなおして、かれは声高くさけびました。

「どうか、ティーティ＝ウーが見つかりますように。」

そういって、三回ぐるっとまわると、あき地をつっきって、林の中へはいり、丘へのぼっていきました。すると、なにかがしげみの中でガサガサやりました。なんだかあかるい茶色をした、毛むくじゃらなものでした。

「ティーティ＝ウー！ ぼく、おしゃべりをしたくてもどってきたよ。」

こう、スナフキンがおだやかに声をかける



とと、じぶんの答えたことばとが、のこらず、さいしょから思いだされてくるだけでした。

　とうとうかれは、たちどまりました。午後になると、くるりとむきをかえて、ぎゃくもどりをしはじめました。

　しばらくいくと、だんだん気分がよくなってきました。スナフキンはいよいよ足をはやめました。しまいには、ふうふうあわをふいてはしりました。

　かれの耳のあたりを、小さいしらべたちがとびちがいましたが、つかまえるひまがありません。夕がたになって、あのしらかばの林にもどると、かれは大きな声でよびはじめました。

「ティーティ＝ウー、ティーティ＝ウー。」

　夜鳥が目をさまして、答えました——ティー、ウー、ティー、ウー。けれども、はい虫はすこしも返事をしません。

　スナフキンはあっちへいき、こっちへいきして、そこらを見まわして声高くよんでは、耳をすましました——あたりが夜のやみにつつまれてしまうまで。

　ほそい三日月が、林のあいだのあき地にのぼりました。スナフキンはそれをながめながら、とほうにくれてしまいました。

　そのとき、ふと思いつきました。

「あれは新月だぞ。ぼく、願をかけよう。」

「どうしてあいつらは、おかあさんといっしょに家にいないんだろうな。」
スナフキンはおこったようにいって、もみのえだの上に、あおむけにねころがりました。しばらくすると、もういちどおきあがって、よんでみました。そうして長いこと、じっと耳をすましていましたが、それからぼうしを鼻の上までずりさげると、ねむりにおちていったのです。

あくる朝、スナフキンは、また歩きだしました。つかれていましたし、きげんもわるかったので、かれは右も左も見ないで、どんどん大またに北をめざしていきました。あの春のしらべは、ほんのとっかかりさえもが、頭にうかびませんでした。

ただもうスナフキンは、あのはい虫のことしか考えられなかったのです。あの虫がいったひとつひとつのことば、じぶんがいったひとつひとつのことばまで、かれはよく思いだすことができました。それで、それをくりかえしくりかえしかみしめていたため、とうとう気分がわるくなって、こしをおろしてやすまなくてはなりませんでした。

「ぼくはいったいどうしたんだ。こんな気分になったことは、いちどもないぞ。きっと、病気になったのにちがいない。」

こう、スナフキンは思いました——はらだたしい思いと、こまったような気持ちで。

それからまたたちあがって、歩きだしましたが、やはりおなじことでした。あの虫のいったこ

さけんだのです――スナフキンのせなかを、ぞくぞくっとふるえがつたわったほどに。

それから、茶色のしっぽが、ちょろちょろとやぶの中にきえて、あたりはひっそりとしずまりました。

「おやおや。」

と、スナフキンはいって、たき火をけとばしました。それからパイプの灰をおとすと、たちあがってさけびました。

「おうい、もどっておいでよ。」

しかし、林の中はひっそりしています。うん、よし、とスナフキンは思いました。おまえだって、いつもあいそうがいいというわけにはいくまい。そういうことは不可能だ。時間だってないんだ。しかしとにかく、あのはい虫は、名まえをもらったんだ。

スナフキンは、もういちどそこにすわって、小川のひびきと沈黙に耳をすましながら、じぶんの歌がもどってくるのをまちました。

でも、それはもどってきませんでした。つかまえるには、もうあまりに遠くへいってしまっていることが、すぐにスナフキンにはわかりました。おそらくかれは、二どとそれをつかまえることはできないでしょう。かれの耳にきこえてくるのは、しゃべりにしゃべっている、あのはい虫の、しつっこい、内気な声だけのように思われたのです。

したんだから……。」
「そんなことはない。」
スナフキンは、こういって、はらをたてて考えました。——なぜみんなは、ぼくをひとりでぶらつかせといてくれないんだ。もしぼくが、そんな旅のことを人に話したら、ぼくはきれぎれにそれをはきだしてしまって、みんなどこかへいってしまう。そして、いよいよ旅がほんとうにどうだったかを思いだそうとするときには、ただじぶんのした話のことを思いだすだけじゃないか。そういうことを、どうしてみんなは、わかってくれないんだ、と。
こうしてふたりは、しばらくおしだまっていました。夜鳥が、もういちどさけびました。とうとう、はい虫はたちあがって、小さい声でいいました。
「うん、ぼく、いかなくちゃいけないんだね。じゃ、チェーリオ。」
スナフキンはすこしもじもじしてから、いいました。
「チェーリオ。ねえ、きみ、きみのたずねた名まえだが、たとえば、ティーティ゠ウーじゃどうだね。ティーティ゠ウー、はじめはあかるくて、おわりはすこしかなしそうにおわるんだ。」
小さいはい虫は、たき火の光をうつした黄色い目で、じっとスナフキンを見つめました。虫はその名まえをよくよく考え、あじわい、耳をかたむけ、いわばその中にもぐりこみました。それから鼻づらを空にむけて、しずかにそのあたらしい名まえを、とてもかなしそうに、うっとりと



いか、もうあんたがくるかくるかと、まちかねているんだってね。だれかがあんたにあこがれていて、もういちどあいたいあいたいと思ってまっているのを知るのは、さぞ気持ちのいいことでしょうね。」

「気がむきゃ、いくさ。だけど、ぜんぜんいかないかもしれない。おそらくぼくは、べつのとこへいくだろうな。」

　こう、スナフキンは、あらっぽく答えました。

「まあ！　さぞあの人はかなしむでしょうね。」

と、はい虫はいいました。

　はい虫の毛皮がかわいてくると、それはやわらかになり、あかるい茶色になりました。かれは、もういちどランドセルにさわって、おずおずとききました。

「あんたはたぶん……あんなにたくさん旅を

そしたらあんたは、まずだいいちばんに、ぼくの名まえをきくじゃないの！　ねえ、たぶんあんたは……いや、ぼくの名まえを考えてくれるのは、ずいぶんめんどうなことでしょうね。もちろん、ぼくひとりのもので、ほかのものはだれもつかえない名まえですよ。さあ、今夜考えてくれない？」

スナフキンは口の中でもぐもぐいって、ぼうしを目の上までひっぱりおろしました。だれかが、長い羽をひろげて小川をとびこえて、林のあいだで、長い、かなしい、さけびをあげました――。

「ヨー、ヨーオー、ヨー、ヨーオー、ティウー……。」

「おまえさん、あんまりおまえさんがだれかを崇拝したら、ほんとの自由はえられないんだぜ。ぼく、よく知ってるがね。」

こう、だしぬけにスナフキンがいいました。

「あんたがなんでも知ってらっしゃることは、ぼく、知ってます。」

こういって、はい虫は、なおさら近くはいよってきました。

「あんたは、あらゆることを見てきたんだもの。あんたのいうことは、いちいちもっともです。そしてぼくは、いつでもあんたみたいに自由になりたいと、ねがってきたんです。……それでいま、あんたは、ムーミン谷へでかけるとちゅうでしょ――あそこでひとやすみして、友だちにあうためにさ。ぼく、やまあらしにきいたんだけれど、ムーミントロールは冬眠からさめるがはや

かれの歌は、もうだめになりました。ひとりだけでなくなったので、すべてがかわってしまったのです。スナフキンはきゅっとパイプのえをかみしめて、しらかばの林のあいだを見つめていましたが、ほんとうのところ、目にはなにもうつりませんでした。

それなのに、はい虫はむじゃきにいうのでした。

「あんたが音楽をやりたいんなら、ぼくには、ごえんりょなく。あんたは思いもしないだろうけど、ぼく、きれいな音楽が、とてもききたいんです。そんなの、きいたことがないんだもの。でも、あんたのことは、きましたよ。やまあらしや、クニュッテや、ぼくのかあさんから。みんなが、話してくれたんです……。クニュッテなんか、いちど、あんたを見かけたんだって！そうですよ、あんたには想像もつかないだろうけど……それはここでは大事件だったんですよ。それで、ぼくたち、いくどもいくども、ゆめに見たんです……。」

「へえ。それで、きみはなんて名まえ？」

と、スナフキンはききました。どうせ今夜はだめになったのだから、気らくに話をしようと思ったのです。

「ぼく、あんまり小さいもので、名まえをつけてもらえなかったんだ。」

こう、はい虫は、興奮していいました。

「もちろん、これまで、ぼくに名まえをきいたものなんか、ありやしません。ところがいま、あ



れなのにスナフキンは、あんまりおどろいていたため、手をだしてたすけることも思いつきませんでした。
それでも、やせっぽちで見ばえのしないその虫は、とうとうこちらの岸にはいあがって、ガチガチ歯を鳴らしながらいいました。
「へーイ、あんたにあえてとてもうれしいよ。」
「へーイ。」
スナフキンは、あいかわらずそっけなく答えました。
「あんたの火に、あたってもいいでしょ？」
はい虫は、顔を幸福でかがやかしながら、こういってきました。
「まあ、考えてごらんなさいよ。そうすればぼくは、スナフキンさんのたき火にあたった、はじめてのはい虫になるんです。ぼく、一生そのことをわすれませんよ。」
はい虫はにじりよってくると、かた手をスナフキンのランドセルにかけて、声をひそめてささやきました。
「この中に、あんたのハーモニカがはいってるの？　もってきてるんでしょ？」
「そうだよ。」
と、スナフキンは、むしろむっとした声でいいました。

その目は、かれのやることを、さも感心したように、いちいち見ているのです。スナフキンは、なんだかおちつかなくなりました。そこで、前足をうちあわせて、どなりつけました。

「しいっ、あっちへいけ。」

ところが、はい虫は木の根っこのところから、ちょろちょろとはいだすと、とてもはずかしそうにですが、いいました。

「あんた、ぼくがこわいんじゃないでしょうね。ぼく、あんたを知ってるよ。あんたはスナフキンでしょ。」

そういったかと思うと、はい虫はいきなり水の中へはいって、川をわたりはじめたではありませんか。川はその虫がわたるには、すこしひろすぎましたし、水は氷のようにつめたいのです。みるみるうちに、虫は足場をうしなって、ひっくりかえりました。そ



ですから。
「うん。まず、おさらをあらったほうがいいな。それから、パイプに火をつける。――やがてキャンプファイアももえつきて、夜の動物たちが、たがいにあいてをよびはじめる。そのときに、歌はつかまえればいいんだ。」

スナフキンはシチューなべを、小川であらいはじめました。そのときに、きゅうに一ぴきのはい虫が目につきました。その虫は、川のむこうの木の根もとにすわって、じっとこちらを見ていたのです。その目は、ひどくおびえた色をしていましたが、でも、とても興味を感じたらしく、スナフキンのからだのうごきを、いちいちおいかけていました。

ざんばらなかみの下の、二つのおずおずとした目。だれにもかわいがられたことのない人間のそれのような目つきでした。

スナフキンは、あいてを見なかったふりをしました。それから、火をかきたてると、もみの木のえだを二、三本きって、その上にこしをおろし、パイプをとりだして、火をつけました。

それから、夜の空にむけて、たばこのけむりを二つ三つはきだすと、春のしらべがやってくるのをまちました。

ところが、それが、なかなかやってきません。そのかわりに、はい虫の目がじっとじぶんを見つめているのを、ひしひしと感じるのでした。

ろ。小さいやつほど、すばしっこいんだなあ。」
スナフキンは、こんなことをつぶやきました。
そのうちに、かわいたきりかぶが一つと、かれえだが四、五本見つかったので、かれは小川のそばで、キャンプファイアをもしました。
スナフキンは、いつでもじぶんの食事は、じぶんでにるのです。そうして、よっぽどのことがなければ、他人のためには食事はこしらえてやりません。他人の食事のことなんか、気にしないのです。とにかく、みんなのいうところでは、そうでした。
それからまた、みんなはいすやテーブルにつくのが大すきで、なかには食事のときにナプキンまでつかうものもありましたが、スナフキンには、そんなものはいりません。あるヘムルなんかは、食事のたびごとに服をきかえるとききましたが、そんなことはとんでもないほらだと思っていました。
あんまりおいしくもなさそうに、スナフキンは、そまつなスープをのみました。そのあいだにも、かれの目は、しらかばの木のそばのみどり色のこけを、じっと見るともなく見ていましたっけ。
歌のしらべが、すぐ近くまできていたのです――やすやすとしっぽでつかまえられそうに。でも、いそぐ必要はありませんでした。それはもうとりかこまれていて、にげることはできないの

ているかと思うと、それから大きなおどかすような音をたて、つぎには流れがとまったかと思うと、とけた雪をほおばって、のどをゴロゴロ鳴らしては、だしぬけに大きくわらうのでした。
スナフキンは水をすったこけのそばにたちどまって、耳をかたむけながら考えました。
「ぼくのしらべの中に、小川の音もいれなくちゃいけないな。そうだ、リフレーンにつかおう。」
だしぬけに、たきの近くにあった小石がくずれおちて、小川のしらべを一オクターブ高めました。
「わるくないぞ。こんなふうにやるんだ。流れのとちゅうでの、だしぬけの変化。ぼくはこの小川に、小川そのもののしらべを見つけてやらなくちゃ。」
スナフキンはふるぼけたシチューなべをとりだすと、たきから水をくみました。それからもみの木の下へいって、たきぎをさがします。
地面はまだ春の雪どけと雨とで、ぬれていました。そこでスナフキンは、かわいたえだを見つけるには、ばらやぶの下まではいこまなくてはなりませんでした。
ところが、かれが、そこへもぐりこんだとたんに、だれかが、するどいさけびをあげてとびだすと、いなずまよりもはやくスナフキンのそばをかすめて、もみの木のあいだに、にげこみました。——そのあいだにも、やすみなしにキーキーさけびながら。
「そうだ、はい虫や森のなかまが、そこらじゅうにいるんだっけ。みんな、なんて神経質なんだ

そのとき、林のもうすこしおくのほうで、小川がサラサラ流れている音をききつけました。
そこでスナフキンは、その音のするほうへすすんでいきました。
お日さまのさいごの光が、しらかばの林の中に、きえていきました。いよいよ、ゆっくりと青く、春のたそがれがやってきました。林のすがたはかわり、しらかばの白いみきは、青いもやの中に、いよいよ遠くかすんでいきます。
小川は気持ちのいい川でした。
きよらかにすんだ水が、去年の落ち葉の茶色のしきものの上や、とけのこった小さい氷のトンネルをぬけ、青いこけの中をくぐったりしながら、小さなたきとなって、まっ白なすなを見せたたきつぼの中へ、まっさかさまにおちていきました。ところによっては、それはかの鳴くようなブーンという声をたて



そのとき、スナフキンはほんのすこし心配になって、足をとめました。

そうです。ムーミントロールは、いつでもなにかをまって、あこがれています。ムーミントロールは家にいて、スナフキンのくるのをまちこがれ、スナフキンを崇拝しているのです。それでいて、いつでもいうのでした。

「もちろんきみは、自由でなくちゃね。きみがここをでていくのは、とうぜんですよ。きみがときどきただひとりになりたいという気持ちは、ぼく、よくわかるんだ。」って。

そのくせ、そういいながらもムーミントロールの目は、かなしみでまっくらになり、だれがどうなぐさめてもだめなんです。

「ああ、あいつはいいやつだなあ、あいつは！」

スナフキンはこうつぶやいて、また道をつづけました。

「うん、あいつはいいやつだ。あのムーミントロールってやつは、まったくおセンチだからなあ。だけど、いまはあいつのことは考えまい。あいつはほんとにすばらしいムーミンだけれど、いまはあいつのことを考えてはいけないんだ。今夜は、ぼくのあたらしい歌のことだけを考えること。あしたはまたあしたの風がふくさ。」

まもなくスナフキンはムーミントロールのことは、すっかりわすれることができました。かれは、キャンプするにいい場所をさがして、そこらをくんくんかぎまわりました。

二つの部分は春のかなしみ、そのあとはひとりで気ままにぶらつくことの大きなよろこびです。

この歌は、スナフキンがぼうしの下で、もういくにちも、あたためてきたものでした。でも、まだ外へとりだす気にはなれなかったものなんです。それがだんだんふくらんで、幸福な自信にまでなるのを、またなくてはいけませんからね。そうなったら、ただもう、くちびるをハーモニカにあてがえばいいのです。すべてのしらべが、それぞれ適当な場所に、すぐにとびだしてくるはずです。

それなのに、もしはやめにだしてしまったものなら、しらべはとちゅうでひっかかって、はんぶんしかいいものになりません。でなければ、まるっきり気分がこわれてしまって、つまらなくなってしまいます。歌のしらべというものは、なかなか気むずかしいものなんです。とりわけ、それがたのしくって、同時にかなしい歌でなくてはいけないときには、ね。

だけれど、きょうの夕がたの気分は、スナフキンには自信がありました。しらべは、もうほとんどできあがって、そこにまっていました。しかも、スナフキンがいままでつくった歌のうちでも、いちばんすばらしいものになりそうでした。

それができあがったら、ムーミン谷についたときに、あの橋の手すりにこしかけて、うたってみましょう。そしたら、きっとムーミントロールが、すぐさまいうことでしょう。

「いい歌だねえ、ほんとにいい歌だねえ。」って。

三月のすえの、あるよくはれた、おだやかな日のことでした。北へ北へとめざしてきたスナフキンは、まだ山の北がわに雪がきえのこっているあたりまできました。
かれは、南の故郷をでて、小鳥がさえずっているのなんかをききながら、だれにもあわずに、一日じゅう歩いてきたのです。
歩くのは、たいして苦労じゃありませんでした。――ランドセルはもうほとんどからでしたし、心には、なんの気にかかることもありませんでしたから。林は気持ちがいいし、お天気はすばらしいし、スナフキン自身はしあわせでした。
あしたも、きのうも、遠くはなれていました。おまけに、いまはお日さまがきらきらと赤く、しらかばの林のあいだにかがやいていて、風はやわらかく、さわやかでしたもの。
「こりゃ、歌をつくるのにもってこいの夕がただぞ。」
こう、スナフキンは思いました。あたらしい歌です。――さいしょの部分はあこがれ、つぎの

春のしらべ

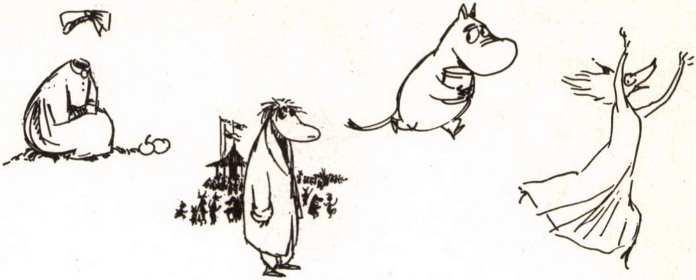



ニョロニョロの
N.W.
N.E.
W
E
S.W.
S
S.E.
おさびし山
ほらあな
砂洲
ライラックのしげみ
たきぎ小屋
ジャスミンのしげみ
ムーミンやしき
たばこばたけ
MAP OF MOOMIN VALLEY
ムーミン谷の地図
Tove









もくじ





DET OSYNLIGA BARNET

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

ムーミン谷の仲間たち

トーベ＝ヤンソン／作・絵
山室　静／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

ムーミン谷の仲間たち

トーベ＝ヤンソン／作・絵
山室　静／訳